川柳塔

昭和二十年一月九日　第三種郵便物認可
平成二年三月二十五日　印刷
平成二年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七五五号

日川協加盟

No. 755

同人特集・花百句

四月号

川柳カレンダー・全国川柳（誌上）大会

名誉会長　**坂本　一胡**（元ＮＨＫ会長）
会　長　**佐藤　正敏**（川柳研究社顧問）

〈選者〉
渡邊蓮夫　野村圭佑　尾藤三柳
礒野いさむ　西尾栞　去来川巨城
斎藤大雄　大野風柳　山田良行
吉岡龍城　佐藤正敏　宮崎慶子
（順不同）

【投句方法】投句無料。雑詠（未発表に限る）ハガキに三句。雅号・住所氏名・性別年令記入・一人一枚に限る。

【締め切り】平成二年四月末日必着のこと。

【発表】平成二年十一月十五日「川柳カレンダー」紙上。

【表彰】入選作・作者氏名は「カレンダー」に掲載します。
A上位入賞者には①表彰状②入賞の盾③選者揮毫色紙④主催者記念品が贈られます。
Bその他の入選者も作品・作家氏名が掲載されます。

【投句先】〒194-01 東京都町田市金井町四二四
日本伝統美保存会文化部
「川柳カレンダー」全国川柳大会事務局

おわび
平成二年の「川柳カレンダー」は、各方面に多大なる反響を呼び、発行と同時に即日完売となりました。そのためお送りできずお申込みを頂いた多くの方々に、心からおわび申し上げます。

第14回全日本川柳宮城大会

日　時　6月10日（日）午前10時開場
会　場　松島中央公民館（宮城県松島町磯崎）
会　費　三、〇〇〇円（昼食・記念品代共）
宿題　第一部（事前投句・5月10日締切）
「言　葉」　ちば東北子　選
「時　計」　加藤翠谷　選
「結　ぶ」　渡邊蓮夫　選
3・5×18センチの句箋1枚に1句ずつ記入。各題2句、無記名。封筒に住所氏名を明記し、投句料一、〇〇〇円（定額小為替、現金書留）同封。
投句先　〒542　大阪市中央区谷町7丁目1—39
新谷町第二ビル二〇六
日本川柳協会大会係あて
宿題　第二部（当日出句・締切正午）
「踊　る」　古川一高　選
「重　い」　藤沢岳豊　選
「温もり」　西田柳宏子　選
「約　束」　本山哲朗　選
各題2句・各部の各題とも未発表作
前夜祭　6月9日（土）午後6時～9時
会　場　松島センチュリーホテル
費　用　五、〇〇〇円

鑑賞

西尾　栞

過日、円照寺山村御流の華道展を鑑賞する機会を得た。

素晴しい清楚で奥の深い、空間を活かした御流に感動した。不要の枝を剪り、たった一輪残した花。省略の文学として研修している川柳と相通ずるもののあることを発見した。

我が師麻生路郎は「川柳は人間陶冶の詩である」と定義した。椙元紋太は「川柳は人である」と教え、川上三太郎は「句とは所詮、あげくのはてのもの」と言うている。俳句の高浜虚子は「俳句は存問の詩である」と教えている。

この度鑑賞した御流の華は、すべて客を、相手を、もてなすに至れりつくせりであった。即ち客に対する、心にくいまでに余裕のある空間を与えて語りかけていた。

佳句とか名句とかいうものは、最後まで言うてしまわずに、鑑賞者に、色々な想像と語らいと、空想の世界に遊ばせるものである。

陶冶された聖らかな心で活けられた花

人格をもった花

あれでもないこれでもない、あげくのはての昇華した花

相手の気持を慰め、安否を問う心やさしい

中に孤高を守った花

心ゆくまで鑑賞した自分は、心足ら得た一日であった。

釣り花や言葉すくなのおもてなし　栞

百合活けて気配り多き立居かな　〃

藪柑子故里近き暮の道　〃

白菊一本咄々語る老画伯　〃

座右の句

菊の壺　薔薇の壺より物思う　（薫風）

私の句

掛軸の夢の一字に思うこと　辻川慶子

川柳塔　四月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　鑑賞……西尾　栞……(1)
ひめゆりの心……田中正坊……(2)
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選……(4)
自選集……(31)
■川柳太平記(143)　川柳の群像　長野文庫……東野大八……(36)
■連載　柳籠裏三篇研究（三丁）……(38)
日本の最短詩―武玉川調（一）……阿達義雄……(40)
■同人特集「花百句」……(42)
水煙抄……黒川紫香選……(48)
秀句鑑賞「同人吟……宮口笛生……(35)
　　「水煙抄……永田俊子……(69)
銀河系……河内天笑選……(70)

ひめゆりの心

田中正坊

二月下旬の三日間、沖縄県へ旅行した。私は沖縄が日本に復帰した翌年の一九七二（昭和四十七）年、那覇市で開かれた歴史教育者協議会全国大会への参加を兼ねて沖縄を訪れており、十八年ぶりの再訪ということになる。

遠近にかかわらず旅行した折、私はつとめて記念館・資料館・博物館などの施設と史跡を見学することとしている。その土地について知っておかねばならないこと、土地の人が大切にしているものが一目で分かるからである。今回のような観光バスによるツアーは、総花的にあちこちを見て回るだけにおわってしまうので、あわただしい日程の一日をさきハイヤーの案内で、本島南部の戦跡にある県立平和祈念資料館とひめゆり平和祈念資料館を訪れた。

県立資料館は一九七五（昭和五十）年の設立なので、前に来た時にはできておらず、かねがね話に聞いて、ぜひ見学したいと思って

■女性コーナー　茴香の花……八木千代選…(74)
初歩教室「若い」……辻　白渓子…(78)
「　真　」……矢野佳雲選…(80)
一路集「花　束」……後藤正子選…(80)
「引　く」……神谷凡九郎選…(81)
平成元年度　一路賞受賞作品・受賞のことば……(82)
平成元年度　各地柳壇賞受賞作品・受賞のことば……(83)
各地柳壇（佳句地十選／井上柳五郎）……(84)
行ってきましたオーストラリア……小池しげお…(76)
淡路島吟行……都倉求芽・内芝登志代…(96)
本社三月句会……(98)
柳界展望……(102)
四月各地句会案内……(103)
■編集後記……(104)

座右の句

人肌のお燗人肌なつかしや　（甲　吉）

私の句

睫の上にのんのんと雪降り積もる　小寺花峯

いた。館内に入ってまっさきに目についたのは、錆びついた日本軍のスクラップ兵器の山で、戦争直後の沖縄の山野がオブジェで再現されている。全住民を戦火にまきこみ、当時の人口の四分の一にあたる十五万人が非業の死をとげた〝沖縄戦〟の全容が数々の遺品、写真、パネル、証言集によって展示されており、鎮魂を祈るのみであった。

ひめゆり資料館の方は、ひめゆり学徒隊の母校である沖縄女子師範・県立第一高女同窓会が県内外の有志の協力を得て建設したもので、昨年六月にオープンしたばかり。観光コースにも入っている「ひめゆりの塔」のすぐうしろにある。校門と校舎を模した真新しい館内の展示は、〝戦争と教育〟をテーマに構成され、第二展示室には南風原陸軍病院壕、第四展示室には学徒隊の多くが散華した第三外科壕が実物大に復原されていた。

私はこの二つのジオラマの前でしばし釘づけとなり、質素な服装の婦人の説明に耳を傾けた。この人たちは一般のガイドではなく、九死に一生を得た学徒隊の生存者がひめゆりの心を語り継ぐために奉仕しているということで、切々たる訴えが強く胸を打った。これだけの立派な施設が民間の力で設立され、運営されているのも、素晴らしいの一語につきる。四月一日は、沖縄本島西海岸に米軍が怒濤のように上陸した日にあたる。

川柳塔

西尾栞選

今治市　矢野佳雲

女性上位今にヒミコの世に戻り
一喝をして父親にある孤独
貴方って馬鹿ねと気儘聞いてくれ
町医師のキャリア患者は三代目
来年の話優しい鬼が聞く
任せてはいてもちょいちょい足を踏み

竹原市　森井菁居

ギャンブルに託す愚かな逆転打
文章にすればのどかな無人駅
父の私語届けてくれる春の月（一周忌）
妻と来た画廊で明日の虹を買う
メキシコへ発つ娘激しい気性持つ（二女）
銀婚のキャリアさ妻の変化球

西宮市　西口いわる

妻に勲章贈る気持はあるらしい
花活けて見ても納まる腹でなし
嫌な人に逢うにも女紅を引く
菜の花よ可愛い嘘は許される
山茶花に囲まれている坂の家
チョコレートゲームの中に少し愛

堺市　中川滋雀

せめへもの一善マッチを持ってます
笑うたら負けにこだわることもない
雪の夜は故郷へつなぐ糸電話
シグナルの青に余命を預けとく
催促の出来ない義理がからみ出す
ありがたい辛抱法話がまだ続く

鳥取県　林露杖

真情を吐露して酒に酔うてます
諍いのあとの高ぶり牡丹雪
農政に減反以外手のなきや
消費税やれ政争の具とするな
冷凍精子寒さに強い児ができる

わが家でもペレストロイカ考える

大阪市　神夏磯　典子

幸せは鎖の範囲しか知らず
胡蝶蘭寒い話は知りません
捕物帖好きね炬燵にからかわれ
雀には自由に翔べる空がある
抱き上げる孫の未来は何色か
生命線の長さ信じている余生

豊中市　安藤　寿美子

老夫婦相手の予定すぐ忘れ
もう二月まだ二月かと置炬燵
大阪は舞台装置のような雪
お月さんそれが地球の影ですか
自己嫌悪年齢のせいやと言いたがる
老夫婦いまだにツッパリ合うている

松原市　谷垣　史好

内出血の如く消えゆく片恋か
流氷が去り幻の恋も去り
むなしいといえばむなしいポップコーン
もう一度男に生まれレスラーに
マルクスのお伽噺がなつかしき
当人も死んだ気がせぬ突然死

竹原市　小島　蘭幸

旅の鞄は軽くて春の中にいる
幸福が続く風車がまわる
記念日を忘れ誕生日を忘れ
水車コトコトやさしさごっこなら負けぬ
鬼退治の仲間がいつも集まらぬ
栄枯盛衰島の銀座の灯が暗い

八尾市　高杉　鬼遊

人前で喧嘩をしない夫婦雛
消費税不足でハガキ舞い戻り
大臣になりたい首をすげ替える
ごまかしが効かぬわが家の食糧費
珈琲代おんな癒着を嫌うなり
生かされるてだてのくすり十余錠

岡山県　嘉数　兆代賀

天の使者地の使者春が光り出す
破れ太鼓打つ虚しさは何だろう
敗けて勝つ拳はいつもふところに
一件落着空の碧さが目に沁みる
生きていくたび人に疲れて人を恋い
姑と歩いた道です今日は嫁といく

倉敷市　小野　克枝

一灯を頼りに影がつきまとう
心まで売ってはならぬ深い息
熟年へ中流らしく胸を張る
助け舟出して炬燵に耳があり
たん瘤を撫でてまだまだ欲があり
ひとり旅うみはひろいなおおきいな

和歌山市　松原寿子

水道の飛沫のなかに春がある
何も彼も一途な馬鹿で生きている
耳朶へ愛の炎は溶け易し
玉葱のひと皮にある告白よ
続編へ塩少々が効いてくる
引き際の波に念いを試される

松原市　玉置重人

にこやかな笑顔候補者かも知れぬ
カルチャーの嫁の電話は孫の守り
街の子の未練は雪が溶けはじめ
猫の仔の売れくちがない長話
省略の最たるものに豆の数
税金がちょっと還ったうどんすき

和歌山市　西山幸

言いたいことを言ってしまった戻り寒
ながでんわ無言電話も春のせい
讃美歌がなぜか破調になってくる
亡父の日と亡母の日があり生きている
自画像をいつも他人の眼で視よう
たった一人をゆるようとして赦せない

尼崎市　春城年代

富士山の額がなん年来かかる
きょうも暮れる背なを押されているように
人の情けが少うし重い雪になる
酸性雨浴びてどこまで耐えられる

夫婦ふたり誰はばからぬ湯の香り
気散じな老母にひとつの泣きどころ

米子市　林荒介

舫綱　遠く近くに居る他人
ここも雨だったわたしの通過駅
面を干す三尺高い木の砦
見送った心の襞を厚く塗る
打楽器の音にはじけるそこかしこ
岸づたい身近な人が居てくれる

下関市　石川侃流洞

思い上ると明日の風が修羅になる
主権在民叫ぶ高さが気に喰わぬ
ひとつずつ名湯変えて母の風呂
落花紛々そろそろ遺書を書こうかな
いい話ないかと駐在さんが来る
舗装路が街を砂漠にして伸びる

豊中市　田中正坊

華やかに少女が脱皮する四月
来年が古希だ古希だと言いふらし
古希の希は稀にはあらず希望の希
自由化の波におびえている案山子
ペンだこがまだまだ消えぬ父の指
わが生涯ペンひとすじに啄木忌

兵庫県　辻文平

酒とろり消していきたい今日の悔い
少し狂うたリズムの中にいる安堵

さよならがしたくて探す花言葉
明日の彩ばかり女の絵の具皿
ばァさんの念仏怖いものがない
逢うたとてピンク一色だけの視野

和歌山市　福本英子

指先もボタンの穴もだらしない
ただ飲める誘いへ乗った軽い靴
胃に溜まる小石ぐらいですむ痛み
亡父のケロイド大きく選挙真っ盛り
合格通知母が玉葱きざんでる
締切りへマラソン映像今佳境

西宮市　門谷たず子

いい人と思うてくれる低い鼻
射程距離に置いた妻子が翔びたがる
受験の子に話す言葉を胸で撰る
ミニトマトわたしの恋もこのような
父の背が光る創業四十年
終章にどんでんがえしがこぬように

松原市　小池しげお

金婚へ消えない帯の結びじわ
刑務所に兄弟がいる馬の骨
ろくでない男を女放っとけず
軍事費がまた膨らんでいる鳩よ
大げさなお世辞を聞いてきた胃散
乾杯とひと言言えばいい乾杯

和歌山市　桜井千秀

満たされて犬と語らい深くする
陽の当たる部分は刺を抜いておく
逃げる気はないが締めてる靴の紐
他人との比較でポジション決めてくる
後ろから目かくしする手温かい
折りにふれ貴女の賢さに疲れ

島根県　小砂白汀

春一番ヒステリックなトタン屋根
なるほどと思うところに巣をつくり
網棚へ骨壺おいたままで降り
好きですと言えば笑われそうで止め
米国が逆立ちしてもコシヒカリ
人里で咲いてみたかろ山ざくら

伊丹市　樫谷寿馬

いま一つ足らないとこが有って好き
ほっといて僕には信じるとこがある
どことのう肌に合うてるあみだ池
ちょっとだけ嫌味を言うて握手され
ほんまかいなと話を合せてくれる友

京都市　松川杜的

横綱になっても無口なおらない
手も足も口もなかなか米寿かな
市場籠に家来のように従いて行く
千円貯金で郵便局の名を集め
古希過ぎて孫と同んなじ手本書く

倉吉市　奥谷弘朗

生き甲斐を感じる趣味のある誇り
薬にも毒にも成らぬ部に入り
喝采を望む程には冴えぬ芸
合槌は打つが真心などは無い
ぎりぎりの線で妥協を迫られる

米子市　林瑞枝

薄ぎぬのドレスが似合う娘も花も
人間の悲しきエゴよ花鋏
桐箪笥の亡母のコントは明るいね
オブラートに包んだ意見身に沁みる
ボーリング六十は若い張り切ろう

大阪市　江城修史

人生というたそがれの腎不全
盾となる妻が素顔に戻る夜
振り向かぬ背中ばかりを見て暮す
樺太の別れを雪の日に憶う
人の世の乱れも知らず雪が降る

美禰市　安平次弘道

風船が割れて童話が続かない
吃水の深さ疑うのは止そう
有頂天　魔女に梯子を外される
そろばんを弾き本音を小出しする
握る手の温さに解けるわだかまり

大阪市　西出楓楽

小ぶしきかせて上手に愚痴を言う女
援軍をあてには出来ぬ下り坂
自慢にもならぬたっぷりした昼寝
完全主義と本人だけが思ってる
人の世やタカがトビ産むこともあり

柳井市　弘津柳慶

祝日に自治会長宅だけ国旗出し
ホコロビを縫って兵舎を思い出し
つまらないドラマを消して冷酒で寝る
ガスレンジお湯を沸かすだけのもの
妻の意地共産党へ投票し

鳥取県　西村早苗

ヘアピンを拾った縁が今もなお
逢いたいと留守の電話に言うておく
母の子でえくぼはちゃんと二つある
ふたまわり違いぐらいでなぜいけぬ
リンゴむく銀のナイフが気に入らぬ

島根県　堀江正朗

一歩ずつ今を光にして暮らす
日向ぼこ桜さくらを眼裏に
酒とろり花の心に包まれて
楽天家らしくて妻の荷が重い
盃で流した悔いは明日の糧

島根県　堀江芳子

桜百選　斐伊川さらさら活気づく
触感に春を捉えた夫の声
正朗と呼ばれ生き抜く深い闇

またしても女房失格ゴメンナサイ
魚屋で会いお肉やで会う午後三時　堺市　河内月子

自己管理しっかり出来ている元気
きれいごと言うておれない車事故
いい顔をした分だけが胃にたまる
二三日考えますとそれっきり
すれ違いざまにどっちも値踏みする　堺市　高橋千万子

バーゲンがすんでウインド春に入る
老人にめんじてと言う助け舟
今日までのとんとん拍子だったグチ
だまされた方にも落度あった欲
登るより眺めるものに雪の山　京都市　都倉求芽

暖冬の年でもやっぱり春を待つ
何所産と言うてもみんなハウスです
温室の中で世間を批判する
福笑いの幸せが美人にありますか
冷蔵庫卵が主の顔でいる　鳥取県　川崎秋女

春ですネもう春ですネうちの猫
身籠った猫と二月の日向ぼこ
梅咲いたことを日誌の片隅に
泣き黒子母がもってた離婚歴
薔薇百本よりもひとつの情け欲し　廿日市市　林野甦光

花の間へ座す白足袋の自惚れ屋
打切った妥協に沈む角砂糖
春は魔物でアバンチュールの芽が動き
神に力を試されている四面楚歌
美しいラベルで一人罠に堕ち　笠岡市　松本忠三

参考にされるわが家は中の下か
埋め合わせひょんな処で義理をたて
顔よりは心が綺麗いい男
聞き捨てにならん刄を向けただけ
僕んちは母ちゃんだけがよう叱り　倉敷市　稲田豊作

目が醒めて今日は楽しいスケジュール
風あたり避けて中間色を着る
薔薇色の思いだったと懐古談
お祖父さんは大黒柱と嫁の言う
なるようになるさ気楽なご年輩　藤井寺市　吉岡美房

チョコレート夢見て卵立てている
選挙戦党利党略私利私欲
子供の日三月三日主張する
男の子だろうがこけりゃ痛いんだ
ポケットにジョーク一杯詰めて春　奈良市　宮口笛生

六十の妻の口にはもう勝てぬ

赤ちゃんがねてる二月のぬくい部屋
行違い遅れる雪の待避駅
美しい話をくれた春の風
茶柱が立った老人会の顔

尼崎市　春城　武庫坊

武蔵野の月に招かれ犬散歩
冗談が通らず雪は降り続く
誤字のある絵馬に神様思案する
青い鳥来るから窓を開けておく
極楽に出す履歴書の下書きを

名古屋市　越村　枯梢

立話　午後のコーヒー忘れられ
川柳より阿弥陀経に熱を上げ
ポックリ寺の和尚三年寝たきりで
年下の男ばっかり訃報欄
棺の中で吐く駄洒落は貯めておく

東大阪市　森下　愛論

足腰の替わりに口だけ達者です
政見へ補聴器しっかと身構える
コンパクト割れて女の罪一つ
ハーレムの夢へ孤老の逞しさ
成仏をしているらしく夢も見ず（七妻三回忌）

大阪市　津守　柳伸

二三日ハワイへ飛んだしのび逢い
自己主張に徹し膝から降りぬ猫
大根がおいしく炊けて友がない
人柱おとぎ話は遠くなる
ショッツル鍋かこむ民話に暮れる雪

仙台市　川村　映輝

何時死んでも天寿と言われる年になり
この顔が嘘つく顔かとウソをつき
色欲が失せても物欲まだ残り
読書専念雨も静かにふっている
社会党野党で居るから生きられる

名古屋市　大林　曲ん手

妻賛歌他人は嗤っているけれど
もう一度逢いたくて来た風の辻
落ち椿叱られました泣きました
無趣味です定期預金をまた一つ
死火山になると男は廃ります

京都市　山本　規不風

思い切り女の主張をシクラメン
美しい古希の美人の賭ける賽
カルチャーの論文に出す不倫
離婚届と雪割草が置いてある
梅林で逢うた帰りを寺に寄る

松江市　恒松　叮紅

朝シャンが異性の話寄せつけず
友情を大切にします黄水仙
待合室で躾の悪さ見てしまい
昭和史の中で神様俗化する
ぼけてない証拠感激するドラマ

松江市　舟木与根一

くじ付きの賀状で今年も運が逃げ
吹雪く夜は鍋で家族をたしかめる
首都圏の雪のニュースは一〇センチ
カタカナが多く庶民意味不明
人並みにゴミを出さぬとはずかしい

松江市　柳楽鶴丸

セクシャルハラスメント昔からありました
表札の主はマカロニー症候群
退職後義理チョコでも有難い
蛙の子は蛙お人好しの子は私
最高のポーズは雲の峰ですする

和歌山市　堀端三男

人柄を偲び焼香の列に佇つ
秘めごとをすると少女の顔になる
連休を待ってる若さスキー靴
バレンタイン合格チョコが売れている
にっこりと溜ったツケを渡される

和歌山市　牛尾緑良

花切って切って私を追いつめる
仮につけてとっても重い鬼の面
重心が時々狂う夫婦雛
綾取りの糸は知ってる落し穴
春一番子等は巣立ちを考える

和歌山市　垂井千寿子

ライバルの後へぴったり付いている
マドンナ旋風うちも隣もお据分け
長命の秘訣仕入れる同窓会
ロボットに限界がある救い
しらふでは言えぬ苦手を男持ち

和歌山県　寺田裕美

愛ほしいお金も欲しい靴を履く
不倫聞く汚れた耳へ風通す
それからの敷居を高くした啖呵
例えばのはなしに虹をかけられる
マジシャンの鳩を笑っているカラス

和歌山市　田中輝子

さだまさしのレコードを買う寂しい日
髪切って想いの遂げた貌になる
歳月を満たしてくれた金魚の死
母の膝かりると丸くなる話
わたしに似た末っ子がいて落ち着けず

米子市　小西雄々

求愛へ鶴は火の舞い繰り返す
披露宴晴れ着の値踏みされていた
指切りげんまん一会の風に騙し合う
戒名へ無理をしたなと香を焚く
パチンコに負ける姿は子に見せぬ

米子市　青戸田鶴

朝夕に雪の大山ありがたし
目立たないようにひいてる朝の眉
れんげ菜の花亡母のおもいに近くなる

ばらばらな意見まとめてきた帽子
男らしくなった太郎の喉ぼとけ　米子市　寺沢みど里

雪積んで凜々しくなった故郷の山
一筋の光信じて家守る
おおよその時間は当てる砂時計
マフラーで喉をかばって出直そう
春風の噂にゆれる軒しのぶ　米子市　田中亜弥

芸の無い私こまめに生きている
あの世との連絡とれぬまま春へ
トゲのある言葉は喉も大きらい
首のない地蔵おがみに旅に立つ
高い塀まわれば看守立っていた　米子市　菅井とも子

選抜の話に飽きぬ元球児
つり上げることも無くなり老母の眉
何事も無かったように梅が咲く
今年こそ朝顔咲かそ窓の下
味方から謀反出そうで眠れない　米子市　澤田千春

雪どけの小道が妙にあたたかい
極楽行きの道は夕陽がきれいだろ
仮面ぬぎピエロは月と夜明けまで
あわてるとますます森へ迷い込む
世話になる鍵を時々みがいとこ　米子市　光井玲子

花便りデートの場所は決めてある
定型にこだわりすぎる父の画布
笛吹きケトル母の味方がふえました
梅干しになっても母はありがたい
便り待つ都忘れのひとり言　八尾市　宮西弥生

石一つ二つ積んで詫びこころ
好きだから先に詫びることにする
長くなる日あしへお隣灯がつかぬ
水ぬるむ大きく山が動き出す
こわい橋渡って来ました盲導犬　八尾市　内海幸生

むつかしい言葉の真意がそれだけか
知らぬほど怖い敵なし自若たり
真夜中の間違い電話でひいた風邪
本当に好きなメニューで任されぬ
値切らない客へは塩を送るまい　八尾市　宮崎シマ子

告白のチャンス舞台は春朧
空振りの恋ばかりして無精髭
割箸なら用意してある不意の客
胃カメラが見て来て呑んで良いと言う
目分量で母はたしかな味をつけ　八尾市　鷲見章

大声で足りる我が家にドアホーン

休肝の日を慰める酒の粕
足元の犬と屋台の関東煮
カルチャーの後も楽しい喰べ歩き
梁上の君子を許すペルシャ猫

唐津市　田口虹汀

福だけで鬼は描かない縁起物
天と地を指して釈尊花に酔い
佐世姫になり加部島を振り仰ぐ
泰然と歌留多読んでる老いの坂
三党は寄れど文珠の大欠伸

唐津市　久保正敏

納采や平成二年のシンデレラ
ときめきがも一つ足りぬチョコレート
友達に警官が居て安らげず
本筋をホローしている聞き上手
助けての声は聞こえぬことにする

唐津市　仁部四部

ゴトゴトと靴を探して入学す
ゴトゴトと会議の裏ののし袋
ゴトゴトと単身赴任二十五時
ゴトゴトとスーパー今日は友の会
ゴトゴトとカタログ漁る月給日

唐津市　筒井朴竜

市に荷出す花束結え夜露打つ
朝市で選ぶ花束露含み
花まつり山門くぐる老い二人
甘茶酌む縁日茶屋の串だんご
花まつりビデオは孫の稚児姿

唐津市　浜本義美

大寒にナマコの値段手が出せず
暖冬一変して旧正は雪の中
おい鴉お前寒くて鳴けぬのか
浄土には逝きたくはなし酒はなし
物忘れ次第に増して木の芽どき

唐津市　浜本ちよ

体重は減ったがしわがどっと増え
スタートは同時貧富の差の多き
来年も再来年まで夢見てる
防備など何にも要らぬ友が出来
大根だきわが家毎日寺供養

寝屋川市　江口度

優勝へ賞品どかんとやりすぎる
着付教室しばらく流行る松の内
雪ゆきユキ無医村ひたすら祈るのみ
おしゃれして大根一本買いにゆき
天井の蠅うごかない風邪の床

寝屋川市　柴田英壬子

脇役に徹し言葉を選っている
牧師の胸をすり抜けた杏の実
痴人の愛半分読んだまま別れ
文机でぼんやり式部真似てみる
ナイトクリーム三つき持たせる量を採り

寝屋川市　稲葉冬葉

弱肉強食春には春の花
ジャジャ馬にまだたどりつく海がない
出直しの首へ真珠のイミテーション
かあさんを踏台にしていいのです
美しい嘘は相互扶助になり

寝屋川市　岸野あやめ

わるい夢妻も許してくれました
ファッションは変れど中身変えられぬ
デパートを二軒ひやかす万歩計
うどんだと思えとカメラ飲まされる
ランドセル競争の世へあゆみ出す

島根県　榊原秀子

布団干し冬の陽ざしに恵まれる
姑の癖ほめてもみたりくさしたり
人形づくりときどきエレキバンがいる
生姜売りのおじさん来なくなり久し
三月は嫌い別れが多いから

島根県　錦織文子

宍道湖に灯り写して城下町
朗々たる吟詠を聞く梅日和
決めかねている事のあり春炬燵
遠く住む娘らを思えりひなあられ
古里の小川にごして芹を摘む

島根県　石田清泉

水墨の霞が僕を弄び
骨を折ることを知らずに骨が折れ
名筆に遊びもあって気が和み
春華私実日本の四季が戻らない
国富んで胡瓜も旬をまごつかせ

島根県　松本文子

決意したことにはふれず切る電話
これしきというに涙が邪魔をする
環状線ああの時のあの駅だ
人生いろいろ唄い終らぬのに別れ
朝になってみれば許せることばかり

島根県　松本はるみ

目は描かぬ紙人形に嫉妬して
捨てにゆくプラトニックを春の野に
花吹雪わたしの野心はどうなるの
故里は遠ししょっぱい割子そば
東海の島に金あり平和病

島根県　北川民子

夫婦とも馬鹿がついてて笑い合い
ストレスを溜めた涙腺つまりがち
メルヘンを追うてリンゴの丸噛り
うかつにもクシャミしてからツキが逃げ
自信満々ひとつ位は持つもよし

出雲市　吉岡きみえ

水仙の一途な想い春を呼ぶ
温情をいただく今朝の寒玉子
仲違い黒子の糸にあやつられ

逢うて来て私にもどる紅を拭く
雪ダルマスリムになってゆく速さ　出雲市　園山　多賀子

生かされて恥じぬ言葉を模索する
平成も二年空念仏に過ぎぬよう
皺の数ほどの馬鹿にはなりきれぬ
事勿れ主義の夫に婦随する
三寒四温一人芝居が未だ続く　出雲市　板垣　夢酔

しつように癌白骨へ燻りぬ
説教の餡に身内の恥を入れ
ブレーキで命拾いをしたは株
かしましい食事オバタリアンご一行
ローンでミンクを買うたうさ晴し　岸和田市　原　さよ子

通院も足止めになる今朝の雪
何気ない孫の仕草に息子見る
友に出す手紙切手の柄を選る
バレンタインのチョコはリボンで飾られる
ガン封じ神妙に鈴受けておく　岸和田市　古野　ひで

のほほんと気楽に余生過したい
つきあいがよくて今年も風邪をひき
歳時記に一月風邪と書いておこ
昨日より今日快方の薬包紙
老夫婦洗い張りする春の庭

嫌いではないとわからぬことを言い
窓口が医者より長く聞いてくれ
嫁さんが来ます島中沸いている
丸儲けのような話を持ってくる
十二頭どうやらみんな勝つつもり　岸和田市　岩佐　ダン吉

六道の辻も雪です旅ひとり
もち肌のどこへそんなに嘘を貯め
死神にほれられました癌でした
ペット代りにうちでも愚妻飼ってます
祈らねば夢が蒸発してしまう　鳥取市　両川　洋々

猫となら話が出来る倦怠期
日曜のピアノに悲しい音はない
言うなりになれば確かに和はたもて
ハイと言う返事絆として生きる
百姓貴族田んぼと話す用がない　鳥取県　松下　たつみ

美しい笑顔にとても適わない
牡丹雪恋の足跡消すように
腕白に育つビデオが追いかける
友だちは頭の下がる人ばかり
親馬鹿の父が眠ったふりをする　鳥取県　土橋　螢

休んだら自分に負ける長い坂　西宮市　林　はつ絵

一病が他人の痛みをわからせる
シャネル5を一度だけなら買ってみた
マージャンに手作り弁当持ってゆく
字書き虫まだ川底は見ていない

西宮市　奥田　みつ子

真心にリボンをかけたシクラメン
手作りを贈られ返すものがなし
成人式子の助走路の石拾う
後悔も少し残った旅かばん
バックミラー今日のお客は話し好き

大阪市　河井　庸佑

流行に押され基本を忘れかけ
ひと言が多い男で嫌われる
失敗を話して油断戒める
歯に衣着せぬ男で憎まれず
片隅に置いてもやっぱり目立つ花

大阪市　本間　満津子

受験の娘へせめてと祖母は花を買う
一部始終聞いて一緒に泣いただけ
始めから判っていたとはもう言えず
譲り合う美徳ちっとも片付かぬ
中流さん犬にも敬語つこうてはる

大阪市　黒田　真砂

入院して

よき友を得て倖せの夕茜
相部屋に川柳語る友が出来

人の情け身に沁みばらの香り満つ
オペ終了やっとベッドの暖かさ
逆転をしても届かぬ竿の先

大阪市　藤田　頂留子

桜咲く酒もだんごも手をたたき
外出は時代劇見てからにしよ
お大師に呼ばれるまでは生きて行く
四つんばいにはって居るかも来世紀
どうせならましなウソをと眼が笑う

大阪市　大塚　節子

餅花もうすらさむげに小正月
永雨降る音もひそかな竜田川
美人ママ常連客には孫のこと
言い訳の電話で一言多かった
貴方とは何故かボタンのかけ違い

大阪市　井上　白峰

借りに行く嘘へことわる方も嘘
落ちつかぬ心を隠すサングラス
もう泣かぬ女が喪服脱ぐ決意
コンピューター義理人情は理解せず
鼻薬嗅いで進路を間違える

大阪市　冨上　光代

本音わいわい鍋囲む夜の短かくて
一通の便り家中眠らせぬ
バスで会う友はダンスを習うとか
グルメなど縁なく鰯で満ちてます

ベランダの水仙唄う春の声　高槻市　辻　白渓子

なぐさめる両手が肩を抱きたがる
好い例でないがと痛いとこを突く
懐手おとこ余裕を持っている
神様が呆れるほどの願いごと
立話昼のサイレンまで続け

奈良市　天　正　千　梢

ふし高き指もて嫁の背をさすり
経験豊富で臆病になっている
合せ鏡問と答を写し出し
チップ出さされ無駄な話聞かされる
人生の「トンネルだなあ」とさとりかけ

高知県　赤　川　菊　野

地球から軍靴が消えるのはいつか
姫鏡幸せだった日を想い
ペレストロイカまだまだ厚い凍壁が
善人に六法全書は用がない
幾人の男だました招き猫

西条市　片　上　明　水

ハンカチの折目も深く妻達者
寺多い町でのんびり暮そうか
二等賞話題にならぬままに消え
お誘いをまる飲みにして胃が痛む
口ほどに老いてはいない友の脚

七尾市　松　高　秀　峰

アメリカの豆で日本の鬼を追い
四十年続けて佳句のない誇り
窓際の机に夕陽よくあたり
窓際で最期の大輪咲かせよう
くそまじめだけを親から譲られる

玉野市　小　谷　仙　山

平成二年私の馬鹿はなおらない
的二つ迷いつづけて樹を枯らす
華やいだ過去忘れきれない土踏まず
泣き笑い仔馬が高く売れました
その場かぎりの言葉をさがす別れ霜

宇部市　平　田　実　男

ときめきを糧に宇野千代さん元気
孫の目にオモチャの一つに見える僕
御自慢の鼻で天狗は苦労もし
叱られて叱って太くなる絆
激論が司会の理性まで乱し

堺市　藤　井　一　二　三

鬼の首取ったポーズで合格す
ネクタイを締め年金を出しに行く
紀子ちゃんと名づけて仔犬貰われる
阿呆になってます利用をされてます
北浜で儲けるラジオ手放さず

松原市　佐　藤　奏　月

カラカラと笑う夫に飼育され
ティータイム子どもがひとりほしくなり

ポップコーン鳩にあげたりして遊ぶ
僧伽に立つときっときこえる川の音
恋はおしゃべり愛は寡黙で重たくて

大和高田市　岸本　豊平次

宅急便解けば故郷の無農薬
住む人が変って花壇にほうれん草
節分の豆を入歯が拒否反応
選挙戦攻めるも守るも消費税
日の丸の映えて畝傍の松の風

姫路市　人見　翠記

冬枯れの庭で燃えているのは木瓜ばかり
バス停に今日の生活の顔並ぶ
植木鉢置きかえ無聊なぐさめる
ゆりかもめ白鳥のお濠を占領す
真夜中の霰の音の冴えかえる

箕面市　坪田　紅葉

冬ごもり植木鉢も家の中
美しく老いるつもりか着道楽
耐えしのぶ事が美学と頑固です
もめたとて家族揃って鍋かこむ
強がりを言っても同じ老い仲間

高石市　浅野　房子

ビアガーデン気炎をあげる女連れ
女連れ亭主の留守にグルメ行
妥協して安泰今日の日が暮れる
それ以来独りで食べる事に馴れ
強引な方へ流れるのが女

宝塚市　丸山　よし津

標的の蝶ひらひらと身をかわす
乗り換えの駅で幸運とり逃がす
順風に乗れずコースをかえてみる
紀元節の歌口ずさむ三連休
弱味抱き声高になる背なの冷え

有田市　松井　かなめ

思案にくれ別れの日をおそれてた
長入院優等患者も不満持ち
見る勇気がいる夫の五体をきざまれて
洋間日本間七十八帖踏み場なく
社会党ごもっとも自民党わたし好き

守口市　野呂　右近

湧く句想ひとりも楽し老いの部屋
趣味の輪のぬくもりの中生きる幸
ひとコマずつ大切に消して行く余生
自己暗示かけ逆境に対処する
献体も話題に老いの未来図絵

岡山県　矢内　寿恵子

倶会一処来世落着く句座がある
写経する心に冬は通りすぎ
おんぶした孫が手を引く初詣
初潮来て心ばかりの宴にする
振袖を横目にはたちの献血車

発言をすると役付けられる婦人会
来年も着られる服を買う勇気
新しい風も入れなきゃ知恵袋
チャンネルの切替えばかりする夫
踏切が上ると孤独になって来る

富田林市　松本今日子

持ち時間縮められては強くなり
名誉教授みずからは名札見ず
つぎつぎにスライド登板する講師
投了までカフスボタンが忙しい
パソコン教室始まる夢を刷り配る

町田市　竹内紫錆

肝臓をくれと言うたらどないする
眠れぬ夜はよからぬことも考える
頬被り父のは芸になっていた
柚子湯船久しく逢わぬ女思う
傷ついて妻のひろげた傘に入る

広島県　藤解静風

劇薬をふところに持つ雪催い
おろか繰り返す自愛のネギ刻む
ワックスの効き目へ期待せぬように
唯一の芸が油に火をつける
なりゆきでいびつな椅子にかけてます

富山市　舟渡杏花

火傷したことも忘れて差し出口

高槻市　川島諷云児

付き合いが下手で誤解の種を播く
ここという時に理性が邪魔をする
カルチャーで老化現象くい止める
止まり木で叶わぬ夢を追うグラス

竹原市　石原淑子

お元気ですか恋人きどり単身赴任
日溜りの猫の話題もニセ金貨
春の宵ゆったりショパンの子守歌
梅一輪一輪ほどの作句なり
速達の好きな女と思うなり

岡山県　小林妻子

まごころに出逢い寒椿の開花
退職へ時計の針は恐くない
停退へ伴侶の味が沁みてくる
米価据置き農政何を考える
桜咲く頃へ耕花の忌がめぐる

尼崎市　奥山美智子

阿吽の呼吸が揃うわびとさび
悲しいな金がなければ義理を欠く
過ちと悟ればそれはそうとして
ここだけの話を聞いて寒くなる
風船に内緒話を詰めておく

大阪市　北勝美

病妻のこんなに早く爪は伸び
通院の明日へ妻の髪洗う
階段へ踏み出す一歩踏直す

三寒四温まだまだ遠い妻の春
消費税廃止一つ覚えと言う野党

大田市　藤田軒太楼

雪の夜嬉しや燗も追加され
耳遠くなって喜寿の日の長さ
年金の暮しにぜい沢許されず
早春の厳しい寒さ春遠し

今治市　越智一水

畑を打つ姿を亡父のよう言われ
遅すぎた出合い不倫の恋となり
許されぬ恋へ吹雪が窓を打ち
好きだとは言わぬがキッスして別れ

東大阪市　崎山美子

そっくりな後姿にうろたえる
横道についそれたがる好奇心
ささやかな夢をささえる共稼ぎ
生真面目に生きて貧乏ぬけだせず

松山市　谷真風

縫いぐるみ童話がいっぱい詰めてある
一輪の花に心を支えられ
白蟻に家を食わせて入院中
悲しいときも嬉しいときも掌を合わせ

河内長野市　井上喜酔

褒められてお世辞と知らぬ丸い妻
くつろぎがあるから好きな途中下車
退職をしてから家計簿気がゆるみ

石投げた波紋で煮え湯のまされる

貝塚市　行天千代

八十路過ぎスカートを買い服も買い
盆栽の梅ほころんだ寒い朝
豆まきへ鬼も寒かろ外は雪
すきやきが小雪の窓をくもらせる

静岡市　渥美弧秀

俎板へ妻のハミング春の風
窓は雨ショパンの曲が沁みる床
FMの床で広がる一行詩
晩年へ詩と音楽に命燃ゆ

諫早市　原田メイシュン

寝るらしいつぎつぎ消える団地の灯
俺の表彰以下同文の中にあり
世界地図の中に俺の土地が五十坪
老いぬれば口喧嘩もぼけ薬

福岡県　横地正好

ときにほら吹いてみたくもなるまじめ
旅の恥薩摩女に叱られる
稼ぎ過ぎ誰も叱らぬ自営業
計算があるから人間呆けられぬ

和泉市　西岡洛酔

小説にも成らぬ人生大事がり
味噌汁の味が変った倦怠期
他愛無い話六十路の坂辿る
中流の暮らし凡夫の域を寝る

春夏秋冬花を咲かせる向う岸　和歌山市　若宮武雄

人形に因果ふくめる人形師
知りすぎてまだ仲よしという他人
サボる気は更さらないがポンコツ車　和歌山市　内芝登志代

断った勇気今更うれしくて
カタカナのちらしへ老いの劣等感
それなりにおやじの顔になってくる
マンションで隣の顔を知らず住む　和歌山市　山川克子

人生も開き直れば恐くない
鬼の居ぬ間も洗濯は出来ぬまま
成る程と唸らすそれがプロのコツ
ニセものが一人歩きをして困る　和歌山市　福井桂香

おしやべりに政治批判も入れとこう
真心であなたに響く杭を打つ
弱腰を叱ってくれる北の風
触れられることを恐れてなるものか　和歌山市　細川稚代

家中がやさしくなって風邪治る
それからは白いページのままねむる
胸底に鈍い痛みが消えぬまま
この癖をやめれば私に殊勲賞　和歌山市　木本朱夏

うっとりと愛の時間が溶けてゆく
愛すべきおとこに金がない不満
太陽を浴びると力湧いてくる
ていねいに躰を洗う理由もなく　和歌山市　青枝鉄治

鯖ずしの石の加減に母がいる
念に念押してチャンスに逃げられる
石投げて他人の顔で見る波紋
輸入した豆では逃げぬ鬼の意地　和歌山県　天満三千代

ぶつかってからでは遅い曲り角
農薬散布世間の虫も寄ってこい
一度だけ背いてみたい影法師
無農薬そんなみかんの顔見たい　岡山市　川端柳子

こういう時も一人居たら等想う
男親だまって便り心待ち
後れ毛へ女おんなになる片手
距離おいて駄馬のゆとりの下り坂　岡山市　井上柳五郎

仕事やめ遊んでおれば病みはじめ
哀れにも毛鉤のだまし討ちに遭う
あと百円サービス券に無駄を買う
花嫁のジャジャ馬だった内緒ごと　岡山県　直原七面山

悠悠自適と人には見せておく暮らし

僕一人を残して級友皆逝き
月を観て君を賛える句を案じ
娘には娘の親には親のプランあり

岡山県　荻野　鮫虎狼

花遍路四国は広い広い島
ふるさとへ帰れば昔の名で呼ばれ
人並にふぐが美味いと言っておき
同行五人大師に済まぬ事が出来

岡山県　岩道　博友

儲かると見たか余生へ的を定め
後始末重い靴はく曇り空
名場面邪魔になるのか湯を勧め
足先が春の風踏む松葉杖

岡山県　花田　たけ志

かばんにも行先別にあるランク
敬語には敵と味方が同居する
ささやかな幸せ五等の賀状くじ
男性のパワー昭和に連れ去られ

岡山県　山本　玉恵

人の訃へ鳥一揆の声となる
無分別がひとり歩きをして困る
海鳴りへ女一つの賭をする
横道へそれたら鳴らぬ女下駄

岡山県　千原　理瑛

恩師の微笑みスナップに生きる
人権蹂躙マスコミを嫌い抜く
社宅戦争妻の心研ぎすます
黙々と情念燃やす女面

岡山県　松本　元江

里ごころ誘う夕陽の暖かさ
捨て切れぬ記憶が残る花時計
その先は責任のない焚き火の輪
土いじり春の陽を吸う老母の背

鳥取県　新家　完司

気がつけば勝ち味の薄い陣営に
あほらしい話まじめな顔で聞く
自己嫌悪などに縁ない人らしい
土地勘はないが酒屋はすぐわかる

鳥取県　土橋　はるお

喝采にダルマ大きな目を開ける
タイムカードに飲ませた事がバレました
左手で書いた遺書でも読むだろう
雪が降るように祈った人がいる

鳥取県　江原　とみお

お隣のバラは一足早く咲く
庇いようのないそれぞれの一輪車
シンバルを叩く娘が傍にいる
観音の森へ子犬をおいてくる

鳥取県　谷口　次男

人間はモルモットではないんだぞ
煙害は責め酒害には頬被り
ドラクエとゴキブリどもが天下取る

カレンダー記念日漬けでくたびれる　鳥取県　羽津川　公乃

寒気団に包まれしばし冬眠す
寒玉子今日の絆を大切に
団体の宿に冷めたい茶碗むし
愛さらり空気のように添い遂げる　鳥取県　さえき　やえ

恩師逝去

大物らしく師の旅立ちは寒の朝
恩師白寿年に不足はないけれど
歯のうずきぴしゃりと止めた師の訃報
大寒や亡き師を送る雪の舟　鳥取市　小谷　美っ千

正直な友だちだから泣きに来る
許されて出るとき雨が止んじゃった
墓穴からたつかげろうを追っている
薔薇の刺はジョークの中に忍ばせる　羽曳野市　佐野　白水

晩酌の猪口で水薬飲むもよし
雪明りに病人じっと寝ておれず
六年振り大雪病臥の窓に見る
解散へいつも変らぬ顔を貼り　羽曳野市　田中　透太

落し蓋軽くて話煮詰らぬ
一二三私に翔べと言われても
三寒四温　春の足音速くなり

蛇口からこぼれた水が喋り出す　羽曳野市　吉川　寿美

辻褄の合わない傘の半開き
ことの弾みで揃えてしまった男下駄
許すことばかり愚かな母でいる
充電の効かなくなった盆の窪　竹原市　岩本　笑子

哀しさの無人駅にも雪は降る
似合わない靴が玄関から出ない
生きるということ群れから一歩二歩三歩
鬼は外幼い声も加勢する　竹原市　信本　博子

エンゼルの涙ポロポロ　イヌフグリ
花はなハナ女神の愛をありったけ
花好きがきれいですネと声掛ける
花屋から直行で来た春の客　大阪市　吐田　公一

手の届く範囲に置いて掘こたつ
人生の縮図を見たり顔の皺
焦点を絞ると見えた腹の中
叱られるポーズがうまい宮仕え　大阪府　坂口　公子

門限のない身軽さへある孤独
昔ならさぞと言われて気付く老い
昔から妥協知らない白い道
苦手やと言うて天狗の捌き振り

黒字国僕は先兵かも知れず　大阪市　北山悟郎
堀埋めた居城段々狭くなる
それぞれの違う生き様老人会
人の後塵浴びて義肢の道をゆく　大阪市　坂本仙吉郎

旅重ねようよう来たに雨となり
白鳥の頃見計って昆陽の池
雪の道播磨の奥の伊和の宮（播州一の宮）
古い古い由緒が語る一の宮（但馬粟鹿宮）　大阪市　大野武太

瓦解した帝国ありて紀元節
毀誉褒貶わが誕生日は関知せず
選挙戦ここは場末の静寂さ
友人に猫の博士もいて娯し　大阪市　板東倫子

自問自答の答は何時も正と出る
よその子は成長早い新学期
暖房過剰干物のような顔になる
現場事故死者出稼ぎの老年者　大阪市　渡部さと美

着ぶくれてロボットのごとガードマン
降車ボタンまだまだ押す気ありません
ちらちらとやっぱり雪は降ってよし
若者がふやけて来ましたハンバーガー　姫路市　大原葉香

水戸黄門のテレビ見るから年が知れ
茶柱に期待の今日は当て外れ
肩の力抜いて鯛焼き買いに行く
影法師にさえ見放され孤独です　姫路市　丁坪サワ子

虫喰いの菜っ葉だから安心し
推す政党なくてしんどい投票日
去る者は追わずと言えぬ好きな人
蟹スキで一本つけても帰らぬ亡夫　姫路市　中塚遊峰

通院に日課半分すり消され
ひたすらに息子と二人二十歳後家
ひょっとこの面がたまには欲しくなり
亡き夫に受賞の話告げる古希　倉吉市　渡辺独歩

雪国に小便小僧行ったきり
風花を連れて寒中見舞くる
風の駅その名は無人その日から
野球拳ことしも女に負けてゆく　倉吉市　渡辺菩句

涙腺のゆるみを知った誕生日
ひょっとこの面付けて哲学しています
雲みていると雲に寝ている僕がいる
年中ここがこっちが悪うおます　倉吉市　野中御前

身動きが出来ぬ悪夢か正夢か

太鼓の音きけば先祖の血がさわぐ
この家も酸欠らしい金魚鉢
逆縁の萩ほろほろと涙橋

倉吉市　淡路　ゆり子

核心に触れると忘れた顔になる
流されて窪みに耐える石の性
子を誉める一言がある母の位置
腹八分目食べて百まで生きるとす

岸和田市　福浦　勝晴

寒鮒で一パイ明治と大正と
善人を寄ってたかって阿呆にする
どっちみち摘んではほかす土筆摘む
おたがいにふろしき広げて飲む屋台

岸和田市　島崎　冨志子

一喜一憂雀の涙ほどのこと
二人ぐらし老妻平気で放屁する
三連休もう関係のない夫婦
子離れが出来た頃には孫のこと

岸和田市　清野　こう

泣き顔はつらい病室そっと出る
もの言わぬ夫でことさら増す不憫
少しずつ悪化しながら夫が病む
へそくりの置場忘れた日のあせり

岸和田市　高須賀　金太

二級酒がよろし河内の生まれです
力抜くことを覚えた五十路なり
酔漢の肴にされている夜勤
ときどきは主役を食って生きてます

出雲市　久谷　まこと

予定表電話が無理に変えさせる
噂からもれているから胸を張る
窓灯り消えて噂も通り過ぎ
佳いしらせ昨日も今日も雨模様

出雲市　石倉　芙佐子

白々と杏の花は人恋いぬ
仮の世を添い遂げられぬ白い蝶
雪女春の情けが重くなる
老い二人気楽のようで気疲れる

出雲市　竹治　ちかし

禁煙を誓って妻子の城に入る
満足を掴むその手が不満がる
妻の留守子と見る時計が進まない
グーチョキパー賢く負ける妻の知恵

寝屋川市　平松　かすみ

大根が一本売りになり春に
万歳が何故かそぐわぬ金バッジ
一票を上げたら中身萎むかも
弁解へ白けています市民の目

寝屋川市　堀江　光子

恙ないことだけで佳い誕生日
その坂の椿屋敷もいつか消え
ワープロの便りついつい走り読み

偽りの幸せかくすダイヤかも　神戸市　山口美穂

空席を探すわたしはオバタリアン
生真面目で腹を立てた方が馬鹿
なぐさめの言葉が白々しい見舞
むかし話する老母元気な声となる　神戸市　仲どんたく

お父さんぐらいは越そう塾通い
うまくゆく空間もある老夫婦
やむをえぬ悠悠自適の老いの席
余命尚一刀彫のように生き　弘前市　真喜内實

湯上がりの孫等黄色いさくらんぼ
嫁姑忙しさに仲とりもたれ
合格をすると学校大海原
あのことは春の小川に捨てましょう　弘前市　小寺花峯

三拍子のひとつが欠けて酒…おんな
表札を掛けて口笛吹いてみる
年金の暮しに猫が添い寝する
定期券の指定席には美人が居る　堺市　柿花紀美女

もう背のびしない余生に腰を据え
無罪判決真犯人はどこにいる
御堂筋銀杏黄金の土に敷き
どこまでも絆の鎖絡んでき　守口市　結城君子

えらい事でんなと一日の雪面白い
冷え症のしんから冷える草城忌
信号は赤いつまで待ってんねん青や
寒中のお顔つややか盧捨那仏　川西市　松本ただし

遺伝子に親馬鹿ひとつ増やしとく
しんにゅうをかけてくるから騙される
ゼロと一無限の落差持っている
五臓六腑にも七人の敵が居り　五所川原市　加藤彩人

子に継がす貸し借りもない小商い
妻と食うだけのシャッター今朝も開け
一日だけ先に逝きたし妻も老い
極楽は酒とお風呂とわが寝床　倉敷市　田辺灸六

むつかしく考えないで帆を降ろす
見舞われるより見舞う身の有難さ
自己主張飲んだ話に嘘も入れ
流行り風邪もらわぬ釦かけなおし　十和田市　斉藤劦

凧上げの夢飛んでいるのは私
合格の子は地吹雪を気にもせず
福寿草いくさを知らぬ子が走り
何事もなかったように飛行機雲

呉市　槇田英詩

わたしの財布儲け話を聞きたがる
知恵の輪が解けたぞ俺は惚けてない
お月さま機嫌の良い日まん丸い
妬くことを知らぬ女の夫です

黒石市　相馬一花

義理チョコの小さい奴が売り切れる
オシッコがいつでもできる縄電車
南海の孤島で寒中見舞書き
良いゴミを出すに中流苦労する

米子市　茂理高代

十八で死ぬ筈だった手相見
知っていて何も問わずにありがとう
危急存亡嘘も方便許されよ
冬日和心の声も弾み出す

八尾市　山下美津留

解散をして二次会で本音だす
雪見酒北陸でして家でして
勤めから解放されて失業者
雪どけの水がっぽりと呑む琵琶湖

唐津市　山口高明

堰切ったような号泣御臨終
抱負はと聞けば三男金儲け
論語より紅茶が好きなサマータイム
出不精の夫従え特売日

和泉市　岡井やすお

坂の上に住んで足腰まだ達者
新聞より折こみ買うているみたい
補聴器が良ければ良いで煩わし
耳よりな話には耳かさぬ主義

藤井寺市　福元みのる

アイデアは昔馬上で今机上
礼に行き刑事のやさしい眼に出合う
一歩家出ると役所の顔になる
朝刊を配ると街は目を覚ます

奈良県　長谷川春蘭

四季が来る晩年が来る駈足で
雨の道信号の赤尾灯の赤
風邪の子の素直となりてあわれなる
近よればほられはなされ毛糸玉

海南市　三宅保州

点滴のように晩酌効いてくる
妥協してから邪魔になる拳
逢えるなら片道切符だけでよい
人間こそ蟹から見れば横歩き

高知市　北川竹萌

畦つくり習うた時の三世代
あの時は伯母が元気に舟の守
肥料やり帰り夜の雨慈雨ときく
きっちりの車間よかった先車事故

伊丹市　山崎君子

花だけに打ちあけている今日のこと

雨あがり花さわやかにしゃべります
花だけを賞めて帰った御用きき
花言葉信じて貰うプレゼント

富田林市　片岡智恵子

茹で過ぎたそば失敗と認めよう
ギブス外して明日の一歩踏みしめる
低気圧の妻の半鐘鳴りひびく
少し淫らな少女のこころうつ話

西宮市　秋元てる

都市砂漠よりはと陸の孤島選る
島に育ち替える気のない守備範囲
有難や誰が名付けた女坂
兎さんの昼寝したのもこの辺り

島根県　藤原鈴江

水割りに心許したまでのこと
無為無策風に任せるほかになし
彼の人が居るから楽しい余生です
四月馬鹿にのせられ楽しい春がすみ

羽咋市　三亭ろ亭

春一番吹かせてからの畑仕事
冬越したほうれん草の味を噛む
ほんとうの顔は手入りなど要らぬ

豊中市　上田登志実

人生の余白を埋める趣味一つ
解釈のしようで違う世の評価
騙されてハハーそうかと嬉しそう

大阪市　塩田新一郎

長寿国押せや押せやの老いの坂
定年という観客で立見席
はてなあ前の総理は誰だっけ

米子市　白根ふみ

しわぶけば深夜にひとりすます耳
その話乗れない午後の雪しぐれ
鈍行に馴れ世間話を大事にす

出雲市　金村青湖

老人会マドンナ候補なじめない
雪しぐれ妻に従うマーケット
春一番絵馬も散らして吹き抜ける

茨木市　堀良江

大吉になるまで引いている二人
遮断機の前で話を一区切り
すんなりと嘘が通って目を伏せる

大阪市　町田達子

七色の粒に頼らぬ今年こそ
病院の塀越し梅の香が流れ
雨の道いつまで燃える落椿

吹田市　茂見よ志子

生きている実感うれし芽吹く樹々
強がりを言わなくなった癪の種
不揃いも風呂敷うまく包み込み

大阪市　桝本蕗児

燗醒めの味に似たのを女史と言う

フルムーン出涸しなりの味がある
落語家も時には言葉忘れたい　大阪市　冨岡温子

意のままに放されている射程距離
アリバイに友を巻込む悪い知恵
捨てる事上手になって同居する　岸和田市　芳地狸村

コーヒーの時間ですよと嫁が呼び
狛犬も知ってる恋の待ち合せ
パチンコの玉に人間弱いもの　鳥取県　津村八重子

春を待つ土に気力の脈が打つ
まろやかに舌にとけこむ母の味
すべり出た一言本音かも知れぬ　箕面市　稚江清芳

潮の香の乳房ふくます海女の昼
無職でも三度三度の飯を食う
杉木立女人高野の鐘の音　鳥取県　森山盛桜

都市砂漠鸚鵡がみんな死んで行く
結局は一人で生きるやじろべえ
逆光の中で窓際見えて来た　西宮市　瀬尾六郎太

勇気知恵与えてくれし人栃錦
これからが勝負さ齢六十五
そもそもが雑草七草薬草　和歌山県　岩崎瑞穂

露天風呂馬鹿な話の花が咲く
四面楚歌みかん農家の未来像
お似合いの阿呆で無事に金婚式　豊中市　辻川慶子

咲いてよし落ちて又よし雪椿
たこやきのくるりくるりと鳥居前
神様もうかつでおれぬ絵馬の数　奈良県　中原比呂志

大阪の知識で世界を論じ合い
四月馬鹿だます相手が見つからず
水道に頭を下げて顔洗う　奈良市　米田恭昌

和尚哀号酒が入れば出る演歌
それなりにホッとしたよに兄が逝き
かくれんぼさがし疲れて鬼が泣き　静岡市　安本晃授

花好きの妻が造花に叛かれる
溺れたい袋小路の粋な酒
食うだけが楽しみ母へ箸の私語　米子市　金山夕子

川風に春の息吹きの座禅草
この土地が好きでわたしの木を植える
珈琲も抹茶も酒もいい時間　米子市　小村てい子

そんなこと菓子折がきて落着けぬ

捨てようと決めた生花に二度の水
爪まるく剪る人を道連れにする

米子市　川上より子

孤高など人に言うべきことでなし
きさらぎの星座を久しく見ていない
白い息の列が幼稚園に入る

富田林市　新開千代子

鼻声でねだられ財布ついゆるむ
珍客の白髪に時を振り返る
塾通いたこ焼口に走る孫

広島県　田村新造

宮仕え悲しい性のお辞儀ぐせ
土地と株持たず中流とも言えず
孫見せに帰る離島の通い船

出雲市　小白金房子

お点前をほめて気楽な春こたつ
招かざる客に慌てる皿の音
情けいっぱいもえて悔いなき落ち椿

大阪市　中西兼治郎

うまい餌出来てぬずみをとらぬ猫
犬をさけ人間はねたライトバン
あの顔もこの顔もいる終電車

境港市　細木歳栄

寡婦なれどまだまだ萎れる気がしない
一年がアッと言う間の歳になり
四十の子の事想う雪の夜

大阪市　松永すすむ

天神さんも頼み多くて迷てはる
赤鬼と青鬼が居て黒がない
小粒でも大粒倒す技がある

岡山県　池田半仙

試験孫二人心配爺もする
ゲートボール昨日は殊勲今日はミス
十二分に生きて命がまだ続き

和歌山市　山田高夫

どんぐりの仲間にだって敵味方
スパイスの効いた男が好きになる
とめど無く地球は回る世界地図

米子市　木村富美子

ポックリと骨になりたい蝶のまま
障子までジャングルジムにしてしまう

鳥取県　乾喜与志

土拝む大根を食べ芋食べる
無断で喋り一票を盗って去に

吹田市　栗谷春子

過ぎる雲にじっくり見られ見離され
許す気のそれが本音と知った時

出雲市　小玉満江

公民館捨て犬三匹届けられ
声かけてくれる友あり蕗のとう

▽34ページ下段に追加分を掲載。

自選集

さくら咲く多彩なプラン急ピッチ
さくら百選　町一色のオンパレード
情趣湧く短冊を吊るさくら枝
恋のささやき夜のぼんぼり情緒めく
花の客迎えるさくらの散歩道

藤井明朗

腕を組むふたり少し花に酔う
二階からみどりの風と降ってくる
言い訳もちょっと一行書き添える
なたね菜を漬けてる妻の立ち話
春の寺おたまじゃくしの育つ池

児島与呂志

よりによって入試の頃に香港A
怒ったら損だと知っていて怒り
春一番雷連れて驚かし
真っ先に風邪をひいてる無位無冠
スランプへ師の面影が通り過ぎ

月原宵明

山門を出れば空から声がする
手に取れば野の花の色生きてくる
ひたむきに男のうしろ風が吹く
花びらの重みが分かる年と言う
蕾がひらくストレスをためている

正本水客

白い花こよなく愛して老い孤独
積んでくずして砂場に過ちうめている
花吹雪浴びて睦まじ野の仏
倖せに馴れて明日を見失い
流れ星故郷捨てた子を思い

藤村〆女

花いちもんめまた助っ人にえらばれる
えらばれて治る病いの看護人
混み合って病院行きのバスが出る
病院の坂眉上げて眉上げて
武蔵野でひとり花火を上げている

八木千代

「です。ます」にして天皇は親しまれ
クレムリンついに人間的となる
用が無いから日本を考える
変人も変人なりに生きている
亡妻よ亡妻よボタンが一つまた落ちる

工藤甲吉

上の椅子あるから謀叛考える
女ひとり夢の話に色をぬる
老母住むふる里があるあかね雲
冬眠の蛙に怠け癖が付き
地に帰すもろい命を抱いている

岩本雀踊子

亡母の癖そっくりに妹が老け
流行を尻目に寸分の隙も無い
広告の裏が白くて役に立ち
二の舞は許さないぞと釘を刺し
転ばぬ先の杖をまた置き忘れ

本田恵二朗

人並みの春に揺れてるイヤリング
九十五の母にゆっくり春が来る
握手してあげよかおじぎしてるから
ビルの谷蝶が生れた花時計
縁談へそれもう二十歳まだ二十歳

遠山可住

散るさだめその一片の行方問う
さてどうするか老後の朝の捨て難し
抵抗をして墨色の愛すべし
八十を追う問うことの多かりき
英訳の孫に嬉しく勝てません

水粉千翁

使い捨て儲ける甲斐性ないくせに
こころ豊かになれず嫉妬の芽が伸びる
意見を出せば委員の中に入れられる
老人病どれも色気は見つからぬ
年金と貯金にいのち支えられ

金井文秋

句のヒント拾いに寒い街に出る
ご機嫌がなおってお茶を点ててくれ
快便で始まる春の一日が
臓器提供したいがすこし古過ぎる
ストレスがたまった末の長電話

野田素身郎

初産におびえている目が美しい
恋いくついくつ重ね重ねて掌
眉の根に祖国を捨てた陰があり
本当の自分が一生探せない鏡
帰り道などない人生の蔦かずら

有働芳仙

息抜きに行くも必死で小さい旅
日本語の紊れ慨いてみたものの
嫌われるため学校の名を訊ね
脳細胞どんどん減っていくうつつ
星が降る宇宙に溶けて露天風呂

野村太茂津

天恩地恩欲が消えたらみなほとけ
一粒を生みだす手数きかせよう
山茶花の朱に早春は暮れやすい
気の小さい雀でいつも痩せている
遠からず子供の稀な国になる

久家代仕男

心配をかけて済まない刻迫る
お任せをするより今日まで生かされて
病人にまだなりきれぬ患者食
看護婦が走る個室の慟哭よ
祝退院妻玄関を開け放つ

山内静水

金太郎飴がぞろぞろ雪の中
イヤリングすれば身軽な風になる
女一人画布より消えてから久し
葦の葉の陰で蔑視に耐えている
背かれる涙背いてゆく涙

波多野五楽庵

勉強をしたかと叱る答案紙
嘘聞きに公民館へ寒い義理
犬と人どちらも怖じて近よれず
やどかりは身に合うた家知っている
帰省娘を客でもてなす台所

大矢十郎

信用の回復お世辞ではできぬ
合宿で違う個性をつなぎ合う
当選のお祝いまでは腰低い
毛糸玉ころころ愛が編みこまれ
負けいくさ夢中になっただけ空し

小林由多香

後姿がわからないのを幸いに
眼に悪いとこもきっちり読んでおく
大事なだいじな尻尾落してきたらしい
遠回りするのはきっと名案だ
覚え書きひとつふたつは忘れよう

小出智子

一円貨きびしい貌を持っている
五億円つこても議員合うらしい
旨いもの敵にまわしてダイエット
喉腫れた日にニコチンと縁を切り
本職につながってきたアルバイト

河内天笑

重い荷を欲と道連れ担いでる
物凄い見幕だった勘違い
お互いに無いもの足して夫婦です
家財すり減らして夢が未だ醒めず
ピンと来ぬ夫へやきもき焦れている

西田柳宏子

春の湖わたし虜にして光る
一輛で走る電車へ夕焼けて
花博でお逢い出来るという便り
目礼がすこし負い目になっている

黒川紫香

いさむさん逝く

死にいそぐ友あり雪はまだ解けず

阿萬萬的

第二十一回日展を見て

飛鳥の里古木は生きて春を待つ
生きる力が水際にあった冬の川
曽爾高原に一と筋昔へつづく道
バレリーナのたまごもそれなり眼が光り
早春の息吹か血に似た落ち椿

橘高薫風

栗谷春子さんのご夫君を悼む

神様の遊びごころの雪月花
遠近両用　眼鏡だけではありませぬ
この世からあの世は見えずさし向かい
あの世から香華は見えてさし向かい

米沢暁明氏

川柳塔社参事・水郷川柳社会長　米沢暁明氏は三月十三日、呼吸不全のため死去、八十歳。告別式は翌十四日、清原寺で行われた。喪主は三男博巳氏、自宅は大洲市常磐町91。哀悼。

川柳塔（追加）

応接間少し進めた置時計
先生は老いて帽子が好きになり

守口市　森川まさお

雪国は雪町雪丁目雪番地
愛憎も消えてひっそり一人雛

豊中市　吉田あずき

入院の姑の知らない仕送り費
海越えて親の知らない娘の旅路

河内長野市　植村喜代

騙された言葉も呑んで丸く住み
男一匹裸でつき合う部屋がある

和歌山県　西口忠雄

—同人吟

秀句鑑賞

—前月号から

宮口笛生

どうでもよいつまらぬ事を覚えてる　原　さよ子

まさにその通り、私のことを言われているようで、反省もさせられる。年老いたらこんなもの。皮肉もよいところである。

投げられた石をにっこり受けておく　小野克枝

人間出来た者しか、こうは行かない。なかなかにっこりは受けられぬ。世界中の人がこの気持を持ってくれたら内戦も起こらない。

遊び球もたぬ夫婦で日銭追う　江城修史

日本人は働き過ぎと言われるが、働けるとき働いておかねば、貧乏暇なし。遊び球をもたぬとはうまい表現だと思う。

最後までめんどうをみる別れ下手　佐藤奏月

別れ下手で良かった。仲の良い夫婦のおのろけか。いらぬことを考えず、最後まで仲むつまじくして下さい。

心だけいつも豊かにしておこう　河内月子

心の持ちよう一つで、不平不満は忘れられる。まずしくもせめて心の暖かい、豊かさを持ちたいものである。

目の毒といわれる方へ向きたがり　小西雄々

人間心理をうまくつかんでいる。好奇心の表れがよく出ている。

あちこちの部品がいたむ春の鬱　田中正坊

永い間人間やっていると部品も痛むというもの。歳はとりともないが、健康に留意して元気に参りましょう。春の鬱が効いている。

さあはたち少年Aで済まされぬ　玉置重人

成人式で大人の仲間入りして、頑張らねばと希望にもえている様がうかがえる。さあはたちが生きている

爪楊枝くわえたままのお勘定　松本忠三

ああおいしかった。おおきに、ごちそうさん。にっこりした顔が見えるようである。なんでもない素題をうまくとらえている。

悪知恵が無いと政治家には向かず　奥谷弘朗

きつねとたぬき、汚職議員がうようよしている。まさしくこの通り。きつい皮肉である。

事なかれ主義に左も右もない　稲田豊作

事なかれ主義。賢い生き方かも知れぬが、これでは人間の値打ちがない。だがこのような人間、案外多いのでは。

スケジュールの空白僕の充電日　柳楽鶴丸

ぎっしりうまったスケジュールの中に、一つ二つの空白を充電日とは面白い。その日はゆっくりねるのも良かろう。

次も好きな句ばかりです。

未だ少し惚けに間のある好奇心　北勝美

身内の話する時夫が他人めき　門谷たず子

若松を真似て元日の背を伸ばす　樫谷寿馬

春の野の霞の如く暮らさんか　谷垣史好

齢を言う自分をガードするために　西出楓楽

まだ脈があるらし社長に叱られる　江口度

神様もこれは聞けぬと思う絵馬　河井庸佑

根性を男結びにしておこう　小池しげお

私の好きな句たくさんの中のほんの一部ですが、私なりに楽しませていただきました。

川柳太平記（143）

川柳の群像

長野文庫

東野大八

「川柳が盛んになり、川柳人口が増加して来ましたが、世間では川柳は『宴会のかくし芸』程度にしかみていません。文学としてとりあげていません。大学の入試に川柳が出題されたとか、新聞・雑誌・放送がしばしば川柳をとりあげているとか自賛していますが、これらはほとんど古川柳であって現代の作品ではありません。マスコミにしてからが、文学としてより「紙面ふさぎ」「新聞のオアシスとして川柳欄を設け」といっており、川柳に無縁の著名人、有名俳句作家を選者です。川柳の門外漢が選をするなんて情けないことです。

私は「川柳の諷刺、ユーモア、穿ち」の三要素に魅せられ、川柳作句をはじめたのでありましたが、途中、洗脳されて『川柳真情美運動』をやっています。

○真とは—心なり、魂なり
○情とは—愛なり、敬なり
○美とは—調なり、色なり

少し禅問答めいた言葉ですが、よほど精進しないとこれが理解できません。

○酢の効かない寿司のような句（諷刺なき句）
○塩気のない味噌汁のような句（ユーモアなき句）
○句（しゅん）の味のない果物、野菜のような句

穿ちのない句、更に五七五調の格言、口語体標語、新聞雑誌の見出し、糖尿病患者の栄養食、UFO型、SF型、砂をかむような句も沢山あります。詩として、川柳としても消化されない作品が沢山あります」（『愛媛川柳の流れ』第四巻長野文庫・文学社（今治）刊・昭和54・7＝あとがき・要約）

本名長野軍四郎、柳号史郎から程経て文庫明治36年2月19日愛媛県今治市生れ。川柳は昭和12年ごろから前田伍健に師事。昭和11・12年麻生路郎（川柳雑誌主幹）の来県を機に傾倒し川雑同人。右に記した『愛媛川柳の流れ』を発刊した文学社とは、文庫が個人経営した古籍商の屋号。この刊行本は四巻から成り、五巻編さん中に死去した。このほか文庫には句集『つるし柿』『せんりゅうのおと』『しあわせ』がある。

文庫生涯の労作『愛媛川柳の流れ』は、子規・虚子・碧梧桐等を擁した松山中心の俳句王国愛媛県の中に芽生え、生々流転した川柳の流れを、明細的確に捉えた稀有の川柳史といえる。筆者の手許にある謄写刷の約八十枚に及ぶ『川柳温古』22篇は、新聞活字なみの細字で、びっしりと詳細に記録され、明治35年の愛媛川柳の胎動期から、戦後の昭和24年までに及んでいる。これが『愛媛川柳の流れ』の礎稿である。本稿は、その労作から学びつつ要約したものであることをお断りしておく。

愛媛県の川柳界は明治35年地元紙海南新聞が川柳を公募したことにはじまる。（選者武田碧落子）その二年後、坂井久良伎が『川柳梗

概』を発表してから、川柳人が各地に輩出し、群小のローカル紙が競って柳壇を設けたため川柳グループが激増し、明治期には柳誌が二誌出現。大正期には安井八翠坊の『凧(たこ)』が創刊されたのを期に、昭和にかけ十誌の川柳誌を数えるに至った。

この間の愛媛川柳界のリーダーは、窪田而笑子の『媛柳』誌から育った前田伍健と酒井大楼のコンビの活躍期に入る。この間、岸本水府(昭2)、麻生路郎(昭4)が来松し、番傘派と川雑派が相競う形となったが、川雑系初の同人として大正12年には大楼が参加している。こうして昭和期に入っての柳誌は、終戦まで二十余誌の興亡が展開された。

戦後は昭和35年伍健死去のショックに見舞われたが、すでに安全軌道に乗った愛媛川柳界は「愛媛県川柳文化連盟」の再編によって、隆昌ぶりを保持した。この連盟は昭和22年伍健の提唱によって結成されたが、伍健没後の柳界にテコ入れする形で昭和37年4月再発足した。会長は仲川幸男(たけし)、参加団体はその時点で十六社だったが、同54年には二十六社を数え、文庫は米沢暁明らと副会長で活躍している。このため文庫は、同58年文部大臣表彰を受けた。これは川上三太郎の紫綬褒章に続く栄誉とされた。

「文庫、宵明(月原)、暁明(米澤)は、川柳塔自選句集の三羽烏(愛媛で三人)でもある。古書の店を構えていられると知り、『伊予史精義』の古書を世話していただいたのがきっかけとなって今日まで五十年のおつきあいである。文庫の名は『愛媛川柳の流れ』とともに名声は不朽である。絵筆と名句と相まって、『ここに文庫あり』だ。知っているのに知らんふり、偉いのに偉そうにしない。それでいて思いやりのある人、郷土史研究家。県は無論、文部大臣表彰の栄誉。『川柳の流れ』続篇を若い川柳家にお願いしたい」(「水郷」2月号・米澤暁明)

本誌と愛媛新聞に月原宵明(汐風川柳社会長)は、ともに心あたたまる文庫悼文を書いているが、筆者も文庫とは因縁浅からぬ柳縁で結ばれている。

終戦直後、各地で続出した新興郷土紙の一つで、今治に誕生した新愛媛(日刊)に就職した筆者は、大洲支局長から本社詰めになったのは昭和24年だった。今治駅前はヤミ市で新聞社はその雑踏の近くにあった。

浜筋の住居から本社へ出勤する途中に、こじんまりした古本屋があって、文学社というくたぶれた看板をあげていた。ある日何気なくここを通りかかると、店頭に『川柳雑誌』が山積みになっていた。懐かしくそれを繰っていると、中から腕カバーをした見栄えのしない小さいおっさんが出てきて、「川柳の雑誌ではこれが一番立派だ。欲しければ二、三冊持っていきなされ」といった。これが生れて初めて逢った文庫その人だった。

その頃、各地で横行したゆすり、たかりの盆暮新聞といわれたゴロツキ新聞を、筆者はコラムで川柳と戯文で叩きのめしたら、この連中数人から社へなぐりこみをかけられた。この時の川柳の協力者が文庫さんだったが、エライ目にあったといったら、わしの名もいえばよかったのに、と口惜しがってくれた。なかなか利かん気の人だと敬服したものだ。平成元年一月二十日老衰で永眠。86歳。

○ふるさとの素顔にこころ洗われる　文庫
○やわらかい芽にも大地を割る力　〃

の二句は句碑になっている。句画集『よろこび』(昭55)同『たしなみ』(昭57)の二冊はこの人晩年の名刊である。

★次回は「北　夢之助」

柳籠裏三篇研究（三丁）

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原　亮
大野温干・青木迷朗
鈴木倉之助　故岡田　甫

38　**家内騒動居風呂を初にたて**

七久保＝花嫁が無事出産。初子なので風呂桶なども真新しいものを買い、さてさて、赤ん坊を湯に入れる時に、やれ湯がぬるいの、熱すぎるのと、家中テンヤワンヤの大騒ぎ。家内騒動とあるから、現代の核家族ではなく、姑、小姑など同居の大家族ではなかろうか。

岩田＝初めての物事というのは、もの珍しさと不安が手伝って大騒ぎになるのが常である。赤ん坊まで考えずに、単に初めて居風呂をたてた時と解するは非なるか。

青木＝家庭用の居風呂の普及が当時珍しかったので大騒ぎなのであろう。

佐藤＝あっさりと解した方がよいと思う。岩田説に賛。今でも初めて風呂桶などを買い込めば、一応家中の騒ぎになろう。

八木＝カラーTVなどでも新しいのが届くと、家内騒動。

鈴木＝しいて言えば、入る順番でもめる。

嫁の跡さて居風呂のもめるなり　明三義1

岡田＝江戸は水が不自由だった。だから銭湯も少ないと同様、家庭に風呂のある家も少なかった。今までは銭湯に入っていたのが、やっと工面が出来て居風呂を買い、初めて自家の風呂へ入る。もの珍しいので家庭中が心がはずむ。その気持の表現。順序は主人が初めが普通。子供らを先にするかも知れぬ。恐らく子供らは大はしゃぎ。

39　**婆ゝァの宿下リ外聞のわるひ物**

七久保＝年とってまで奉公人生活をしてるなんて、全く世間体の悪いものだ。たまの休暇で田舎へかえるにも、若い人ならまだしも、いい年の婆さんが荷物を重たそうにもって行く姿はみすぼらしい。

西原＝婆さん自身の外聞の悪さよりも、そうさせている家の者の外聞が悪いものである。

佐藤＝賛。宿下りという語には、たしかに一種の情味がある。若い娘が連想されるのは自然で、婆さんの宿下りは頂けない。

鈴木＝礎稿でよいでしょう。宿下りの句としては例外。

岡田＝同。

40　**何をしくじったか三分壱へ落**

七久保＝昼三の太夫が一分の座敷持に格下げされた、こと。逃亡を失敗して、相当な罰をうけ、情状憎むべきものにはさらにリンチを加えて、河岸見世の勤めに替えられたりした。

岩田＝賛。しかし、別に座敷持に限ることもないのではないか。

佐藤＝礎賛。三分一は「三分の一」のことと思う。もちろん、「三分から一分へ」の酒落があろう。

鈴木＝「三分壱」は、佐藤兄のいわれるように「三分の一」と思う。

岡田＝同。昼三をAクラスとすれば、一分の女郎はBクラス、それにA上、A中、A下あり、また、B上、B下がある。一分の座敷持はもちろんB上で、部屋持は専用の個室を与えられること、座敷持は個室の他に、専用の座敷（これは妓楼の正面二階）を持つようになる。なかなか吉原の格式の段階は面倒です。

41　手前すししたたか飯があまる他

七久保＝手前は自家製の、あるいは手製のという意。商売をしている専門のすし屋とちがい、手際がわるくシャリの分量もわからないので、入れものからはみ出してしまうという句であろう。

　現代行われている浅草海苔で巻いた巻き鮓、握り鮓は時代もずっと下がって化政度および天保頃であるから、主題句の頃の鮓は押し鮓風のものであろう。

青木＝たね、または具に対して飯があまってしまったと言うのでしょう。

八木＝素人がやって、そんなにぴったりゆくはずもなし。

鈴木＝賛。

岡田＝同。

42　いつても御用ならばと金ハかさず

七久保＝主題句のような手合いは、現代でもよく見掛ける。誠に調子ばかりよくて、「エエ、あなたならいつでも用立ててあげますよ。何時でも物入りの時にはいらっしゃい」とうまいことを言いながら、いざ頼むという場合になって、いろいろ理由をつけて断わられてしまう。

岩田＝金を借りに行ったところ、「誠に申し訳ございませんが、生憎と今、手元に御座いませんで、有りますれば御用立て致したいのですが、……エーその様な訳で、何とも申し訳ございませんで、又手元に御座いますれば、いつ何どきでも御用ならばお貸し致しますから、……今日の所は……」と言って断わられたのではあるまいか。

鈴木＝賛。「巧言令色鮮矣仁」というやつ。

岡田＝賛。

43　人相のいいハはやらぬてんがい屋

七久保＝てんがい屋は「こしや」とも呼び、仏具類をつくり、葬送一切を仕切る商売で、商売柄か他の商売人と違って、愛想笑いなど、いい顔をしていては商売にならない。

　天がい屋笑った人につきあハず　一三6
　愛想にこし屋の内儀べそをかき　拾三16

佐藤＝賛。ただし、輿屋は輿屋、天蓋屋（または衣屋）は天蓋屋である。輿屋でも天蓋の注文は請けるが、輿屋即天蓋屋ではない。

鈴木＝賛。こしやは葬儀屋。

岡田＝同。

川柳堺二五〇号記念大会

とき　5月6日（日）午後1時開場

ところ　堺勤労会館第3会議室

兼題（各題2句・共選　締切2時）

「大きい」　板尾　岳人　小出　智子
「帯」　墨　作二郎　梶川雄次郎
「汚す」　高杉　鬼遊　野村太茂津
「拝む」　中尾　藻介　西尾　栞

会費　1000円（記念品・作品集）

日本最短詩——武玉川調 (一)

阿達義雄

「日本文学の中で最も重要にして最も興味深く、それでいて最もなおざりにされている書物の一つは『武玉川』である。それは『柳樽』初篇に十五年先立ってあらわれはじめた。『武玉川』はしばしば俳句ほどには詩的でなく、川柳ほどにはユーモラスでない。」

とは、英国詩人にして日本文学通のR・H・ブライスの言葉である。

『武玉川』は、江戸川柳の発生に大なる影響を与え、句作に色々なヒントを供したと思われるものが見られる。

この中の七七の短句は、連句の中の一韻であって、一句立の句として作られたものではなかったが、日本文学の最短詩形として、独立的に鑑賞し得る注目すべきものである。

なお、これは俳諧と川柳との中間に位する人間詩とも考えられるし、俳諧的要素と俚諺的要素をもって、最も端的に吐露された江戸庶民の重大関心事であり、特に諸所に借金をもっていた者には、頭痛の種であり、その頭痛も年の暮が近づくにつれて激しくなるのであった。

たとえ、亭主がやぶれかぶれとなって、悠長に構えていても、家庭経済に細かい神経を遣っている女房としては、ややもすればヒステリックにならざるを得なかった。

○女の声の高い霜月　（入合帆）

○押し詰る程妻の名言（武玉川四篇）

霜月より師走へと、日頃の夫の不用意や怠慢を責め立てる妻の言葉は、次第に甲高く、しかも冴えて行き、時には金に関する西鶴的な名言を吐かせ、夫をして周章狼狽させるのであった。

このような大晦日を神謀百出の嘘で固めて切り抜けたとしても、元旦は元旦であって、昨日までの泣顔や渋面もどこへやら、元日には、とにかく長閑らしい気分になって、ほっと一息ついて、女房も水々しい髪を結い、晴着を身につけて、新婚時代の若々しさを取り戻すのであった。

○女房を若く思ふ元日　（武一七）

「元日や己が女房にちょっと惚れ」という川柳のアイデアも、右のような句から生まれたのであろう。次に、二月の句を見よう。

○閏二月は馬鹿な奉公　（武一七）

一年契約の奉公人は三月三日限りで切替えとなる。いわゆる出代りとはこれである。

ところが、昔の閏年には、ある月が二回あった。例えば、宝暦四年は閏年であるが、この年には、正月の次に二月があり、その二月が済んでも三月とはならず、もう一遍、閏の二月というのが置かれてあったのである。

早くそこの奉公を切り上げようとする下女下男などにとって、同じ給金（一年契約）なのに、これ程馬鹿らしいことはあるまい。

一般に短句は細かい描与が省かれ、含蓄として色々な想像の余地が残されている。これ

を美的に想像させようとするのが、その一つの特色となっていた。

人間のあらゆる夢を叶えてくれる黄金――その黄金も自分の物でもないのに、見るからにも重そうに背負って、わびしい関所辺の冬枯れの中を通って行く。そのような情景は俳諧的な世界のものである。このような情景は「俳諧童の的」の第二編の短句において、

○金箱通る関の冬枯　（童の的・二）

として把握されている。

西鶴『好色五人女』の八百屋お七は、雷の鳴る夜、「今宵ならではと思ふ下心ありて、さても浮世の人、何とて鳴神を怖れけるぞ、捨ててからの命、少しも我は恐ろしからず」と、ひたすらに恋の成就に心身を砕いていた。

それでは、江戸短句では、雷を如何に人間的に詠んでいるであろうか。

○娘に智恵をつける雷（武・二）

すなわち、雷の鳴った瞬間に、若い娘は一世一代の知恵を働かせて、これを何よりの好機として、愛の表現に利用したのであった。右の句の意味は、次の句と照し合わせてみるならば、いっそう明瞭になるであろう。

○神鳴様が恋の仲人　（雲鼓点）

なお、その頃の若い女性が、恋愛の機会をどんなにして発見し、それを利用して行ったかを見るに、

○天のあたへの綻を縫ふ（武・一七）

とあって、愛する男の着物の綻びを見つけると、はやる心をおし静め、さりげない様子で、その綻びを縫ってやることによって、身心の接近をはかっていた。

これは「天のあたへの綻」の語によって、躍動する女心を現わすと共に、偶然が如何に女性に利用されてゆくかを語っている。

○綻ひとつ恋のはじまり（武・一六）

このような場合に、その綻びを見て、まず、好意的な笑声をもって一応男の心を惹き、相手の男が頼み込むのを待つという手もあった。

○笑った人へ頼むほころび（武・四）

○取りつき易い顔へ相談　（武・初篇）

麻生路郎句碑除幕式

とき　**4月1日**（日）午前11時開式

ところ　大阪市阿倍野区・阿部野神社
（南海阪堺線天神ノ森から徒歩3分）

会費　2000円（昼食費を含む）

◎ご参列の方は献句をご持参下さい。

吉原紅月追悼句会

とき　**4月14日**（土）午後1時開場

ところ　NTT姫路しらさぎ会館
（JR姫路駅南口から徒歩10分）

兼題
「吉」　行吉　照路選
「原」　宮口　笛生選
「紅」　松川　杜的選
「月」　中塚　礎石選
※各題2句（熟語・読込み可）

会費　200円

投句　62円切手2枚を添え、4月12日までに左記へ

〒679-41
龍野市揖保町西構225―1
高野　さとる

川柳あしなみ会

夜市川柳募集

課題　「笑う」　**橘高薫風選**
ハガキに3句　**4月30日**締切

〒593
堺市堀上緑町2―9―2
河内天笑方　堺川柳会

国際花と緑の博覧会記念

同人特集

花百句

一九八七―一九八九年

（編集部抄出）

春

つらつら椿つらつら大和郡山　橘　風

藪椿次第に細い嵯峨の道　高　薫

ハモニカの旋律菜の花匂い出す　塩田新一郎

桜咲く丘で謀反を考える　柴田英壬子

ソプラノで合唱花屋のシクラメン　福浦　勝晴

明確な答えをくれぬ花ぐもり　丸山よし津

庭の隅蒲公英何を訴える　渡部さと美

雪柳清い童画と黄昏れる　有働　芳仙

花冷えのそれから母へする電話　前川千賀子

チューリップ散って童話の種が尽き　牛尾緑良

人間も桜も八分咲きがよい　片上明水

田中透太

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

たこ焼と一緒に焼かれる花吹雪　竹内花代子
疲れ果ててピエロは花の下に寝る　越村枯梢
おんなから遅れて届く花便り　高杉鬼遊
散る花にきくさりげなく散る心　高橋千万子
来年へ首捧げたりチューリップ　樫谷寿馬
姉嫁ぐリンゴの花の果てを行く　加藤彩人
まんさくの花古里の神話呼ぶ　北川民子
チューリップあなたと私だけの刻　堀江光子
葱坊主が笑い道草したくなる　安平次弘道
つつじ燃やして豪華な兎小屋にする　渡辺菩句
私もゆったりしよう葱坊主　矢野佳雲
落椿失うものも多くなり　青戸田鶴
エプロンの白がまぶしいシクラメン　河原恵美子
それなりの理由でサクラも狂い咲き　中川滋雀
花便りうちの電話は人ぎらい　小出智子
軍国の歴史は知らず散る桜　森田布堂
沈丁花匂うあたりに机置く　辻川慶子
これで好いのかこれでよいのか桜散る　赤川菊野
ペンペン草けなげに生きるひとがいる　木本朱夏

****

無冠とはこんなにうまい花の酒　さえき
頬寄せてよせてうなずく花明り　やえ
約束へその日桜になっている　山本玉恵
紅椿男へ釘を打ちたがる　野坂なみ
桜散る男尊女卑も美事散る　野中御前
一面の菜の花畑釈迦の声　谷垣史好
花吹雪今日は仮面をすてました　井上森生
未練ゆらゆら椿の花が咲き出して　天正千梢
サクラサクラ今年も皆に逢えました　春城年代
スタンバイばかりが続く花の冷え　宮崎シマ子
　　西出楓楽

夏

月見草と心が通う泥仏　正本水客
別れの駅にせアカシアの花が散る　奥田みつ子
牡丹芍薬浪人いつか忘れられ　月原宵明
牡丹咲く寺大らかに門開く　吉岡美房
原爆忌夾竹桃がまだうめく　小砂白汀
慰めの言葉につまる薔薇の花　波多野五楽庵
ひまわりへ飾り言葉は遠慮する　小西雄々

ねじれ花妻の早口聞き過ごす　北川竹萌

ひまわりの影もはにかみ抱いている　八木千代

ハマナスの花潮騒は亡母の詩　後藤正子

鷺草へ汗と土用の逃避行　田口虹汀

ひまわりの後ろ姿は隙だらけ　新家完司

月見草にきけば武蔵の恋語る　小林妻子

華やいで翳の寂しき燕子花　林露杖

てっせんも野心あるから蔓を持つ　中原汲香

桐の花野良に若者見当らぬ　斉藤劦

睡蓮が心のさわぎたしなめる　榊原秀子

掌を返された日の虞美人草　石原淑子

浜木綿も機銃掃射の記憶もつ　結城君子

匂いを消してバラは自問自答する　政岡日枝子

しょうぶ湯の香りほのかに日記閉ず　遠山可住

ヒマワリの花はまわって善人へ　土橋螢

秋

菊花展明治の客を待っている　都倉求芽

菊日和るす番どうし長電話　本間満津子

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

遙かはるか告白をきく吾亦紅　林はつ絵
信じていいのでしょうかと鬼あざみ　錦織文子
昔話無い街に住むあわだち草　春城武庫坊
萩のみち振り向くことが多くなる　嘉数兆代賀
コスモスと戯れ風は白くなり　福井桂香
つたわらぬ思いにゆれる秋桜　黒田真砂
今朝の夢誰に話そう吾亦紅　光井玲子
本音洩らして風に吹かれた女郎花　山本規不風
かわいそうな菊季節喪失症　柳楽鶴丸
馬追いにせがまれて咲く萩の花　宮尾あいき
水子塚むなしい彩の曼珠沙華　市川鈴魚
女郎花やわいおとこが多すぎる　田中正坊
鳳仙花爆ぜて転生はじまりぬ　林荒介
泡立草身の上話はほどほどに　吉川寿美
二人三脚ひとり失くして曼珠沙華　芳地狸村
野の菊で飾る心の駅がある　岩本雀踊子
彼岸花田舎は遠くなりました　小谷仙山
コスモスの花の中なる町工場　藤村〆女
コスモスや祝電のベル鳴り止まず　西尾栞

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

冬

石蕗の花咲いて逢いたい人ばかり　西山　幸
性善説信じて水仙白く活け　園山　多賀子
冬のバラ温い話が聞きたくて　内芝　登志代
ふぐの肝ぱくり山茶花散っている　江口　度
佗助が咲いて近況たずねあう　佐藤　奏月
ふと黙る背にすずしろの花が咲く　林　瑞枝
無為無策視野に山茶花散るばかり　江城　修史
告白をする気にさせた石蕗の花　西口　いわゑ
ろう梅の花びら透けて皆無口　信本　博子
水仙の首のあたりにある憂い　久家　代仕男
あした咲く程は山茶花散っておく　石垣　花子
水仙の笑顔風邪を嗤ってる　神夏磯　典子
カトレヤに花神にこにこして御座る　谷　信夫
ポインセチア部屋いっぱいの花言葉　園田　文子
水仙の威厳へ無口な風になる　寺田　裕美
それなりの誠意へ寒の福寿草　津守　柳伸
水仙の匂いを届けたいお方　若宮　武雄

―季節の分類は、読売新聞社刊『花の歳時記』による

五濁抄

黒川紫香選

他人さまの相続税を心配し
吸い殻を山程ためた策でなし
にっこりと迎えてくれた妻の策
猫抱くと日向ぼっこがしたくなる
いっぱいに蛇口ひねってから泣こう

和歌山市　内田結実

ライバルは一歩ゆずらぬ杭を打つ
失敗を鞄に入れてきた疲れ
姑さんの聞き上手には情がある
ぎりぎりになって男は胸をはる
おしゃべりなマイク噂を捜してる

鳥取県　山根八重

坂道に笑い話を置いておく
古寺を巡り私の父探す
風のなか革命というパンを喰う
電線の凧が私をみつめてる

鳥取県　西浦小鹿

自問する僕を鏡の中で見る
夢積んで崩して夢に憧れる
花道は上り坂だと父の汗
一コマを釘づけにする冬の旅
お調子にのって舌まで酔うている
お人好しだけが取柄で風に舞う

兵庫県　森脇和子

もぎたての句評が胸を舞いはじめ
振り袖よ花かんざしよ女かな
名を呼べば谺の通う森がある
見破ってほしいひと言だったのに
わがままを許してくれる掌のぬくみ

浜田市　中尾まゆみ

遠い娘へ心通わす夢枕
好奇心人の噂がねり歩く
挨拶が女らしさを引き立たせ

静岡市　沢田きん

陰口に負けてはならぬ深呼吸
無口でも心の通うやさしい眼

島根県　高野律子

何も彼も読んで父の太っ腹
一人住む老母に素通りなど出来ず
枕辺に句集ひろげて友の病む
一喝を父はやさしい鞭で打つ
楽しいな今日も仕事と鬼ゴッコ

広島市　流奈美子

遠い日の愛みず色に溶けてゆく
ためらいにいつか指紋がすり切れる
野地蔵と昔話がよく弾む
信号に時々背いてみたくなる
以心伝心電話のベルが鳴っている

熊本市　宇野昭代

若葉マークがしきりに誘うので困り
鍵盤に指が弾んで春の唄
古日記一途に生きた日が恋し
掃除機の死角に箒の出番あり
そんな事言うたら損と目で叱る

熊本県　大川幸子

ラベル通り咲いてほっとしてる種
自作自演の歯車だからよく回る
未だスネをかじられている手内職
大吉のみくじを人にみせたがる
ワイキキの砂に日本と書いて来た

尼崎市　児玉歌子

だんだんと芝居が多くなる看護
条件をみんな飲んでる太い眉
挨拶のミカンが少し甘過ぎる
誤解生む視野に踏み込めないでいる
自由には振れない旗を持っている

今治市　野村京子

愛ひとつ寒いさむいと抱いて冬
燃ゆる刻きざんで揺れるイヤリング
つまずきは手抜き料理の罰かしら
逢いに行く袖に雪舞う破戒僧
雪の夜はくにへ思いを抱くこけし

八尾市　高杉千歩

うれしい夢叶えてもらう春の雪
シナリオを書き直してる今日の舞い
弁解無用あらぬ願いかも知れず
舌鼓うってる猫に罪を着せ
悲喜劇の中でピエロはひとりぼち

富田林市　池森子

温もりが欲しくて深くふかく掘る
その時のために自信は溜めてある
自由にどっぷり浸っていて欠伸
至近距離から狙われている肥満
おだやかな駅で居眠りばかりする

名古屋市　藤井高子

秒針もうららうららと花時計
ルンルルン若い蝶々が呼びに来る
バランスをたくみにずらすやじろべえ
目じるしをヒョイと鴉に持ってかれ
喜怒哀楽すなおに呑んで来た笑くぼ

砂川市　大橋政良

つまずいて世間の狭いことを知り
朝めしがおいしい二度の職になる
手鏡の中で可もなく不可もなく
理想論ほこりかぶって棚にある
つのを気にして尻尾が出てしまう

大阪市　上田柳影

よい嫁になれよと葱をきざませる
差し伸べる手は温いとは限らない
春一番愁いが少しほぐれそう
諦めに徹する老父に寄りつかず
泥んこになるまで雪の美しさ

堺市　楊井二南

職歴の有為転変で齢が知れ
相槌へ昔の話向きを変え
退職の時期が良かった決算書
巡り合い昔の写真顔を指す
店仕舞先ず灰皿を取りに来る

米子市　足立由美子

山坂を越えるわらじを編んでいる
友からの電話も春の音で鳴る
あきもせず同じ暮しで明け暮れる
寒いから犬にも牛乳温める
ふるさとの思い出筒に入れてくる

京都市　松川芳子

平静を装う母の目が赤い
柵の外不協和音を聞いている
耳もとで囁く鬼がいて困る
喪が明けて女に返る紅をさす
評判を気にして火消役が来る

大阪狭山市　桜井荘次

追い風に甘えたくない車椅子
別れ道二つの影が思案する
蛇口から洩れる噂の裏表
天晴れと思う日のある影法師
主役の座夢に見ている馬の足

熊本市　北川一進

音信が途絶えてからの神頼み
片道になった年賀で気をつかい
錯覚が恐い無事故の免許証
商談の済むまで本心見せずに居
邪魔くさい返事怒りの声になり

尼崎市　森安夢之助

郷愁を誘う母から花便り

不用意な俺の言葉で座が白け
温い雲金魚の水が動き出す
指よりも小さい鶴を折る女
玄関へ警官の帽子かけておく

久留米市　鶴久百万両

風花に青い妬心が燃えていく
仏画描く左遷の迷い消すように
去る者は追わぬと啖呵きったけど
謄本に亡父の隠れた謎が解け
おばあちゃんになっても雛まつりが好き

八尾市　片上英一

鬼は外　オニと一緒に出た男
虫一匹殺せぬ貌で焼肉屋
ここだけの話みんなも知っていた
シナリオを変えさせられている左遷
人妻と夫婦善哉食べてみる

米子市　新正子

梨の花実るつもりで咲いている
無実です化けかた知らぬ狸です
母さんの気合いで朝がやって来る
許すとは言わず季節の荷を送る

吹田市　井上照子

隣席の人ふるえてる発表会
調子よいことばかり言う見舞客
記念写真少し背伸びをして写す
翔びたいと女が羽を磨いてる

尼崎市　住谷石舟

会社での父の我慢は知らぬ子で
過労死に遠く年金朝寝する
テツマンをしたとあくびが言うている
お尻からむかれて蜜柑無表情

鳥取県　西原艶子

がらくたにも思い出があり捨て切れぬ
お祝いが続いて財布悲鳴あげ
いつからか同じ祈りになる夫婦
好きという言葉信用してしまう

寝屋川市　宮崎菜月

いのちある小さきものへ情をやる
一日の早さについてゆく手足
誰彼がうれしく浮かぶ日のゆとり
春一番急に逢いたくなってくる

和歌山市　山口三千子

意地張ったために引き際見失い
やさしさが欲しいと思うバラのトゲ
年金の幅で暮らしの灯をともし
階段の高さを計っている蛙

藤井寺市　高田美代子

つむじ風それから疑い深くなる
すこし浮かれていいのでしょうか花まつり
雑巾をまた縫っているおばあさん

いるだけでただそれだけでいい夫婦　静岡市　増田扶美

格好はどうあろうとも着膨れる
青い海風いで竜宮ありそうな
思い出を一つずつ消すショベルカー
一泊に未練を残し雪の宿　堺市　桜沢あか里

旅馴れた寝台特急乗車券
スイッチをこまめに切って姑達者
妻を味方にしてから妻に負けている
鬼さんの座席が一番あたたかい　静岡市　大神静枝

活けた千両から春の香を貰う
訪う人も無く病窓へ雀来る
視野広げ明日の私をみつめよう
たそがれて降りる幕間をつなぐ孫　静岡市　小木久子

石橋を叩いただけで尻込みし
別れぎわ素直にごめん言えました
B面が好き素直ではないわたし
こだわりがあって素直になれずいる　尼崎市　山田保蔵

シチリンで焼いたサンマが母の味
長電話相手もヒマと思ってる
無器用な手つきで針もつ妻の留守

三ツ指で迎える妻もあるらしい　岡山県　福原悦子

小さな愛花を信じて丸く生き
わだかまり捨てて仰いだ夜の月
目標を少しゆるめて老いてゆく
捨てられた猫が家族の顔となり　鳥取県　石尾かつ乃

ばらばらのくらしもあった古日記
平凡に父の足跡踏んでいる
やがてくる老いに備える火吹き竹
職引いて花とおしゃべりするゆとり　十和田市　阿部進

反対をする程燃える青い恋
お茶漬に馴染んで夫婦恙ない
句読点なしのお喋り聞き疲れ
返り咲きねらう候補は愛想いい　大阪市　亀井円女

想い出を大きい筥に詰めかえる
恋しゅうて亡母の着物をひろげてる
愛犬よ来世は物言う子におなり
若者よ夢見てるかい翔んでるかい　姫路市　谷清柳

余生とはいつからのこと茶がぬるい
グループに歌を忘れた鳥がいる
さみしくて花瓶の位置をかえてみる

自叙伝に虚構をまじえ筆を置く
鳥取県　中瀬さつき

子育てに追われた日記読み返す
救急車蜂にさされたとの噂
母さんが戻る勉強はじめよう
一年生新しずくめが待っている
枚方市　山崎彩子

梅一輪そっと咲かせて寒の雨
一病が春爛漫を夢にみる
今更にポーズなどとポーズとる
温めた想キャンバスが受けとめる
兵庫県　奥野テル

ライバルへ喝采おくる日のゆとり
躓いた数だけ太る知恵袋
暖冬に律義な花の狂い咲き
口紅も中流という彩を選る
熊本県　高野宵草

喋るからでっかい飴玉さしあげる
春ですよ豆が嬉しい手を伸ばす
本当は間抜けな顔ですから眼鏡
コンピューター僕をカードで捕捉する
熊本市　黒田緑

行く先を変えてみようか俄雨
錆びついた男へ乃公出でずんば
老醜のあわれを思う背の冷え

久々に心の旅の切符買う
尼崎市　尾宮弘治

愚痴言いに帰って母の肩を揉む
手鏡に染みた女のいくさ傷
寝よと言う母も起きてる明日受験
蛇口からわが家をゆする新春の音
十和田市　阿部喜久江

逢えばすぐ崩れる髪をセットする
筋書きのないドラマ演じて共白髪
酔眼にどの娘も美女に見えてくる
雑音がいやで補聴器はずしてる
酒田市　永澤裕子

春の陽に冬を飾った花は捨て
まだ散れず居ると老婆の字が踊り
淋しさに又打診する子の帰村
焼石を入れて浜辺の鍋が煮え
静岡市　柳沢たま

丁寧に挨拶しながら誰だっけ
一人居に花と挨拶する日課
高笑いして不景気をふきとばし
空港も人で溢れる好景気
熊本県　岩切康子

忘れたと詫びてる嘘を聞いておく
気にしてた投函忘れ旅に居る
温泉に浸り海の入日に手を合せ

悪口を言い合っている選挙戦　出雲市　岸　桂子

雪女　地上は消える所なり
一度とて狂わぬ時計で物足らず
寒椿目立ちたがりで雪に散る
小鳥来て花に口づけしてかえる　西宮市　上嶋ふさ子

飾らない母は陽気でお人好し
老いらくの淡き夢みし春こたつ
着ぶくれて動かぬ老いの物忘れ
かがまりし母の背流す旅の宿　枚方市　森本節子

延命策花の命も長くなり
結果待つ廊下の隅のうす寒さ
灰色の空ばかり見え窓を閉ず
春一番花の眠りを揺り醒ます　尼崎市　的場十四郎

運勢を信じきってる父の背
放つ矢を止めたときから運が向き
手伝いに帰った娘がよく眠る
走らねばライバル先に旗揚げる　寝屋川市　太田藍子

急いでる時にどうでもいい電話
順番に風邪で休んだ一週間
福引きで子供が当てた缶ビール
集まってみればいつもの顔ばかり　今治市　渡辺南奉

幸せが見えて来たから油断する
ライバルは自分妻にもそう言われ
一票をくれで済むのに長々と
三月の風を見つけたのは土筆　東予市　小山悠泉

聴診器の秘密を知っているカルテ
草笛を吹けば青春よみがえる
寒餅をつく古里の小正月
産声を待つ産院で落ちつかず（孫誕生）　岐阜市　渡辺杏村

ストレスを発散してる長電話
ハンカチの名前が読めたうれしい日
先ず親が下見をすます下宿先
東京で遊ぶ学資に売られる田　姫路市　松本一郎

玄関に花一輪の安らぎが
神様が休めと三日床に臥す
許そうと心に決めてつのる憎
窓あける亡母好きだった庭に春　田辺市　染道佳明

柳友とぬくい握手をして別れ
土地買って青い野菜を植えている
賞もらう時のポーズを練習中

茶碗少し欠けてはいるが平和です
佐賀市　江口万亀子

小便小僧でなくおもらしじいちゃんで
この一年空回りして年がふえ
片減りの靴が重たい影法師
注意するより父の拳が早かった
尼崎市　鈴木良征

清濁の濁にむらがる黄金虫
ちょっとだけ正論吐いてみたくなる
居酒屋で時折人の噂聞く
二匹目の小猫のように膝で泣く
旭川市　朝倉大柏

仲の良い友から風邪を貰い受け
流さない涙を男持っている
真剣な顔で放屁を待つベッド
ハワイから文化の顔で立ち戻り
西宮市　菊池トミエ

留守番の気ままな昼の炬燵膳
独り言聞いてくれない墓掃除
客を待つ花一輪を飾りつけ
軽口が友を裏切る事になる
兵庫県　東浦砥代

お茶お花苦手で母を困らせる
笛の音にすぐ乗る妻でいて平和
カラフルなドレス女の保身術
底辺に住んで情けが身にしみる
鳥取市　岩原喬水

敬語などいらない友とコップ酒
祝電を打った本人出てしゃべり
給料の割には荒い人使い
不倫かな女心の耳飾る
尼崎市　新井朋子

あなたへは地図がなくとも帰れます
青い河舟はどこまでも進む
合鍵かそうかすっかり忘れてた
溜息も一種の職業病かしら
出雲市　伊藤寿美

寝たきりに風が運んだ花便り
嘘つけぬ小鼻でいつも負けている
冬籠り老いたる蟻に溜る鬱
郵便夫過疎の新雪踏みしめる
鳥取県　黒田くに子

かくされた過去は言わないのど仏
その先は言わぬカルテの字がこわい
日めくりの昨日の指紋はいでいる
鳥取県　太田幸枝

枯れすすき歌って酔うて昔の恋
同窓の一人ふたりが減る老い路
芋粥が好きな亡父には父の日に

成人を迎える孫の祝い酒
お隣も同じ悩みの子のしつけ
戦場で迎えた正月ああ北支
尼崎市　木下義嗣

まなうらに宍道湖の夕陽蜆汁
相部屋に許し合うてる旅の貌
思い切る明日への旅はさわやかに
貝塚市　池田寿美子

流転人生やさしい鬼に救われる
男は弱く悲しいものかドアチェーン
立ち読みでいのちの夢を拾い出す
愛媛県　八塚三五島

かあさんの形見の指輪大きすぎ
テレビニュース地球の裏を見ておこう
走りたい事もあろうよ庭の石
尼崎市　中澤向西

囲いから逃げた小猿が日向ぼこ
一等賞当てた自転車盗まれる
手放した犬にこっそり逢っている
尼崎市　明壁敏之

それぞれにドラマ団地の灯がともる
そこここに雪を残して藪の春
お伽ばなしとっても好きなさくらんぼ
京都市　小林英子

父さんの伝統工芸勲五等
嫁ぐ娘に六法全書持たす父
すき焼で息子の悩み聞いてみる
富田林市　山原昭水

塩届く敵の心の広さ知る
また一人敵に回したさみしい日
破れ縫う針が女を取り戻す
藤井寺市　楠昭子

北風に向えば男ムキになり
今日生きるためには尻尾振っておく
老いてなお酒の肴の友が居り
島根県　加本義良

失敗を許せぬ苗が伸びてこぬ
出直しのきかない道で立ち止まる
健康法説いてポックリ先に逝き
鳥取県　久野野草

盗る物はないけどなどと鍵をかけ
それっきり亀は頭を出し忘れ
病院の夜の廊下に音がない（老母入院）
島根県　菅田かつ子

満願の日まで盃伏せてある
性こりもなく多弁した自己嫌悪
習慣をおそろしい程子が真似る
出雲市　金森知恵子

父さんの愚痴押し流すワンカップ
鳥取市　西村黙光

方言へひょっこり吾を取り戻す
花吹雪昨日のことは忘れよう　八尾市　向井しづ子

欠けた皿わが身のようないとおしさ
身辺を整理しようと待合室
表掃くしゃれたヒールで若い主婦　尼崎市　吉永伊三郎

女房が重荷となってゆくピエロ
焦げもあるかまどで焚いた里の飯
猫の子を貰って帰る立ち話　羽曳野市　芦田絢子

自分史にヒロイン気取りの一ページ
鰯雲おからを炊いてみようかな
ストーブの前でマラソン見ています　摂津市　木下道子

普通のおばさんになるのもやはり難しい
猫ひげを生やし高貴な方に似る
名をもろて飼猫らしい顔になり　尼崎市　佐野六浦

酌み交す友は本音を伏せている
腰骨がはずれる程のフラダンス
待ち合せ時計の針がせきたてる　寝屋川市　河合時弘

忘れぐせ妻にたのんだのも忘れ
焦げついた鍋がわが家の味になる

席ゆずる少女が見せる片えくぼ　岡山市　中嶋千恵子

しんしんと雪降る夜の数え唄
静と動からんで回る夫婦独楽
したたかに生きて女の色模様　鳥取県　乾隆風

老いぼれも梨の交配ならしよう
さあこいと孫へ四股ふみして見せる
能書きは良い事ばかり喋ろうよ　和歌山市　田中みね

でもどこか少し抜けてる人で好き
火の女に触れて逃げ道見失う
心身共に疲れましたと皮下脂肪　尼崎市　長浜澄子

一泊と思えぬ友の旅支度
おかめでもいいやとことん生きてゆこ
愛の輪を投げて未来の地図を描く　兵庫県　倉垣恵美

逝った義父へ元気でネと賀状来る
しつけ糸で直せる癖ならいいのだが
半分は自分へ安心させる言葉　青森県　福士トキ

岩のりが春告げ今朝のおみそ汁
犬と子のかけっこまぶしい冬日和
気に入った嫁が送った冬帽子

外泊の患者いそいそコンサート　守口市　森川春子
空けた家どこかの医者が買うらしい
鶴を折る手先の器用さをほめる　和歌山市　森茜
純白の地へ転任の第一歩
おこらせて泣かせて笑う公休日
おはようとすれちがってくほの暗さ　弘前市　肥後和香子
美しいうそと思えば軽くなる
デザートのキスには少し辛すぎて
美しい十代なんて見当たらぬ　堺市　山本半銭
古日記亡母の言葉が活きている
逃げられず黙って鍋を磨いてる
六十路きて遊びも恋も正念場　静岡市　宇佐美寿美
枝広げ春を呼びこむ雪柳
肩幅の広さに任す未来像
仏間の灯やさしく亡母が生きている　鳥取市　武田帆雀
スクリュー階段からも演説聴いている
寒鮒のさしみで妻が機嫌とる
噛み合わぬ歯車時は流れゆく　米子市　小西五十鈴

人並みに晴れ着きせたい親心
大陸へ馬置いてきた負けいくさ
美しく写して欲しいカメラ持つ　鳥取県　今本早苗
朝陽を浴びて今日一日へ駆けて出る
はじめての受験母子とも緊張で
聞き上手な貴男ひかれるものがあり　羽曳野市　福田満洲子
節分の豆も欲しいよ飢餓の国
よくまわる舌が気付いた咳払い
寝入りばな起こす隣の洗濯機　鳥取県　美浦美代子
地図見れば点にもならぬ島に住む
杭打って川の流れを変えてみる
太陽と一日喋る窓が好き　兵庫県　酒井靖子
添書きの一こま嬉し自信抱く
星くずを集め自分史書きはじめ
寿に似合う昆布茶の味が好き　大阪市　清水絹子
戸をあけたら先に出てくる猫の声
父さんの買物いつも塩昆布
十キロの米は孫ほど軽くなし　鳥取市　近藤秋星
躍動の春靴下を穿き替える

妻だけが今年もくれたチョコレート
でで虫が私の名前呼んでいる　熊本県　増田一乗

帰りには獲物わけあう釣仲間
屋台の灯残業帰りに一休み
ずっこけた調子で笑わすバス旅行　和泉市　中川楓

思いきりわがままましたいシクラメン
悲しみを察し愛犬じゃれつかず
針と糸そんな夫婦もする内緒　河内長野市　岡崎実

大物を呼ぶと聴衆押し寄せる
商売が順調社長絵筆とる
絵巻物馬上の貴族愁いあり　高槻市　芦田静江

生き甲斐の趣味が悩ます自己主張
胃にささる言葉聞きつつ放っとけず
生活のリズム豊かにミレーの絵　奈良市　米田芳子

ミニはいて脚が自慢の娘が通る
もちの木で小鳥も何を思案する
時みちて種子がはじける手の中で　鳥取県　石谷美恵子

善人にされて疲れが加速する
老母への便り幸せですと書いておく

小豆煮る匂いうれしいことがある　枚方市　中山おさむ

後手に回ってから見えてくる舞台
第三の職場へ挑む老青年
孫乗せたテールランプが消えてゆく　鳥取県　西川和子

かがみよ鏡幸福そうに見えますか
ポケットに一円玉が溜ってる
スナップ写真やっぱり齢は隠せない　伊丹市　小熊江美

鰐皮のバッグ持つからスリに合う
娘と住んで愚痴言い合えるから気楽
デパートをぶらつき無駄な金つかう　相生市　中塚礎石

舌先で丸めた嘘がとろけだし
マラソンガ追う白バイの排気ガス
灰皿をいっぱいにして思案する　岡山県　土居ひでの

雑魚の目をかき立てているジャンボくじ
強がりの涙濃いめのサングラス
肩書が切れて出歩く父の靴　大阪市　宮本欣史子

バンザイで島を出たから戻れない
風邪ぐらい騒ぐでないと外科病棟
おだやかに言ったつもりが泣きだされ

鍋つつき過去をつついて老いの酔い　大阪市　尾崎黄紅

娘が三人遺言かいて置けという

お訣れはいつもの橋の真ん中で　寝屋川市　井上すみれ

木蓮の葉落ちつくして月を割る

海老の眼が哀願してる著を置く

ある友の話の余白に見る気品　鳥取県　田渕美子

梅干を盗んで食べたことがある

お粥炊く姑の背中へ手を合わす

毬作る姑とコーヒータイムです　鳥取市　松本伊都子

少しずつ嫁のリズムが輪をひろげ

孫三歳ボーイフレンド連れてくる

土の香が好きで畠を城にする　出雲市　森山健歩

判決文みたいに漢字よく使う

西も東も分かりませんとソツがない

王手飛車大事な会が重なった　米子市　中井ゆき

ぶたれても叛かぬ馬の目が哀し

大阪は子の住む街でなつかしい

息とめて別れの言葉きいている　豊中市　村上とく子

記念日に六甲の水買って待つ

十円玉やっぱり嬉し拾った日

ゲレンデの彼はすてきに見えたけど　羽曳野市　徳山みつこ

遠い日の耳をまかせた母の膝

病室のにおいが残る荷物解く

朝シャンが匂うセーラー服の群れ　豊中市　三宅つえ子

ふっきれぬ想いを切ってからの道

夜更けまで昔を語る老いの耳

古時計ゼンマイ切れてとぼとぼと　堺市　井上たかし

春風が吹けば吹いたで花粉症

七転び八起きに馴れた不仕合わせ

転職をせっせとすすめる求人誌　鳴門市　八木芳水

本当の涙素顔がすばらしい

単身の味を覚えた飛行雲

消費税妻もぼつぼつ知る政治　広島県　森川抜智

息子さんですかと若くみられた電話口

日本の良さは周囲に海がある

兎も角も女性扱いにくいもの　鳥取県　山内芳江

頂点に立って厳しい風を受け

捨てゼリフ言って学歴ほのめかす
美しい川が自慢の過疎に住む
唐津市　山口ふさ子

雛祭り訪う人もなき独りかな
土手に咲く菜の花からも詩をきく
表札に夫の名古びて寡婦独り
岡山市　河野青銅

情報化風の便りを懐かしむ
渡り鳥群れの掟に背かれず
背信を無情に裁くコンピューター
河内長野市　大西文次

言論の自由夫婦の口喧嘩
風邪引いた医者が飲んでる卵酒
とめられる積りの辞表受理される
佐賀市　古川一徳

世代交代昔の意地がまだ残り
無欲でも菊のことには意外凝り
遺言状長生きをして空回り
大阪市　平井露芳

婦人科のナースで子供まだ出来ず
豆よりも人が恐いと鬼が逃げ
サーチライトまでUFOにしてしまい
広島市　中村要

顔色を程よく読んで恙なし
昭和史は閉じても閉じぬわが戦史

冬晴れに今朝は尼尾がよく振れる
岡山県　後安江山

どの花に添うても優しいカスミ草
病む友を見舞うて神に祈るだけ
鏡まで私の心写し出し
静岡市　中西雅

孫の舌にカレーの辛さあわされる
ふりかえる自慢話で老いが知れ
水たまり蟻一匹に広すぎる
北九州市　香月直平

ご隠居で気ままにこなす墓そうじ
物置へ捨てるに惜しい金盥
胃カメラを命惜しんでのみに行く
鳥取県　山本正光

鯛の値を買う気はないが聞いている
揺り籠のなかから嘘は聞こえない
ポケットで貴方の指を温めたい
神戸市　木村貴代子

千羽鶴重き祈りにとび立てず
指切りようそはつきたくないものを
腕白もかざり立てられ入学す
今治市　渡邊伊津志

占いが好きな女で婿出来ず
たかが女だけど女の恐ろしさ
味噌汁の味が孤独を募らせる

川西市　西脇冨美

群生する水仙にポーズなど要らぬ
ゆっくりと刻んでほしいいい日です
お越しをと地図まで添えて友の筆

岡山県　伏見すみれ

鈍感が一層佗びしい冬嵐
新婚の夢は白紙を埋めつくし
披露宴母サン泣いてばかりいる

吹田市　山本希久子

知らず知らず自分の高さに釘を打つ
同じもの食べて痩せたり太ったり
居ては邪魔居らねば淋し膝の猫

広島市　名和喜一郎

葬儀屋が時間通りにする恨み
保険屋と妻が私を値踏みする
親戚の順序教わる通夜の席

大阪市　家村高雄

もと婦警昔の顔でお出迎え
ネタ切れにエープリルフール恙なく
停年が延びてネクタイ派手にする

岡山県　大石あすなろ

時々は当るのもよし夫婦ごま
うち明けるチャンスをくれたコーヒ皿
波長合う予感がしますティータイム

寝屋川市　豊福路子

リハビリへおんぼろ車並べてる
矢印の方へ行っても音痴性
引き潮へ身を委ねてる安息日

島根県　今川三津江

薬草を飲んで健康信じきり
満腹になると枕がほしくなる
老い二人話はいつも過去に触れ

鳥取市　美田旋風

ほめられて生き方ちょっと変えてみる
好きな花道をへだてて咲いている
ときどきは殺し文句も変えてみる

鳥取市　中居武士

雪道も歩く相手で寒くない
ぼんやりと返事したので嫁にゆき
式挙げる出雲大社へ初もうで

箕面市　岩津岳夫

ボケてなお貸した金だけ覚えてる
金借りた帰り犬にもお世辞いう
代役の方が上手なご挨拶

豊中市　滝北博史

サイ銭に一円玉を持って行く
本棚が立派になって読まぬ父
マージャンでご用はじめも終電車

岡山県　富坂志重

雪の朝ふり向く私の足の跡

日だまりはやっぱり昨日の顔ばかり
市場かご隣のかごもチラと見る
米子市　服部朗子

亡母呼べば道が開けて光射す
賑やかに氷が解けて元の水
ばらばらとゆるい荷造りこぼれ出す
吹田市　西岡豊

手拍子の煽てにのった奴さん
農薬のつかん野菜をくれる友
宴会も派手な幹事で盛り上る
島根県　渡部好栄

君の名はときかねばわからぬ同窓会
人情の押売りしていることもあり
カラオケが調子はずれに盛りあがり
静岡市　浅子まつゑ

家中を灯して夜の留守居番
幼な児の話の中に夢がある
嫌いだと言えず苦手と逃げを打つ
大阪市　堀口欣一

万博の近くに住んでつつがなし
蟻の道続く人生教えられ
ウイスキーポケット瓶で寝るとする
羽曳野市　麻野幽玄

軽く揺すって冬のねむりを起す風
退職後たまの電車がうれしくて

真実は子供の話から洩れる
方便の嘘も嫌いで孤独なり
大阪市　山北三三三

包丁がよく切れサラダよく売れる
ばらばらとめくって好きな文字拾う
米子市　小塩智加恵

猫のひげ伸びても虎になりません
麦踏みが時になつかし街暮し
富田林市　大澤三四子

神様に借りっぱなしの祈りごと
しめ飾り外し今年の顔にする
鳥取市　前田一枝

花屋から花より綺麗な娘と出会う
栄転の数ほど敵が増えてくる
静岡市　永倉柳華

年金は食うだけ閑をもて余す
弟の方から孫が出来て来る
新潟県　高野不二

母だけがはしゃいで豆を撒きました
ためらった集金先で茶をよばれ
八尾市　松本芙美子

ある自信まっ赤な靴をはいて出る
定位置があって茶の間のにぎやかさ
竹原市　古田比呂子

富田林市　楠　美子
口紅も少し明るく初詣
のびやかな顔にかくれた苦労性

出雲市　高橋きよし
肚割って話せる友がいてうれし
無我夢中育てた子とも別世帯

八尾市　籾山　隆
終電を気にしてからの負け勝負
年ごとに弱くなる歯に豆の数

堺市　宮本かりん
夫婦です同じいたみを感じ合う
もつれ糸ふんわり解いて老母達者

鳥取県　横山房子
ぼんやりの視野にはいつも亡夫がいる
マンションに住んでストレス溜めている

大阪市　今西静子
冗談が冗談ならず座が白け
仲よしは和服に着替え針供養

箕面市　中嶋民子
均等法女の傘も広くなり
これきりと言うては母へねだりよい

大阪市　川原章久
名刺一枚これが物言う世も世なり
三と五にやっと日の目の人形師

島根県　福間博利
わが書いた文字がよめないとは不覚
政治家に節目けじめを語らせる

大阪市　清水利武
事故現場一番先に来るカメラ
花博が来れば浪花に桜咲く

倉敷市　斎藤進一
海育ち海の広さを知らぬ雑魚
一枚の紙が踊らす家騒動

熊本県　立道善太郎
反対が反対される消費税
老いてなおやさしく生きる人の道

寝屋川市　北岡波留吉
大事な夫粗大ごみとは何事ぞ
嫁が来た活気で弾む野良仕事

唐津市　入江喜久亨
屋台酒内緒話を口走り
既往症一つあります恋病い

唐津市　野田旭恒
撚り戻す為の喧嘩は厭わない
宅配の男結びの紐解けず

芦屋市　根本敬
飽きもせず水かけ論がよく続く
欲のない水が素直にこぼれてる

奈良市　井上大
つつがなく今年も切手だけ当たり

マドンナを上座にすえる春の宴　東大阪市　大平太一郎

みそぎ論あの手この手で票を読む
チョコを受け甘いマスクでバレンタイン　泉南市　坂根流水

駅に佇ち来るはずもない人を待ち
もうすこし頭冷やせと春の雪　出雲市　原章峰

くしゃくしゃの顔は花嫁さんの父
脇役の彩で咲きますかすみ草　和歌山県　森三枝子

検診の結果が届く雨の朝
ふぐ鍋の湯気に話が円くなる　岡山県　森下正子

手に余る仕事が有って生き伸びる
お喋りの落ちは他人の癖拾う　唐津市　福島紀一

ペレストロイカ地鳴りが続く北の国
節分のよんべの豆に出逢いけり　松江市　原長三

いつまでも自信を捨てぬ文机
絵馬に釘滑らぬように母の愛　静岡市　大石たき

人の恋邪魔するほどの野暮でなし
美しく見える時こそ花盛り　鳥取県　木下芙葉

日本人喜ぶ表現万歳で
笑ってる孫の書いた鬼の面　鳥取県　中西智恵子

初春にいいこと聞いた馬の耳
焼き芋の匂う近道友に遇う　岡山県　牧野秀香

ゴルフ場村おこしと言い村がもめ
銀世界星降る夜は胸をやく　岡山県　杉本伊久栄

残り火をまだかりたてるコンパクト
希望まだ捨てずに伸ばす老いの腰　唐津市　浜本治幸

もぐらにも言い分があり開拓地
老妻が置き場に困る粗大ゴミ　秦野市　三原浮木

買物はみんな引き受け万歩計
旗色が悪い分だけよく喋り　鳥取県　伊吹富恵

雪消えて荒野も春の狼煙あげ
夢さめるな亡母が添寝をしてくれた　茨木市　藤井正雄

貴婦人か鎖のようなイヤリング
ぶらんこがゆっくり揺れる思案顔

何時からか息子の年賀多くなり　香川県　松村迷観子

眼が覚めてそばに居るのと居ないのと　鳥取県　中村幸代

夢つめた鞄門出に重くない

慰めの言葉飲み込む冬の海　鳥取県　上田俊路

愛の字がドラマを秘めて丸くなる

山門を出て煩悩のあたたかさ　鳥取市　森山豊子

産声に思わず万歳と叫ぶ

安産で御利益あったなと信じ　神戸市　岩田信義

お袋の味を土鍋で温める

その話無かった事にと揉み手する　豊中市　松岡久留美

里帰り母とこたつの三ヶ日

雪ふかき宿のこたつで一人酒　東京都　山口新子

別れゆく背中に淋しい文字が浮く

かなぐり捨て翔べよ理性の紙ふうせん　弘前市　村田善保

末席の若い意見が意表つき

美しい言葉でライバル舌を出し　八戸市　島田昭治

忌に当り八甲田山も哭いている

挨拶はあまりしないが良く儲け　鳥取市　萩原美雪

女房運は良かったでしょと妻が言う

そう言われても私一票しか持たぬ　宇部市　中村三良

余命表のネジ巻き過ぎて息苦し

ためらって許りしまらない財布　岡山県　江口有一朗

一方通行の子に信頼を寄せている

二つある耳を便利に使い分け　岸和田市　三輪通彦

神様のお呼びかからぬ絵馬もある

久闊に友の名前が浮かばない　島根県　松本聖子

この先は貴男に任す舟に乗る

買わされたチョコをちょこちょこ配るだけ　泉佐野市　真崎浪速子

山彦の返らぬ森がまたひとつ

鬼の首とった男の法螺が鳴る　藤井寺市　菊地繁男

ドイツ語が読める患者と医者知らず

火事場から消し炭貰うオバタリアン　藤井寺市　武部敦子

宅急便半信半疑で紐をとく

猛犬の用心棒が昼寝する　寝屋川市　坂上高栄

小包の中身ぎっしり親心
呑み込んだカメラが痛いとこをさす　岡山県　後安ふさえ

中立で聞けばどちらもある理屈
京財布選って土産は五色豆　八尾市　橋本龍典

碑の前であなたこの字が読めますか
寒の内春告ぐ風を肌が知り　吹田市　廣屋利通

カンパ帳ラストはひらが締めくくる
縁談にひらいて閉じる花扇　青森県　波　ただお

節分に窓全開し福を呼び
ジーパンのお尻で若さを誇張する　鳥取市　谷口侑里

裏作が表作より金になり
町長の挨拶訛り暖かい　橿原市　西本保夫

シャックリの横顔の妻あどけない
不安がる患者に胃カメラ自慢する　鳥取県　米沢正

春の風信号無視でつかまった
冗談もたまに許すと妻は言う　静岡市　大村正雄

お手柄の勲章街で売っている
へそくりを洗いアイロン掛けている　泉佐野市　大工静子

バッグにはそれぞれ数珠をしのばせて
箒持つ手の弱さよスキー靴　富田林市　浦田トシヱ

新雪を踏んで広報配り行く
コケコッコ卵産んだと叫んでる　大阪市　乾哲静

運命と思えば飛べる空の旅
鳥籠に餌をやる平和な朝もある　池田市　林すて

あきないの楽しさ知ったシルバー市
気がつけばやはり屈んで歩いてた　静岡市　三浦つね

外人に挨拶されて照れている
旅疲れ帯も解かずにどっこいしょ　岡山県　平田たけよ

自画像が川の流れにさからわず
創作の童話もまぜて孫ねかす　島根県　岩田三和

金で買う幸せすぐにゴミにする
赤い実は鳥にくわれて旅に立つ

鳥取市　加藤二代
サラブレッドのような亭主をさがしてる
胸の中北風吹いて恋凍る

島根県　梅木梅園
ふと友の噂をすれば顔を見せ
正月からプランくずれる妻入院

豊中市　額田明吉
信じられぬ合格電に涙の娘（孫娘の受験）
手をつなぎ思わぬ雪に足とられ

藤井寺市　中島志洋
膝枕見つけたママの福ぼくろ
我がままに育てた母の丸い膝

高槻市　代田風樹
今日もまた昨日のごとく生きている
子の店の壁の陽ざしがうれしい日

藤井寺市　田中孝子
認め合い譲り合いして夫婦の和
癖知り抜いて触れて離れて夫婦独楽

岡山県　福原辰江
昭和史の荒波越えた自画の像
愚痴並べはや老妻の高いびき

八尾市　橋本信江
顔剃って肌の手ざわり若うなり
生かされてやっと感謝が湧いて来る

静岡市　青柳金吾
幸せは今日も使える夫婦箸
喧嘩のあと俺の好物忘れない

岡山県　三村美恵子
静寂を選挙一声素通りし
春一番洗濯してる温い風

鳥取県　中藤俊子
放列のカメラに会釈できる女
終電車読み捨てられた週刊誌

富田林市　加藤ミツエ
私の一票ダルマに目を入れる
地上げ地上げであちこちと杭を打つ

東大阪市　岡田寿美礼
明治から平成揃い初春を
松の内心和みて八十路坂

◇ジュニアの部

大阪市　福西範子
雪合戦あの子ねらって第一球
バレンタインお返しもありハイどうぞ

鳥取県　今本尚子（小五）
見てよ見て新しい服着てるのよ
地ごく耳良からぬことはよく聞こえ

鳥取県　今本あき子（小二）
道草してころんでしまったあやのちゃん
おてつだいするとこづかいふえるかな

—水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

永田俊子

連休はここだここだと初暦
木下道子

中七の表現がリアルで、どれどれと思わず膝を進めたくなる微笑ましい句。川柳本来の姿を見たようで、反省させられました。

ちぎれ雲身の上話したくなる
沢田きん

父恋し母恋しの思いで見ているちぎれ雲がいつか父の顔、母の顔に見えてくる。句の姿も内容もよく、下五の童心が美しいですね。

咲き切って花の一途が地に還る
野村京子

この句は単に地に還るのを詠んだのではなく、地に還るまでの過程や生きざまがこめられ、花に意識と命を与え、花に代表される万物の命の尊さが感じられました。

あちこちと戎神社の梯子する
児玉歌子

お天気は好いし、ついでと言っては悪いがあちこちの戎様詣り。お酒の梯子でないのが微笑ましい。話し声まで聞えるようです。

春一番娘の縁談を連れて来た
宇野昭代

母親としての驚きと嬉しさが、春風でなく春一番という荒々しい中にも春の使者として喜ばれるこの季語によって、嬉しさに躍るお気持が表現されています。お幸せに。

春はうららに花のささやき花の笑み
藤井高子

春のうららの隅田川という例の歌を思い出します。うらら・ささやき・笑みとたたみかけた表現でリズム感もよく、春を謳歌し春への賛歌、若々しいお気持、羨しく思います。

順風逆風気にせず雑魚の群れにいる
寺中三枝子

天下を誰が取ろうとどうせ雑魚のおいらには関係ございませんと、いささか開き直った態で、雑魚には雑魚の気概ありと言うところでしょうか。地に足をつけた庶民の力強さを感じました。

吊り橋でふたりは落ちてみたくなる
内田結実

物騒なお話ですが、あつあつのお二人です。昔の恋の道行を思い出します。下八に万感がこもってゆれる恋心が出ていると思います。

遠景に亡母のきれいな湖がある
流奈美子

詩情豊かな表現で、お亡母様への溢れる優しい慕情。きっと見守って下さるでしょう。

素直になろう素直になろう髪を梳く
金森智恵子

下五が他の言葉でしたら、平凡な句になったと思います。上句と中句で二度重ねたことで純真な願いを強調し、髪を梳くという動作で梳かれる髪の素直さと相まって相乗効果を上げていると思います。

信号待ち誰かが恋を打ち明ける
大川幸子

紀子様のことと切り離しても、独立性があり、信号待ちの僅かの間に恋の火がショートして不粋な信号機も喜ぶことでしょう。「誰かが」が平凡を脱していて、還らぬ若い日へのペーソスと見たのは独断でしょうか。

もう一度たしかめたくて投げる石
的場十四郎

石をただ投げるのでなく、確かめたくてもう一度投げる。人生の裏を知りつくしたしたたかさとスリルがあり奥深い句と思います。次に捨て難い句を選ばせて頂きました。

切り札につかう笑顔をもっている
山根八重

ネクタイを外し本音の旅に出る
中山おさむ

練り上げた粉の固さに妥協する
山田葉子

あるときは救いとなった亡母の呆け
亀井円女

銀河系

河内天笑選

米子市　新　正子
移る世に雪が白くてホッとする
新しいうちに娘よ嫁に行け

尼崎市　春城年代
眼を病んで心の底を見つめている
桝の豆数えて夫婦きりの家

鳥取県　新家完司
恋をしました　新しい靴を買う
先輩より先に死ぬとは失礼な

堺市　近藤豊子
桃太郎いたころ鬼も強かった
まねき猫だしの匂いが染みてます

鳥取県　江原とみお
再会のおんなと狸そばを食う
スッポンを喰ってマスクをして帰る

和歌山県　寺田裕美
さもあろう一対一の冬の宿
それからの二人が売れる週刊誌

香川県　木村明人
せめて孫だけは味方にしておこう
サーブ権カアチャン持って離さない

大阪市　小出智子
結婚式の写真ときどき出してみる
新しい夫婦茶碗を買うてくる

堺市　高橋千万子
やり直す支店へ鬼を派遣する
相談に来たとは男負けている

和歌山市　山川克子
懸命に生きるおんなに橋いくつ
プライドがあるので尻尾振れません

尼崎市　奥山美智子
ピリオドを打てば済むとは限らない
勝つことになれてしまった勇み足

豊中市　三宅つえ子
空振りをしては渦巻く風に会う
平凡な自分史をまた読みかえす

米子市　澤田千春
きりかえて花の笑顔にとけてみる
我が城にがらくたがふえ平和なり

堺市　宮本かりん
にこにこと痛いところをついてくる
やさしさにキュンと古傷痛みます

大阪市　桝本蕗児
シャガールのこの遙けさはなんだろう
流永のオンザロックに声がある

青森県　工藤甲吉
頬べたが痛い天然冷凍庫
雪は手紙で毎日のように来る

米子市　林瑞枝
身を以て崖を支える樹の根っこ
丸いポストと今昔語り明かしたや

鳥取市　武田帆雀
ダスキンと雑巾嫁と姑さん
運命にいたずらがあり塩を噛む

和歌山市　山口三千子
花束を持てば主役の顔になり
真実を話して事がもつれ出し

和歌山市　桜井千秀
愛想いい人にひっかき回される
相槌を打って張本人にされ

海南市　三宅保州
馬鹿バカと叩く女の手が温い
思い切り泣く気一升びん据えて

和歌山市　木本朱夏
バラすみれどちらも好きは罪ですか
アングルをかえるとなんでもない話

米子市　田中亜弥
運開く鍵は自分で見付けねば
古里へ義理をかえしに鮭のむれ

唐津市　田口虹汀
愚痴を言う家が嫌いな福の神
苦も楽も二つに割れぬ寡婦の家

羽曳野市　徳山みつ子
センセイは結構ずくめを言うてくれ
獄中二十八年いま世界史を書き加え

大阪市　板東倫子
つっこみとボケで五党首討論会

偽物もほんまの金でつくられる　箕面市　岩津岳夫

一眠りしてるが如き永遠の顔　米子市　林荒介

女房の手錠は重く温かい　有田市　松井かなめ

女性票浮動票ではありません　八尾市　橋本龍典

呉服屋はじろりと客を値踏みする　箕面市　椎江清芳

野良猫はウルトラCを見せて逃げ　島根県　小砂白汀

好きなもの何んでも食えと脅される　堺市　小西小雪

神様に一番遠い席で病む　羽曳野市　麻野幽玄

花つきて元の静かな散歩道　米子市　八木千代

芒野雪野越えてれんげ野菜の花野　岡山県　松本元江

生きているものみな光るものを持ち　唐津市　浜本ちよ

百回も親を騙して親になる　竹原市　信本博子

おでん屋で知らん女と握手する　伊丹市　樫谷寿馬

よっぽどのことがあったか名が変る　岡山県　富坂志重

女だった頃もあります小引出し　米子市　光井玲子

人間に参りましたと冷凍魚　寝屋川市　宮崎菜月

ふる里の霊柩車なら乗りたいな　広島県　田村新造

大阪へ来たなと思う鱧の皮　橋本市　岸本木魚

弁護士にご縁ないまま共白髪　黒石市　相馬一花

酒呑みに歯は一本も要りません　米子市　中井ゆき

夜かいた手紙少々泣きすぎる　鳥取県　土橋螢

心電図針がドキドキしています　高槻市　川島諷云児

約束のない休日がよく晴れる　鳥取県　西原艶子

お互いに鼻が低くてうまく行く　弘前市　村田善保

満ち足りて心の楽器みな鳴らす　和歌山市　森茜

長生きへちゃらんぽらんが好きと女史　堺市　井上たかし

お位牌も愚痴聞きあきた言うてはる　今治市　越智一水

美しくみかんが熟れて島貧し　藤井寺市　高田美代子

涙一粒こぼしてからが止まらない　茨木市　堀芳江

使い方儲けるよりもむつかしい　大阪市　冨上朝世

チャンネルを春に何かが弾み出す　西宮市　林はつ絵

誰にでもお手をして犬淋しいか　岡山県　矢内寿恵子

陽の沈む山をしみじみ老夫婦　出雲市　吉岡きみえ

本能をみたすイチゴの朱を食わん　枚方市　山崎彩子

追い風に今翔ぶ時よシクラメン　西宮市　奥田みつ子

気休めに毎日のってみる秤　出雲市　森山健歩

うかつにも笑うひと様の小さいミス　姫路市　福本好花

それだけは御免なさいと音痴者　和歌山市　坂部紀久子

子の居ないとこで夫にチョコ渡す　米子市　小村てい子

ヘッドライトに犯されそうな戻り道　奈良市　米田恭昌

免許証の写真にいつも自己嫌悪　名古屋市　藤井高子

軽い罪となりの蝶を目のはしに　米子市　茂理高代

潮時に杭を一本打っておく　大阪市　亀井円女

たっぷりと夢を見てます生きてます

笠岡市　松本忠三
古傷に触れず余白のままでよい
和歌山市　田中輝子
気分一新手紙一通書きおえる
京都市　松川杜的
白足袋の裏の汚れは見ぬ事だ
豊中市　田中正坊
茴香の花芳しき小町の忌
岡山県　福原辰江
いびき歯ぎしり今夜もまた平和
砂川市　大橋政良
パチンコの穴から入る遊び癖
有田市　生馬芙美子
秒針とにらめっこした不整脈
和歌山市　青枝鉄治
前任の鋳型のままに勤め終え
米子市　小西雄々
世渡りへ許して欲しい百の嘘
米子市　白根ふみ
マイペースくずすと我に恥ずかしい
和歌山市　西山幸
五色豆みんな哀しく生かされて
藤井寺市　中島志洋
春うらら欠伸がうつる差し向い
豊中市　辻川慶子
横糸がすこし絡まる倦怠期
和泉市　西岡洛酔
空くじよあんなに期待されたのに
大阪市　川原章久

賑やかなお方でしたが癌だとは
松原市　小池しげお
おばあちゃんに躾けてもろた蝶結び
出雲市　板垣夢酔
童謡がお寺の屋根に映えている
十和田市　阿部進
へそくりが孫の顔見て踊り出る
弘前市　波多野五楽庵
津軽弁がこぼれ出そうなリンゴ箱
兵庫県　辻文平
合格通知ゆっくりと封を切る
大阪市　今西静子
女盛りシャネルの少し匂う寡婦
鳥取県　谷口次男
ああそうかすっぽんぽんで生きるべし
寝屋川市　江口度
銃口のふるえ見抜いているゆとり
今治市　渡辺南奉
人生はいろいろだから虹を追う
鳥取県　さえき やえ
終止符のない楽園で鍬をふる
宝塚市　丸山よし津
ボールペンの軽さパートの履歴書く
愛媛県　八塚三五島
春ですね男どき女どきの羽づくろい
出雲市　竹治ちかし
細い手で掴めるだけの幸でよし
唐津市　仁部四郎
一番はみんな歌える軍歌集

大阪市　尾崎黄紅
子を母に託して保母の職に出る
大阪市　中西兼次郎
投票に味方の顔で敵に入れ
奈良市　井上大
外遊で無理な約束しなさんな
唐津市　山口ふさ子
人不足フリーバイトが大流行
泰野市　三原浮木
山動くなどと野党の盛り上り
西宮市　瀬尾六郎太
火付け役ひくにひかれぬゴルバチョフ
川西市　松本ただし
無駄遣いの分も見込んである予算
寝屋川市　平松かすみ
サークルのマドンナなどとおだてられ
米子市　服部朗子
懐くまで新製品が手古摺らす
神戸市　岩田信義
咳きこんだマスクの下にある野望
岡山県　池田半仙
つくろうた嘘にすっきりしない胸
大阪市　山北三三三
嫁いびり姑になってから分かり
姫路市　大原葉香
ほんまにナーえんえん続く立話
熊本県　立道善太郎
方便の嘘が言えない父でした

岡山県　江口有一朗
自分の力信じ切ってる野辺の草

和歌山市　古久保和子
やあやあと割り込み話腰折られ

大阪市　大福留吉
待ちどおし七日目毎のボランティア

和歌山市　田中みね
うまいこと逃げたつもりが鉢合わせ

八戸市　島田昭治
このごろは嘘の世界が見えはじめ

羽曳野市　田中透太
幸せな顔でたこ焼食べてはる

出雲市　園山多賀子
大器晩成それはお世辞か慰めか

河内長野市　岡崎実
贋物が色あざやかに客を呼ぶ

唐津市　浜本治幸
妻の声が弾んでいるないい電話

姫路市　丁坪サワ子
孫よりも犬ころ飼えばいいかしら

唐津市　入江喜久亭
混浴に知った顔なき旅の宿

岡山県　伏見すみれ
躾糸成人式を待ち佗びる

米子市　小塩智加恵
肩書きは無くても妻は金庫番

島根県　榊原秀子
さくら百選のうちの一つで沸く木次

大阪市　塩田新一郎
銀河系この荘厳な星の群

和歌山市　福本英子
石切様へ脳細胞を取り替えに

大阪市　町田達子
六甲の水でおいしい茶をたてる

羽咋市　三宅ろ亭
SLの汽笛能登路に活を入れ

岸和田市　三輪通彦
割り切っていても淋しい子の別居

藤井寺市　菊地繁男
お互いの犬見比べる散歩道

鳥取県　西浦小鹿
感謝する言葉を胸に抱いたまま

倉吉市　奥谷弘朗
さて何を探していたのかも忘れ

倉吉市　渡辺菩句
天神様の梅でなくても匂います

寝屋川市　稲葉冬葉
ロダンより深く頭を下げてみる

羽曳野市　福田満洲
ダイヤなど無いが歩ける目が見える

和泉市　中川楓
子供との絆にかける躾糸

八尾市　山下美津留
安いから買うてしまった寸たらず

香川県　辻上よしみ
同窓会精一杯の若作り

出雲市　久谷まこと
新人の目がもえている入社式

和歌山市　内芝登志代
うろたえる顔かお顔の救急車

岸和田市　古野ひで
包丁を見かねて婿が研いで去に

岸和田市　島崎冨志子
きまぐれな風が古きず突ついてく

米子市　木村富美子
塀を出で隣で生きるつる桔梗

尼崎市　春城武庫坊
越冬の蠅が出窓で恋をする

兵庫県　遠山可住
うま歳かそうか息子も三十六

兵庫県　倉垣恵美
修正液過去まで消してくれるなら

大阪市　宮本欣史子
双肌の彫りもの程でない男

今治市　月原宵明
七回忌まだ表札で生きている

八尾市　向井しず子
おくすりを持って雪見の許可が出る

藤井寺市　福元みのる
宴会で上司の好み知っておく

「**銀河系**」欄への投句は、川柳塔用箋に氏・雅号・市または県名を明記し、3句以内を連記して毎月15日までに川柳塔社事務所へお送りください。川柳塔・水煙抄・課題吟と同封されても結構です。

女性コーナー

尚香の世

八木千代選

淋しくはないかとベルに起される　八尾市　高杉　千歩

人間にとって時間という逃げやすい、とりとめもないものは他にないと思い、私も今までに時計の句はたくさん詠んできたのですが、目覚まし時計は、そうですか。「淋しくはないか」と鳴ってくれていたのですね。そういえば毎日まいにち、このベルとの対話から気を取り直して、かろうじて生きてきた私でした。気付かせてくださって、ありがとう。

君にしかできないことがありますか　尼崎市　新井　朋子

ほんの最近まで、私も自問しては否定して、それでいながらも何かありそうな気もして、何か自分だけのものを見つけないままに死ぬのはみじめだと、心のなかで模索したり、諦めたりの繰り返しでした。ところがあったのです。あなたでなければ、私でなければのことが、自分のおもいを自分で書いて、人に伝えるために努力する。自分だけの心を作品に投影できたときに気付く自分へのおののき、おそれ、そして祈り。作者の目はぴしっと的を射ています。

濾過された世界が映る水たまり　大阪市　冨上　朝世

洗い残しのコップのように今ひとり　大阪市　田中　弘子

花ピンで止める真ん中へんの風　寝屋川市　宮崎　菜月

かぞえきれぬものを零してきた両掌　和歌山市　後藤　正子

まばたきで見る風景は美しい　米子市　金山　夕子

私がわたしに誓う手紙書く　和歌山市　西山　幸

ライバルより少し深めの穴を掘る　大阪市　西出　楓楽

追手の沙汰を待っているのは太郎冠者　羽曳野市　吉川　寿美

幸か不幸か棚に泣けない皿ばかり　堺市　板野　美子

ふるい絵を消すに果てもない時間　米子市　川上より子

にっこりと笑えるまでの葛藤で　和歌山市　内芝登志代

コイン投げて孤独な音を聞いている　富田林市　池　森子

もう一人の私に贈るねりわさび　西宮市　西口いわゑ

美しい寝釈迦の如きひとりの死　米子市　林　瑞枝

GOGOGOGO私を追い払うつもり　佐賀県　寺中三枝子

また一つ強くなれそう切れた糸　和歌山市　田中　輝子

ありがとう　只それだけの春の土手　島根県　松本　文子

花挿せば壜も口数多くなる　和歌山市　桜井　千秀

春が来る　竹輪に何を詰めようか　貝塚市　池田寿美子

春の風　髪型変えただけなのに　出雲市　吉岡きみえ

着地不明　竿を頼りに河を飛ぶ　倉吉市　淡路ゆり子

老王のかたえで眠る凪の景　名古屋市　藤井　高子

感謝状みんなにあげて旅に出たい　米子市　大田みさと

雪あかり　訣れ言葉が続かない　寝屋川市　稲葉　冬葉

ハワイまで愛を誓いに行くそうな　寝屋川市　岸野あやめ

下糸がしっかりしてて持ってます　芦屋市　黒田　能子

寂しくてもいちど声をかけたくなる　松原市　佐藤　奏月

だあれも見ていなかったので嘘一つ　兵庫県　倉垣　恵美

私をだます鏡を持っている　米子市　新　正子
逆上りできない夢を今も見る　西宮市　門谷たず子
真っ黄っ黄　たんぽぽ咲かすイキな冬　弘前市　肥後和香子
はずみからふたりでとんだ水溜り　和歌山市　木本　朱夏
背伸びんと伸ばして好きな色を着る　堺　市　山本　半銭
生きる術せめてこころの星を研ぐ　和歌山市　松原　寿子
聞きわけが好い古雛でいとおしい　米子市　白根　ふみ
坂の上　雲と約束してしまう　西宮市　奥田みつ子
春の陽にしっかりわたし干しておく　米子市　光井　玲子
母よりも母になってる受け答え　堺　市　高橋千万子
みどり児へ畏れるように櫛を当て　和歌山市　森　茜
一日が明ける祈りへ亡父がいる　岩美町　西原　艶子
雪が降る火宅をおおうように降る　尼崎市　春城　年代
痛いほどわかり言葉が出てこない　羽曳野市　福田満洲子
つまずいた石に説教されている　和泉市　中川　楓
舞い上った今日一日の自己嫌悪　米子市　青戸　田鶴
若いわね　花屋の前で言われたい　京都市　本荘　福子
年金よオーバー買ってよろしいか　大阪府　向井しづ子
逃げ道を確かめてから正座する　和歌山市　古久保和子
竹踏んで踏んで現役延びました　八尾市　宮西　弥生
バラを買う華やぎ忘れないように　岡山県　千原　理瑛
生きている　春の匂いをまた嗅いだ　米子市　田中　亜弥
胸の鈴　新しいのに取りかえる　鳥取市　小谷美っ千
近いのでうっかりぶさたしてしまう　大阪市　本間満津子
鈍行に飽きて降りたら気が抜けて　富田林市　林　澄子
共犯者となってみかんを剥き分ける　兵庫県　東浦　砥代
踏みしめて支えてくれる足の裏　米子市　茂理　高代
受け皿の浅さをおもいやりましょう　和歌山市　山川　克子
水溜りまだ翔べそうでとんでみる　倉吉市　野中　御前
川風に試されている意気地なし　和歌山市　前田　美子
怒鳴る声　そうなのそれが欲しかった　大阪市　小糸　昭子
白髪になっても赤い靴みがく　米子市　寺沢みど里
美しい叔母を葬う　雪しきり　和歌山市　福本　英子
雪よありがとう　たくさん本が読めました　鳥取県　さえきやえ
自動ドア　爪先だけが知る予感　鳥取市　松本伊都子
よく弾む手毬のうちにお釣書　寝屋川市　平松かすみ
出口ない愛はぐるぐる風車　大阪市　神夏磯典子
しがらみを切抜けてきた糸切歯　岡山市　山本　玉恵
手探りでわたしに欠けたもの捜す　和歌山市　坂部紀久子
信号の側にいつもの花が咲く　田辺市　染道　佳明
老い一人　福の残りはないものか　岡山県　富坂　志重
身のうちの川に流して足りるもの　岡山県　矢内寿恵子
疑問符が多くて街が抜けられぬ　米子市　中井　ゆき
春予約　花博切符を抽斗へ　大阪市　日坂　秋子

◇

投句先　〒683　米子市花園町14―8
八　木　千　代

（ハガキに**3句**以内）

▼お詫び▲　3月号84Pでくらわんか番傘創立十周年記念川柳大会の日時を4月22日としたのは**29日**の誤りでした。

行ってきました オーストラリア

小池　しげお

一月三十一日、名古屋空港からの飛行機でオーストラリアとサイパン島へ行ってきました。グアム経由で乗り合わせた巨人軍の選手に握手し、オーストラリアのブルスペンへ着いたのが二月一日の午前九時。オーストラリアとオーストリアは「ラ」が入るとないのとで大違い、前者はラテン語のアジア大陸の南ということで、後者はドイツ語の東の国という意味である。

グアムで着替えなかったので、ブルスペンに着くと汗びっしょり。まず、ローンパイン保護区にいるコアラとカンガルーに面会を求める。日本人観光客は、ここへコアラを見に行くことに決まっており、周りはすべて日本人ばかり。「ウッソー」「カワユーイ」の連呼にいささか閉口するが、飼い馴らされたコアラが百匹もいて、簡単に抱ける点では、オーストラリア広しと言えども、ここをおいてない。五ドル（オーストラリアドルは、一ドル百二十五円）を払い、二歳余の孫と似た重さのコアラを抱いて、コアラのような顔の妻を一枚撮っておいた。カンガルーの餌を買って遊んでいたら、逆に一、二枚撮られたように思う。

ブルスペンの市内観光では、万国博跡や腎臓移植で有名な病院などを見たり聞いたり、ガイドの口ばかり見ておとなしくしていた。道路通行は、日本と同じ左側通行、車は右ハンドルで、トヨタ、ニッサンその他の日本車が多く、三菱がリードしていたように思う。車検なしというのがうらやましい。動けば乗ってよく、運転免許も簡単らしい。少々の事故なら、「ゴメンネ」で大体は片付く。だからバンパは頑丈に補強されており、「ポンコツ屋」が待っているような車も多い。そのような車の中にタクシーもあり、次のゴールドコストで妻とタクシーを止めたが、立っている間に発車され、「オイ、オーイ」と手を振ったが後のまつりだった。

高速道路は気持がいい。スイスイ走って料金はいらない。どこかの国みたいに、渋滞のないのがうれしい。一時間余り走ってゴールドコーストに着く。南北三十キロもある細長いリゾートの街である。豪邸の主は、車のほかにボートやヨットを持っており、舟が着ける高級な邸宅もある。ここで二泊したが、三十三階の海の見える景色のよい部屋であった。

こんな所では河内弁は似合わぬ。「ソヤナー」と妻が言うても黙っていたら、風が強くなり、雨がひどくなってきた。ハワイを一月下旬に上陸したらしい台風が、どうした風の吹き回しか、年に一回あるかなしのこちらへ来たと、英語のテレビが放送していた。「サッパリワヤ」のままシーワールド遊園へ行って見たが、二十二ドル取られたままで、台風に占拠されて追い出され、二ドル九十九セントのカッパを着たまま帰ってきた。海がきれいで、サーフィンなどの写真を見ただけで

買わなかったが、台風の中でも妻はオパールの免税店ばかり見ていた。

シドニーへは空路約三時間、台風もあっちへ逃げたらしい。オペラハウスやハーバーブリッジを見ることができ、写真だけはパチパチ撮っておいた。関心があったのは売春公認で、靴のヒールが高いほど値が高いらしい。女の方々には男娼があり、ゲイパレードがとてもきれいで賑やからしい。シドニーの土産にケン・ドーン画家の書いたシャツを嫁と孫に買っておいた。

シドニーからメルボルンへ飛んだ。ここは花壇の街というだけあって、町並みは整然としていて、緑に映える赤い屋根、低い垣根。洗濯物は道路から見えぬよう気を使っていて気持がいい。観光客がフンドシをベランダに干しておいたら、SOSと間違えられたらしい。ここは次のオリンピック開催地に立候補しており、至る所に看板や幟が立っていた。元英国領らしく、保守的と聞いていたが、市電が合理化反対闘争で一か月以上もストをしているということであった。ゴルフは18ホール七、八ドル、ゴルフ場が街の中にもあって柵がない。道路では、あちこちで斜め横断をしている悠長なお国柄が気に入った。

メルボルンの一日を、フィリップ島に遊んだ。車で二時間余り、島の手前でギネスブックに載ったミミズ館を見る。太さが親指くらい、長さが三メートル、「生きたまま取るのがむずかしい」と書いてあった生きたミミズを見て、急いで館を出た。近くの森はユーカリの木が多く、野生のコアラが棲んでいる。誰かが一匹見つけたので、ビデオを向けたが動かない。彼らは夜に活動し、昼は寝ている。

海辺へ出ると、カモメが愛想よく迎えてくれた。夕食はロブスターのフルコース、「ホホー」と感心しながらペロッと平らげた。九時を過ぎると、ペンギンが上陸してきてパレードをする。この辺は保護区になっており、目を痛めるというのでフラッシュ禁止、バカチョンを取り上げられた人もいた。上がってくるペンギンはフェアーペンギンと言い、世界一小さく、四十センチくらいで、とても可愛い。夜は冷えこんでいるので、厚着の上の防寒毛布も邪魔にならなかった。人間のパレードを見物に上ってきたペンギンをビデオに撮って帰った。ペンギンは浜の草むらに卵を産むらしく、あちらこちらに二十センチくらいの穴がある。亭主と女房の見分けがつきにくいが、鳴き声もビデオに入れておいたので、ことさら孫たちが信用してくれた。

帰りに通ったユーカリの森では、コアラが遊んでいるころだろう。空には南十字星が光っている。南極が近いんだなあと思いながら零時を過ぎてホテルに帰り着いた。

尼崎　春の川柳大会

とき　5月4日(金)午前11時30分開場
午後1時30分締切

ところ　サンシビック尼崎
(阪神尼崎駅から南西徒歩3分)

お話　海士　天樹氏

題・選者　(各題2句)　投句拝辞
「息」　河内　月子選
「泥」　かなもりかず枝選
「竿」　田頭　良子選
「隣」　森田　栄一選
「横」　黒川　紫香選
「封」　北浦　牧郎選
「的」　伊藤　静夢選

※席題はありません。

会費　700円(作品集郵送)

賞　各題秀・準秀呈

主催　尼崎川柳同好会

初歩教室

題―若い

辻　白渓子

今月の題の「若い」は、若いの他に若作りおよび若返りの句が多数を占めていましたが、判読に苦しむ句も若干あったようです。それだけ着想が困難だったかも知れませんが、よく推敲（何遍も読み返す）することが必要であります。

手がはなれ勤める皆さんお若くて　ミツエ
（親ばなれした娘が揃う新入社）

後添いの若さ親父も若がえる　岳　夫
（後添えに合わせて父が若返る）

燃えるよな恋をもした若いなら　ふさ子
（燃えるよな恋で若さが結ばれる）

振り返る青春不本意の銃を持ち　保　夫
（銃持った過去の若さへ悔いがある）

風の向き変えてみせます若い旗　清　柳
（風向きを変えさす若い旗を振る）

離婚後に若返る人老ける人　義
（離婚してスターはすぐに若返る）

体制をくずす若気がいない国　しづ子
（若者の振舞い秩序を守らない）

水たまり飛んで若さを確かめる　彩　子
（まだ若い気がして飛んだ水溜り）

むこう意気の若さが怖い先走り　時　弘
（つっぱしる若さが怖さ気にしてず）

お若いですジョーク承知で好印象　すみれ
（お世辞とは知っても若いへ喜ばれ）

若さとは夢見ることよ翔ぶことよ　円　女
（若いから夢も見てます翔んでます）

若やいでみても所詮は老人会　高　雄
（老人会若い話で座がなごむ）

お若いとお世辞の好きなイヤリング　金　吾
（イヤリング少うし若さとり戻し）

失敗をしても若さでごまかせる　一　枝
（若いから失敗笑うて済まされる）

老人会若い若いと煽てられ　㈡和　子
（老人会年より若いのでもてる）

気の若いお人でいつも座がなごむ　敬
（気の若いのが居て老人の座がなごむ）

若返るつもりか妻のレオタード　とく子
（レオタード妻は若さを取り戻す）

趣味に生く若くなったと煽てられ　静　子
（若返る趣味だと自分でも思う）

定期券歳より五つ若く書き　志華子
（五歳程若う見られた定期券）

若さではまだまだ負けぬと祖父走り　春　風
（ジョギングの祖父に見つけた若い足）

若い女がつっぱっている無理してる　福　子
（Gパンの若さがつっぱる口を利く）

若いつもり立居振舞六十路坂　ひさ子
（まだ若いつもりで居ても六十路坂）

人目引く若い二人の大胆さ　好　花
（公園のベンチが若過ぎ顔そむけ）

若者のテンポについて行く白髪　敬　子
（若者のテンポに戸惑いする白髪）

若返り派手な格好はしてみても　秀　香
（どう派手にしても若うに見られない）

甲子園若さあふれる汗流す　三津江
（甲子園熱狂させてる若い汗）

テニスして若さの残りみつかった　喜代子
（テニスする妻に若さがまだ残り）

老人会それでも私若い方　高　栄
（老人会若い方だという自信）

この服の若い作りがあざになり　芙美子
（デザインで若さをカバーする仕立）

すぐボロが女を騙す若いうそ　章　久
下五「若いうそ」が不明瞭なので、
（若い娘を騙す言葉を考える）

喜寿でも若いと言われ調子乗り　幟
（見えすいたお世辞が若いと喜寿を言う）

青年の主張若さへ押し切られ　サワ子

（青年の主張若いと無視をされ）
若い写真にこれが私かとうたがう　志重
（写真写り年より若くて嬉しがり）
若い気を老眼鏡にみくびられ　艶子
（派手なのに眼鏡をかえて若返る）
常識を外れる視野でヤングはね　芳水
（ヤングとは素晴らし営識気にしない）
弾んでも昨日の若さかえらない　美代子
（はしゃぎ過ぎ日記は若い字で書かれ）
赤い服着られる人の気の若さ　姫女
（まだ若い気がして好んで赤を着る）
話し中の人若い燕と飛んで居る　信一
（噂まき散らして若い男連れ）
若さには安いセーターでも似合う　呼風
（若いから安いセーター良く似合う）
暴走のバイク若さを持て余し　㈲和子
（暴走のバイクへ若さまきちらす）
若い気でいても年には勝てません　侑里
（どうしても年より若うに見えません）
若いからと言訳出来ぬ年齢になり　みつこ
（いつまでも若いで済ませてくれぬヘマ）
アメフトの若さがぶつかり駆け回る　繁男
（アメフトの若さぶつかり喜ばせ）
つやの無い顔にせっせと化けて見る　美子
（まだ若いつもりで化粧品を撰る）
世の中に不満あるのかにきび顔　小鹿
（にきびある顔が不満になる若さ）
ジーパンの似合う若さに遠くなる　美恵子
（ジーパンの似合うた若さを恋しがる）
自惚れも入れて若いと見る鏡　絢子
（自惚れて見ると鏡も若う見え）
血のめぐり悪いか若く見てくれる　昭治
（血のめぐり悪さを若うに誤解され）
老人の席で若い人ねむり　春子
（寝たふりでシルバーシートの若い人）
カルチャーへ若作りして見栄を張る　豊子
（若作りしてカルチャーの仲間入り）
夢を追う若者誘うマスコミ　君江
（若者を山へ誘うているニュース）
はじけそう若さが匂うニキビ面　一乗
（見るからに若さがにじむニキビ顔）
今一度呼べど応えず若さ過ぎ　太一郎
（気がつけば若い時代はとうに過ぎ）
アットホーム今ならローンで余生まで　明吉
（若いからローンの夢に憧れる）
カラオケに乗って六十若くなる　悦子
（カラオケの自信六十路の若い声）
若者が去り伝統の祭り消え　方子
（若者が減って淋しい村祭）
シェーブアップして子宝に見放され　隆雄
（シェーブアップ暫く産まぬ事にする）
お若いと言われいらない物も買い　三千子
（お若いと言われ買う気になっている）
若い日の思い出いくさの苦い味　三恵子
（若い日の記憶に腹立つ負けいくさ）
若者の愛は半熟ながれ雲　清柳
（半熟に似て若者の軽い愛）
若さには度胸をもって勝負する　義
（若いから度胸の良さを見直され）
故里の山で若さを充電す　彩子
（若者で混む故里の山が好き）
若いから許される事に期待する　保子
（都合よい解釈若さが勝手すぎ）
世をすねて曲げて見るのも若さ故　ふさ子
（世を拗ねて居った若さに悔い溜まる）
着想と表現が巧みな句
御破算が利く若さには明日があり　一乗
上流へ若さを武器にさかのぼる　小鹿
若いから流れを変える杭打てる　美代子
少しでも若く見せたい紅を刷く　サワ子
私の句
口紅を付けて少うし若返る
青春を遊ぶ若者たちの浜

◇

題「**呼出し**」**4月15日締切**（6月号発表）
宛先　〒569　高槻市桜ヶ丘北町3—19
ハガキに**3句**以内　辻　白渓子

真

矢野佳雲選

陽の目みた土器に真実訊いてみる　鉄治
真相を知らぬラッパはよく響く　保州
真実を背負うて駄馬がついて行く　信義
真実の絵解きは神に任せよう　シマ子
真実を言えば積木が崩れそう　一乗
真実に遠い話が風に乗る　達子
真っ直ぐな道で欠伸がふっと出る　文平
真っすぐな線を描いて明日がみえ　小鹿
真剣に一筋の矢をしぼってる　芙美子
真実の事が言えない気の重さ　仙吉郎
真相を知っているので慌てない　重人
真実を明かした太い眉二つ　テル
真っすぐに生きているのに疎まれる　諷云児
重責がみんな真顔にしてしまい　兼治郎
真心は逆流しない水の音　螢
真実の種まき弥陀の手を借りる　隆風
天真爛漫子どもは二十一世紀　三五島
真実を話すコーヒー飲んでから　笑風
真実を曲げて冬から抜けられぬ　早苗
人柄か話が真にせまってる　弘朗
真相をさぐれば埒のない話　軒太楼
真っ白な画布へ重ねて雪を描く　京子
真っ直ぐに飛んで来る矢は怖くない　虹汀
真実はこの世で一つ月の暈　寿美
真実の糸がもつれる金の沙汰　可住
真如の月隈なく照らす裏表　旭恒
真情美情の心の限りなし　伊津志
真の道を泣きながら歩いてる　喜与志
真実の思いを薔薇は咲いて見せ　有一朗
真相に意外な顔が浮上する　白光子
手のひらの汗真剣にきく話　雀踊子
真実を通し一徹見直され　悠泉
真を貫き空腹の日が続き　愛論
真っ直ぐに生き抜く苦労なら出来る　美代子
真ん中に生まれ気兼ねのまま育ち　浪速子
真一つ冬の川から掬い上げ　たつみ
真相が知りたい下巻待っている　二南
佳
正直に水は流れる路を選る　明水
真実は一つバラにはバラが咲く　典子
真っ直ぐに立てば明日が見える窓　文子
逆も真言い得て妙の砂時計　南奉
真っすぐな男で匙が曲がらない　しげお
人
真正面向けば反発したくなる　宵明
地
ほんとうの自分に出合う崖っ渕　清柳
天
真実がいくつもあったミステリー　正坊
軸
目の位置を下げると人の真が見え

花束

後藤正子選

花束に七つの色が揃う春　明水
あどけない瞳がくれたれんげの輪　みつこ
母の勲章花束だけのエピローグ　高夫
花束に心を許すイヤリング　京子
花束の一輪すねて横を向き　(森)正子
花束が噂かかえてやってくる　三五島
紙吹雪浴びて花束貰う夢　好花
男性に花束貰う朝の夢　博子
花束をいつも心の隅に抱く　白光子
渡す人ない花束を買ってくる　一枝
花束に小さい約束事がある　雀踊子
花束を手に友見舞う寒い午後　敬
花束に縁がなかった太い指　ちかし
退職の花束　妻に捧げます　喬水
花束がいちばん好きで女です　典子
花束にロマンの香り添えてある　俊子
花束を仕掛人から届けられ　冬葉
花束に挑戦状がそえてある　元江
花束に酔うて明日を見失う　妻子
花束の一つが抱いている野心　寿美
花束を抱いて昨日を振り返る　文平
花束で埋める余白は空けておく　可住

花束に少し歩幅を整える　はるお
花束と一緒に舞台からおりる　結実
花束を抱いて左遷の駅に佇つ　諷云児
花束を贈るしかない護身術　保州
花束に心のうずく彩を添え　柳影
残り火の命へ届く花束よ　玉恵
姑よ娘よ　花束を泣かせるな　螢

花束が波間に浮かぶレクイエム　よし津
花束に戦さばなしは聞かすまい　正敏
花束はどこまで真心伝えるか　枯梢
花束に男の髭が酔うている　利通
花束を上げるチャンスがまだ来ない　和子
母の日の花束受けて雲に乗る　高子
花束にされてやさしいバラの棘　裕美

佳

花束に心震えたことがある　正坊
花束を抱くと許してしまいそう　南奉
百万本のバラで愛してくれますか(新)　正子
いつか花束にする気の花一輪　緑良
花束に目かくしがある小さい罪　たつみ

人

花束を抱くと素直になってくる　きみ子

地

花束を貰ってからの白い闇　砥代

天

野の花を束ねわたしの胸に挿す　みつ子

軸

花束に打ち明け話して眠る

引く

神谷凡九郎選

気を引いて背なを反した池の鯉　信義
引力の差で衛星になってます　可住
一線を引いて黒いもの黒く見え　典子
兵を引くそんな時代となる米ソ　浪速子
引き継いだ方はくどくど聞きたがる　保州
大吉を引くと調子が狂い出す　比呂志
自由のほしい鎖をひっぱられ　雀踊子
面目が立てば無傷のうちに引き　佳雲
夫婦にも吸引力があるはずだ　次男
腫れ少し引いて箸とる海苔茶漬け　白光子
風船と決まっていてもくじを引く　妻子
値引きする店にゴキブリ見当らぬ　一花
お浄土の妻と綱引きして勝った　喜与志
設計図ここは引戸に母の部屋　静子
人情に引かれて裏道浄土かな　博友
幕を引く日の引き際の辞書を繰る　高夫
引き潮に情無用と書いておく　富恵
線引いて年金で喰えと言う事か　章久
引き際のきれいな議員もいてほしい　哲静
身を引いた愛は知らない鯨幕　四郎
もつれ糸引けば引くほどからみ合う　元江
頼られて男引算考えぬ　喬水
おみくじを引くあらほんとどうしよう　恵美
引っ込めた言葉が喉に引っかかる　寿美
線なんか引くから戦なくならぬ　度
引力が時々狂う星が降る　美代子
微笑みの奥に一線引いている　豊
引算をすればあわれな健康度　ただし
母の気を引くいたずらを坊や知り　有一朗
綱引きがきらいですぐに手を離す　しげお
掛金を通帳で引かれて惜しくない　正好
赤い線引く先生は大きらい　三和
気を引いてみる度変った返事する　規不風
手を引いて歩ける老母まだ居ます　艶子
男には引くに引けない時がある　諷云児
引き金を引くと飛びだす水鉄砲　螢

こだわりは持たず一線だけは引く　理瑛

佳

好きだから身を引く恋に甘んじる　文平
クレヨンで引いた線路に孫の家　好花
引っ込み思案そんな男に騙された　きみ子
給料明細引き算ばかりありがとう　はるお
引く時は花満開の日にしよう　南奉

人

気を引いてみたい女の横ぐるま　正坊

地

口紅を引く女愁い払うかに　文子

天

引退が六方踏んで消えてゆき　どんたく

軸

引き際の御自分御覧になりまして

平成元年度　一　路　賞

秀句

山ほどを語り尽して夫婦かな　　牛尾　緑良

評　一路集は、課題吟とは思われぬ個性豊かな句ぞろいであることを、今回の選考で認識を新たにしました。緑良さんは注目の一人で、その老練さ、その枯淡の冴えに胸を打たれていました。（**月原　宵明**）

山ほどを語るという大袈裟な表現にひかれました。夫婦とはそんなもの。気どらず遠慮せず話せるのが夫婦。夜どおし語り明かしてもネタは尽きぬことでしょう。円満な夫婦像が眼に浮かびます。（**松川　杜的**）

深み行く秋風のように何とも心に滲み入る句です。夫婦という一番小さな一対の中にスケールの大きさを感じます。語り尽され、詠み尽された夫婦、そしてまだ語り尽されず、詠み尽されぬ夫婦を見ています。（**遠山　可住**）

佳句（七句）

売られ行く牛は一度も振り向かぬ　　小西　雄々

デッサンのまま少年の恋終わる　　青江　鉄治

切れそうで切れぬ夫婦の謎がある　　有働　芳仙

夕映えが一枚の絵を描いた窓　　高田　博子

近道を知らない夫の軍手干す　　吉川　寿美

割り切ればほんに気楽な座りだこ　　吉川　寿美

紙ビナの背なへ命も入れて折る　　東浦　砥代

牛尾緑良

第一回「一路賞」受賞、ありがとうございました。あぶなっかしい足元を支えてもらったような気がします。夫婦、その不思議な縁を見つめ、謳いつづけたいと思います。よろしくお願いします。

柳歴

昭和五十一年一月　川柳との出合い

昭和五十二年五月　川柳わかやま初出席

昭和五十四年五月　川柳塔社同人

秀句

吉岡美房

菊活けて心変りを追いかけず

評　毎月十選、年間百二十選の中から本年度の各地柳壇賞にこの句が輝いた。

花を活けるのは、心を活けるとも言われ、人間修養に通じるとか。裏切られた心の痛みが、菊を活けているうちにだんだん鎮まってゆくのがベテランの筆に乗って見事に表現されている。この句、梅・竹・蘭とともに、その高潔な美しさで四君子の一とされる菊を冒頭に据えたことで、より一層引き締まった。

（玉置　重人）

佳句（十一句）

叩かれた数だけ恩を受けている　堀端　三男

灯を消した窓を覗いた春の月　石橋　義一

訥弁な人だと印象に残り　小出　智子

ころがった土地でゆったり根をおろす　中西　洋子

切り札が拳の中で汗をかく　吉川　寿美

義理一つ果たして白い足袋を干す　田渕　定人

ありのまま話しゆっくり風呂に入る　村上　静子

千羽目に近い鶴ほど頼られる　小西　雄々

枯れるのが怖くて走り続けている　河瀬　芳子

冬の陽の弱くて解けぬわだかまり　高田　治子

善人の面は重いなと思う　崎山　美子

吉岡美房

およそ賞というものとは全く縁がないものと思っていましたので、驚きました。運がよかったのだとは思いますが、これを機会に、今までのマンネリから脱出するよう、新しい気持で勉強して行きたいと思っております。

柳歴

昭和三十七年　富柳会入会
昭和三十九年　不朽洞会会員
昭和四十年　川柳塔社同人
昭和五十五年　川柳藤井寺入会

花地初墳

1人1句、1か月分、30句以内。各句会ごとに秀句を精選してご投稿ください。
毎月**23日**締切。　担当・玉置重人

サークル檸檬　大澤三四子報

のびのびの返事爪が延びている　今日子
ひたすらに縮む時待つ伸びたゴム　三四子
嬉々として花びら餅の暖かさ　智恵子
山の家赤い夕日が美しい　千代女
あつあつの蛸やきうれし寒の入り　美子
凧あげに糸からまして舞いおちる　登美子
伸びたがる大樹の蔭の二世達　雅子
時々は茜射す日が欲しいもの　美緒
足元がお留守になっていた背伸び　泰子

川柳化粧櫓　植村客遊子報

相槌を打って合わせて聞き上手　岳詩
落ち込んで孫の笑顔に救われる　輝月
名物の老舗格子の内で売り　大鷹
姑に花持たせて丸い家の中　サワ子
縄のれん景気のほどは高が知れ　礎石
暴走族若さはじける夜の道　葉香
夢醒めて未だ続いてる犬の声　奮水
ラッシュアワー揺れる電車を好む奴　秋信
釣書へ心は揺れるもう三十　三青
一年の計が三日で揺れはじめ　悲子
皆地味で和服着る気にならないネ　美代
ナツメロへ過ぎた青春よみがえり　朱玉
蛤宮由来聞き入り二度拝む　茂章
ダイエットやり甲斐のない冬ごもり　嘉
ケーキ出て泣く子笑えりクリスマス　姫女
顔見知り話せば他人でない二人　好花
幼な孫抱いて吾家の初笑い　はる子
名人会八十路の三味に鐘連打　遊峰
独楽に凧昔の風情老い偲ぶ　永楽
ひら同士うまが合うてるコップ酒　客遊子

川柳クラブわたの花　片上　英一報

十二月予約の旅があと一つ　シマ子
大晦日物足り物満ち心餓え　友甫
晦日そば旅の思い出味に聞き　楽天
お手伝い出来た孫賞め晦日そば　トシエ
孫の絵馬神に身近な上にさげ　道子
のらくろよ二度と行くまい軍隊へ　隆章
初せりの河豚に縁なき台所　龍襄
老いの坂今年は馬で越えようか　久美子
よい話だけが聞こえる馬の耳　信江
狛犬の阿吽呼吸でゆくつもり　弘直
凧ひとつ空にかかった寝正月　信一
正月を空から見下ろす奴凧　春子
とそ機嫌総出演の電話口　その
正月を猫も知ってる毛づくろい　幸枝
書き初めに求人募集と書く社長　君江
えびす顔孫を左右に祝い酒　千鶴子
三世代てんやわんやのお正月　市子
みな無事か友の賀状の数も減り　みき子
ごぎょうから言うと七草つづかない　能子
美し国の男と生まれ雪見酒　英一
雪山にまたも悲しいニュース聞く　初子
雪女泣いてるように粉雪舞う　一雄
野仏の雪を払って話しかけ　一風
めでる人難儀する人今朝の雪　泰成
雪もよいふぐが食べたくなってくる　鬼遊

東大阪川柳会　森下　愛論報

戎橋人をかまわぬ尖り肩　隆
本当の味方は負けた時に知る　覚然坊
落選の日から味方は来なくなり　慶三
落ち込んだ僕にも甘い親がいる　真柳
老妻の甘えに負けたパスポート　雅士
日本という金持ちが甘い顔　章久
甘い点つけてあしたに期待する　孤舟
橋渡る重たい足のUターン　柳宏子
健脚にも嫌われている歩道橋　文秋
ここからがふるさとになる丸木橋　晋吾
梵鐘を聞き神妙に手を合わす　猪太郎
開発のなみに橋の名一つ消え　頂留子
ぎこちない手話でも心つなぐ橋　美子
木の橋に人の情けと温もりが　眉水
勢揃いから討ち入りのハイライト　しんじ
花の章雪の章なる男の忌　湖風
元禄の歴史忠臣蔵飾る　喜風
勘平の役金で買う村芝居　恒明
忠臣蔵大志捨てなと子に諭し　愛論

南海川柳会　飯田　悦郎報

納得のいかぬ怒りを秘めている　真柳
怒るよな余裕わてにはありまへん　凡九郎
直ぐ怒る奴だが働き者である　覚然坊
酸いも甘いも賞めて怒りに堪えている　志華子
怒らない約束をして喋らせる　庸佑
寒波でもぼくの心は暖かい　滝小
突然の不幸親子に来た寒波　悦郎
寒波の中で滝に打たれる願いごと　凡子
堂抜ける寒波読経も声高に　度
帰省して雑魚寝の部屋にあるぬくみ　勝美
帰省する肩書派手に迎えられ　柳宏子
ふる里へ台風持ってきた帰省　重人
亡父の忌に帰省不孝を詫びておく　憲太郎
世話かけて親孝行をする帰省　射月芳
母と娘のうれしい会話お汁粉屋　真砂
大正のロマン汁粉と桃割れと　甘平
里帰り母の作った汁粉待つ　信博
しる粉屋をひょいと曲った法善寺　天笑
正月の膳に汁粉もつく山の宿　しづ子
やけ酒のつもり汁粉になだめられ　柳伸
汁粉では大きなホラが吹けなんだ　恒明
戎さんスリもごりやくねらってる　花仔
年一度飴におたやん顔を出す　文
戎さん頼みまっせと小商い　弘子
福笹に欲が重たくぶら下る　とみを
福笹に今年の運をかけてみる　月子

高槻川柳サークル卯の花　辻　白渓子報

唯一の資産は丈夫な身体だけ　京童
大臣は資産過小に言いたがり　よ志子
資産など持たぬが孫がいてくれる　美智子
親からの資産を守る雑居ビル　和友
初土俵祝儀は里へ送ります　小鹿
祝儀袋いつも持ってる苦労人　正坊
ブライドに祝儀袋が追いかける　静江
御祝儀の振る舞い酒だから酔える　(松)芳子
ご祝儀を当てにお世辞の二つ三つ　柳影
新調の仕立て何だか落ち着かず　遊美
御祝儀をはずむ男の下心　英子
しつけ糸を抜くとはたちが匂いだす　作二郎
ママゴトの様に七草ひとり膳　栄
鍋料理つついて浚ぐ寒土用　花代子
フルムーン喧嘩ばかりをして帰る　紫香
店じまいその手に乗って走ってる　節子
花買って母の枯野を花野にする　恵美子
美しく拗ねるおんなになりました　礫
御祝儀に見合う位は食べてくる　佐代子
貯金箱硬貨の方を嬉しがり　〆女
御祝儀の半分ほどは義理でする　勝一
どこをどう帰ってきたか知らん酒　颯云児
原発銀座きれいな道がついていた　(河)芳子
古希過ぎて自嘲しきりのお正月　萬的
腹立てて帰っていったジャンプ傘　しげお
一月の恋にさざんか狂い咲く　鬼遊
億のつく土地とはしらぬキリン草　杜的
祝儀祝の一つが春を待っている　スミ子
叱られに行くのに新調の靴おろす　求芽
味噌汁を炊いて黙って許しとく　白渓子

川柳高知　川竹　松風報

伝言を忘れて風に立たされる　佳風
さようなら伝言板に別れ告げ　一求
伝言板時も所も例の場所　功
伝言板同じ思いが書いてある　千恵子
先に行くと伝言板に裏切られ　朱坊
伝言板横目で通る冬の風　恒子
伝言板脱線をしてまいもどり　節子
伝言が海峡越えてやってくる　菊野
一年がたって安否を問う賀状　春枝
孫に会う母の出掛けの荷が太り　竹萌
逃げ道に一番近い席を選る　和広
カスミ草脇役でよし抱かれてる　春童
代償は問わない母の背の丸み　有佳
昂りを赤信号になだめられ　松風

佳句地10選（前月号から）

井上柳五郎選

藁屋根の温さ故郷という安堵　故紅月
どんぐりが頭ひとつを競い合い　庸佑
石をはね小さな幸が庭に咲く　朗子
明日の夢乗せると消えるシャボン玉　可住
自分に嘘ついて自分に負けている　楓楽
罰が当たると大正っ子は信じてる　年代
二度の職もう人生の山は越え　飛鳥
事なかれ主義で前例ばかり言う　重人
ひとりでもおはようおやすみ言うて寝る　房子
生き残る道をひたすら走るだけ　螢

いずも川柳会　吉岡きみえ報

母の顔母のぬくみの寒卵　河南きよし
顔のきく者から選ぶ陳情団　きみえ
街角で顔のない絵を描いている　桜水文子
この顔の歴史は誰も代えられぬ　幸一ちかし
もう一つの顔にだまされないように　寿美子
役者でも顔は見せない馬の脚　昭二
もう母の顔になってる妊婦服　茂美
灯り消してから私の顔になる　律子
職人の技は畳をトンと入れ　まこと
四畳半希望でっかく新夫婦　みよ女
旅先のホテルで恋し畳部屋　由紀子
青畳ローンを背負う新居建つ　秀子
喇叭吹く役もしんどい母の朝　桂子
どの音が欠けてもならぬ朝の音　和子
灯明に朝の祈りが深くなる　美ね子
朝市に石見訛りが活気呼ぶ　弁治郎
終章に抱かれるならこんな朝　久栄
日々の朝に私は裁かれる　好美
元朝の柏手神の音で鳴り　佐吉
軸かけて旧師を偲ぶ筆のあと　正朗
悪筆でご無沙汰ばかりしています。　章峰
書き初めの筆の先から春がくる　れいじ
反抗か筆の穂先が揃わない　明朗
感激をするとどくる癖がでる　久代
畳一畳男でっかい夢をみる　叮紅
半分のバナナ感激して食った日よ　代仕男
へそくりの畳の下は忘れ勝ち　
母はもういない婚家の朝だった　
筆太に平成二年の初春を描く　

不美人の胸に菩薩の顔かたち

川柳堺　宮本かりん報

しつけ糸解く日を待っている晴れ着　満洲泰子
私色の花咲かせます刺繍糸　凡九郎
眼に見えぬ糸やて今更何言うの　柳宏子
墨糸をピンと弾いている自信　紀美女
親と子の持つ凧糸はぴんと張り　冨志子
神様が結んだ糸と信じたい　武助
糸屑が何時も付いてた母のひざ　月子
下宿する息子へ持たす糸と針　東雲
縁こないどこかもつれた紅い糸　智子
花の芽がふくらむようなある期待　信博
四人目は是非に女という期待　薫風
期待してくれていたらし叱られる　狸村
ぽっくりと期待どおりに死ねません　天笑
下馬評は僕をだいぶん買いかぶり　千代美
歯を抜いてしばらく吠えぬ犬になる　諷云児
繃帯で隠せぬ痛み抱いている　たつお
陣痛を知らぬ男が何を言う　千万子
花手折る花の痛みを感じつつ　二南
治るなら痛くてもよい注射針　一二三
一番あとに来る幸せの汽車を待つ　凡子
一代で築き二代でもう潰れ　あか里
もう一度チャンス下さいお月さま　庸佑
二位につけ虎視眈々と狙う首位　星子
道祖神石の肌から出る温み　元紀
誕生石に妻の微笑の跡がある　金三郎
善も悪も拒まぬ坂の石地蔵　豊子
夕映えに石鏡なりツインビル　頂留子
石けりをする子見かけぬ寒い街　

倉吉川柳会　渡辺菩句報

不始末を寝言の中で責められる　喜美子
ねぎらいのその一言が彼を変え　和枝
炎の色の口紅塗って語らむか　京子
箱が金色で効能読みとれぬ　柳風
虹色に明日の地図を塗りかえる　小鹿
転んでもわが人生の色を塗る　ひろし
能書きのない春風に癒される　康志
寝言でもいいから好きと言われたい　千代子
どの色に塗ろう私の未完の絵　秋女
ベルリンの壁は寝言でこわされた　満春
真実が寝言になって顔を出す　秋人
能書きは恋の病に触れてない　荒介
言い分はあろう椿の八分咲き　瑞枝
能書きはよいが値段が高すぎる　とめ子
金婚式夫婦の壁を塗り直す　天雀
うどん粉に効能書きをつけて売る　はるお
八分目の読みで選挙に勝つという　螢
愛情も八分目位丁度よい　
保護色に塗っても甘くない世間　康子
寝言には腹に隠したものが出る　雄々
実力は能書きほどの腕はなし　次男
八分目生きて紙ふうせんになる　ゆり子
寝言だな際どいことを言っている　石花菜
恥を塗る筆は誰でも持ちやすい　洋
政治屋の寝言にはもうだまされぬ　独歩
　　菩句

岸和田川柳会　植山武助報

アトリエの隅素うどんの鉢がある　萬的
アトリエの主は無口で人嫌い　ひで

アトリエで亡父の温みの筆にあう　冨志子
アトリエは春で女神をかいている　月子
アトリエに母は未完の絵となりぬ　荒介
いつまでも甘えてほしい子守歌　操漕
論された母の言葉で子を諭す　さよ子
親思いの子供にうれしく叱られる　雀踊子
写経の筆執って仏の子に還る　甘平
子どもには時々王手かけておく　天笑
操立てて返すボールは一つだけ　一弥
節操を守り長屋に住んでいる　射月芳
モナリザの操は仏だけが知る　瑞枝
節操の薩摩の亡母の紡ぎ唄　喜久子
ウインドーに漫画みたいな貞操帯　勝晴
観光のビザで切り売りする操　白光子
メルヘンの橋には流れまたぐ詩　すみえ
石橋を叩くと嫌な顔をされ　岳人
紀子さんの乗る馬車がゆく虹の橋　鬼遊
橋出来てそれから島の不眠症　通彦
国境の橋で悲劇を聞き飽きる　柳宏子
高い柿の朱へと亡き師の忌がめぐる　浪速子
高いビル太閤さんが怒らはる　金太
政治家の操を正すラッパ吹く　狸村
そのワナへ計算高い人が落ち　頂留子
値切られる分だけ高く書いておく　一二三
御高説などと歯の浮くことを言う　ダン吉
高すぎる望みは持たぬ土生姜　正坊
高い望みはもう捨てました水中花　武助
消費税より恐ろしい物価高　左久良
柊の高さに慈母の西がある　元紀
高い絵が売れて何かが狂いだす　たつお

大原川柳社　小林　妻子報

会えそうな予感お化粧念入りに　みづえ
新しい年へ身ぐるみ脱いで行く　玉恵
花鋏花の命を切る宿命　辰子
もう二度と逢えぬと思う日の予感　宮子
初春の陽の余りを受ける兎小屋　朝代
初春へ夫婦の夢を入れかえる　悦子
善人の顔で並んで初詣で　たけよ
余りもの食べて母さんよく太り　巴子
口だけが動いて進まぬ老いの貨車　正己
何歳になっても惜しい老母の今日　美代子
晩酌の仮眠の老父の見てる夢　幸子
土壇場を母の予感で切り抜ける　敏子
新春のよろこびを舞う牡丹雪　睦子
余り物勿体ないと胃へしまい　こふゆ
初春へ幸せ余る夫婦箸　みさえ
仮の世をつづる命の詩ごよみ　寿恵子
計報きく命のもろさ身に沁みる　正子
太くふとく命綱よる二人して　あすなろ
茶柱が一層うれしくする予感　辰江
年の功父の予感を信じ切る　智泉
嫁がせてぽつぽつ泣きに来る予感　妻子

三幸川柳教室　桜井　千秀報

垢抜けて娘だんだん遠くなる　(上)幸子
永年の垢が溜まって生む汚職　一郎
黒帯に手垢と汗がある誇り　孝子
運命線へ垢したたかにこびりつき　結実
色褪せて手垢の光る文化財　芙美子
水垢の青さ私の罪のいろ　靖子

小ざっぱり垢を落とした冬木立　茜
踊り場にコント生れる雑居ビル　朱夏
タラップを降りてわが家を恋う旅路　みね
階段を登りきれずに黄昏る　純子
階段を上る勇気のない蛙　当代
階段があるから五分早く出る　(中)幸子
慢心の足が階段踏みはずし　鉄治
石段を長いと思うかたつむり　桂香
親から子無償の愛は繰り返す　玉枝
逢えるまで花占いを繰り返す　保州
繰り返す度に歯車ずれてゆく　三千子
繰り返すピアノに耐えている隣　千秀
繰り返す歴史の中に目刺し焼く　晏
白寿まで生き長らえて手がかかり　(福)美子
過疎になど負けぬ笑顔の長寿村　和子
お日柄もよく寿の使者を待ち　高夫
米寿まで生きるつもりの万歩計　(前)美子
寿命のびさて生き方を変えてみる　(松)幸子
寿命とはいうが生きてほしかった　利子
米寿まで生きる気はない煙草吸う　智水庵

佐川川柳　赤川　菊野報

娘にかかる電話へ父の目が座る　節子
倒産の噂の中にいる社員　佳風
美人だと言われ鏡へ紅をさし　恒子
美人画へ母の昔をだぶらせる　千恵子
にじみ出る心美人が僕は好き　健二
あれからは一円玉が落ちてない　菊野

おっぱこ川柳会　杉村迷観子報

鯨尺明治は遠くなりました　ひかり

百歳の遠い旅路の祝賀会　マサエ
夢を見た遠い昔が懐かしい　迷　貫
嫁が来て息子は近くて遠くなり　伽名子
近よると嫌だと鏡しわをよせ　スミエ
近くに居るだけで温もり分る人　よしみ
遠ざかる背中へ感謝頭下げ　白柳子
縁遠い娘を持つ親に気を遣い　明　人
遠方の順に荷造り帰省客　かおり
遠目にもそれとわかった好きな人　迷　香
近況のことがら添えて出す賀状　放　任
遠縁の人から嫁を薦められ　チカエ
同窓会遠い昔が甦る　いさむ
近寄ってみてもわからぬピカソの絵　吟　笑
近すぎて本当の彩を見失う　迷観子

城北川柳会　神夏磯典子報

うす化粧してみる気になるお正月　敏　子
雪降れば孫が喜ぶ雪だるま　輝　子
初場所で外人横綱期待され　午　郎
方言の孫の年詞で年明ける　きみ子
初ものが年中出回る味気無さ　秀　夫
干柿のすだれなつかし大和路に　寿美礼
言葉だけ飾って芯は冷えた人　ふ　み
財産にも触れて米寿を祝われる　典　子
酔ったふりしてほめてやる妻の酌　市　郎
着飾った今日一日の標準語　白　峰
ヘボ唄もめでたい席を盛り上げる　温　子
めでたさを引き出すピエロ買って出る　ただし
法善寺初春の女の水が飛ぶ　達　子
床の間に餅飾り終え除夜の鐘　久留美
独身の会めでたく一人抜け　テルミ
寒椿最後を飾る紅の彩　純　子
なお飾る女の文字のつく限り　静　子
めでたさもほどほどとなり古希の春　新一郎
初春へ少し濃い目の紅をひく　登美子
初春へ一歩踏み出す万歩計　文　子
ワープロの賀状平成の声しきり　静　歩
献血をして還暦を祝いけり　昭　子
振り向けば六十路は夢の走馬燈　きくゑ
絵に書いた餅で終ったマイホーム　公　一
人形の菊は気儘に伸びられず　千　葉
サンタパパ煙突忘れはしご酒　ふさ子
稀少価値の頃の数の子旨かった　倫　子
羽子板の不満床の間に飾られて　満津子
里方の自慢を配る草の餅　史　風
合掌の背にあたたかく初日射す　右　近

川柳塔わかやま　牛尾　緑良報

にっこりの数だけ余生丸くなり　正　博
日曜も主婦には描けぬスケジュール　アサ
苦手からにげたら苦手つきまとう　繁　子
逢いにゆく微笑鏡にたしかめる　白光子
にっこりに酔うた財布がかるくなる　信　秋
喧嘩したあともにっこり送り出す　保　州
ライバルがにっこりしたぞ何かある　英　子
にっこりと思い出辿る古希の城　春　子
にっこりの顔を鏡が輝かす　武　雄
忠告をくれたにっこり胃につかえ　輝　子
春風ににっこり梅の香を聞こう　桂　香
何時にない妻にっこりと恐ろしい　紀久子
日曜はしっかり主婦をしています　佳　明
洗い魔にパジャマとられる日曜日　愿
日曜は赤いシャツ着てホイサッサ　忠
子煩悩せめて日曜子と馳ける　豊　太
日曜をアクセクと鳴る古時計　結　実
隠れみのそっと干してる日曜日　裕　美
大切にしたいわたしの日曜日　克　子
お互いの苦手意識で掘った溝　鉄　治
苦手だが恥かきながら歩む道　登志代
苦手などないが奥さんだけ怖い　柳宏子
もっともな意見苦手な膝小僧　高　夫
坂道は苦手一病持って生き　武　治
苦手だが妻に見まねの粥を炊く　綾　子
標準語が苦手だまっている辛さ　三千代
ロボットを苦手にしては勤まらぬ　忠　雄
ライバルへ苦手意識をもつ弱味　瑞　穂
翔ぶことは苦手でちびた靴愛す　寿　子
苦手でも作り笑顔で世を渡る　和　子

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

後押しの妻の気合で今日を生く　ち　よ
満潮と引潮がある世の慣い　紀　一
万歩計に急き立てられてシューズ履く　治　幸
夫赴任人目にみゆる母子家庭　喜久亭
引き汐にわか芽採る人見てる人　ふさ子
しくじりに妻を叱った後の寂　義　美
重たくはないかと思うネックレス　虹　汀
初孫を抱いて町内ひと巡り　高　明
嫁姑違う仕方の料理法　旭　恒
一番で合格父をあわてさせ　四　郎
さめた世の真のぬくみ探しゆく　ハ　ル
花まつり山門くぐる老い二人　朴　竜
童謡の倉が恋しい黄金虫　正　敏

岩美川柳会　羽津川公乃報

銀狐オバタリアンの首で哭く　芳江
もう無理のきかぬ翼で風を選る　美恵子
待ちわびて伸びたうどんに失意抱く　民子
ライバルが隣の席でよく笑う　美代子
ぼけ防止鼻翼ひろげて深呼吸　さなへ
マフラーの謀反首筋冷えてきた　公乃
巣立ちする翼に過保護ぶらさがる　忠良
マフラーの趣味で人柄評価され　単車
寒い日に死なないように気を使う　大漁
焼きうどんふたぁつ熱い仲になる　螢
右翼でも左翼でもよし平和欲し　由多香

八尾市民川柳会　飯田悦郎報

月ひかり冴えて伽藍の鬼瓦　弘直
鬼ごっこする子見かけぬ寒い街　頂留子
鬼の顔にも仏の顔にもするお金　恒明
つきあえば結構優しい鬼もいる　度
鬼の面脱げばやさしい妻である　春堂
さいの目のみそ汁朝が動きだす　重人
生ぐさいこと考えている胡麻豆腐　英一
豆腐屋のラッパ大正から消えず　甘平
書き初めの墨の香りの冬座敷　春子
仲人は先ず掛軸の雪をほめ　一風
置きごたつ夜は怠惰な冬座敷　しづ子
一月の決着すまぬ冬座敷　柳伸
藁ぶきにおかき並べた冬座敷　正好
湯けむりと蟹がお待ちの冬座敷　隆
建て増して母を迎える冬座敷　章
雪見酒みんな詩人になって酔う　浩一郎
雪山の祈り母は忘れぬ遭難記　喜風
イミテーション本物に見せお人柄　しんじ
淡雪へ熱い思いをつのらせる　冬葉
トラックで姉妹校から届く雪　柳宏子
左遷地の雪の深さに馴らされる　とみを
他所に住む子の事しきり雪の窓　シマ子
母きとく雪よ悪夢を消してくれ　朝子
言い訳が昨日と違う雪だるま　悦郎
安い鰯の哲学聞いているお膳　泰
仲人の安請け合いが気にかかる　和子
年金の安さをなげく老い二人　美津留
安くても鮟鱇の肝とろけたり　一志
値と別に心安さで客がつき　雅士
生涯の安い買い物妻眠る　美幸

川柳泉尾　吉川寿美報

逢うてから今日のシナリオ考える　文子
二百キロクレーンのフックまるで指　功子
酒カスの酔いに午後を出そびれる　きよ子
後列で急きも慌てもせぬ蹄　満洲子
罪の行方を足袋のこはぜに握られる　美子
望む事よくばりすぎる初詣　美南子
花咲かす望みは捨てぬ泥の蓮　シメ子
夫婦足袋一味二味噛みしめる　靖子
我儘は出来ぬ職場の八時間　シマ子
ねんねこは夢と希望の玉手箱　和子
ねんねこの中で王様夢を見る　美代子
ねんねこで子供を育て夢育て　三千代
ねんねこの一家に北風しっぽ巻く　美津子
子よ母はいつでも君の応援団　はつ子
時折りは電話下さい亡き母よ　敏
三男三女育てた母が過疎に住み　白水
十億の母のひとり我も母　淑子
夜半迄話がはずむ母と居て　良子
友達がいっぱいきっと母ゆずり　伴子
母の歌雪と木枯らし淋しさと　義一
母さんと夫が呼んで共白髪　敦子
老母抱いて姥捨山へ道迷う　弘子
静かだが太陽に似た母である　(寺)文子
子を叱る口ぶりまでも母に似て　みつ子
赤ちゃんは母のお腹が小宇宙　途子
かぐや姫に出逢わなかった宇宙服　トミ子
しこしこ生きて宇宙の塵になる　マリ子
ふところの広さ宇宙を包むほど　昭子
この広い宇宙に生きて胸を張る　あさこ
手鏡の中は女の小宇宙　寿美

南大阪川柳会　中川滋雀報

損益はないとんとんの朗らかさ　柳伸
赤ひげの頭に利益などはない　度
益のないことばかりしておもしろい　重人
有益な話はなんと眠いもの　恒明
利益にもならぬ仕事をせかされる　覚然坊
計りごとひそかに爪を研ぐ野心　寿美
一年の計より今日の計たたず　柳宏子
計りごとそっと洩らしたのが不覚　庸佑
計算の早い女が蹴躓く　冬葉
指尺で計りはぎれの好きな母　久子
計算をしながら食べる味気なさ　勝美
計画はその日暮しのマイペース　文江
計算は合って金庫にゼニがない　新造
美しく咲かせる花に温度計　シマ子

沈む陽へ明日の誓いを載せておく　楓　楽
余生とはなんにも誓うものがない　智　子
誓うような事には未だ逢えまへん　凡九郎
今年こそ見限りを誓う三浪目　憲太郎
あだし野の仏に雪は点に降る　作二郎
百点満点の妻と思ったのは昔　文　秋
点滴のリズムに預けてある命　雀踊子
点とり虫の努力脱帽してしまう　奏　月
満点の嫁では同居遠慮する　トミ子
欠点を妻がしっかり握ってる　シメ子
根つめて編んで着せたい人がある　信　治
いつか根を下ろし他国の月を見る　滋　雀
舌の根の乾く間もなくウソが出る　章　久
根はいいが口の悪いが玉にキズ　公　一
根にもないうわさ真っ赤な色で咲き　頂留子
一人の城を根掘り葉掘りききたがり　千　楢

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

滑り止めすべって志望校うかり　石　舟
得意げに滑って見せる孫二人　堯
板前の腕は確かな水滑る　求　芽
滑り込みセーフで絵馬に感謝する　歌　子
トロ箱をすべらし朝の魚市場　萬　的
我慢してモグラ叩きに堪えている　紫　香
もう限度トイレへ急ぐバスツアー　(松)芳　子
許される迄は冬眠しています　柳　影
子らの顔浮んで辞表裂いている　はつ絵
窓際でじっと我慢の晒し首　諷云児
にくしみも一巡すればかわる愛　文　夫
灰皿がどうどう巡り疲れます　栄
島巡り遊ぶところで住めやせぬ　保　蔵
巡拝の一歩に心の翳洗う　武庫坊
遍路笠雪も巡って来たようだ　作二郎
四季巡るひとつの出会いあたためて　美智子
大寒をあなどっていた玉子酒　いわゑ
縁起良い話が欲しいかたつむり　敬
消えてゆく南座惜しむユリカモメ　(小)英　子
何思てはるんやろ車中の向い合い　凡九郎
さいはての旅愁切絵に雪が降る　〆　女
神様が見落とす絵馬もあって冬　定　人
高齢化妻は達者になるばかり　伊三郎
金柑を嬉々ともぎ取る孫二人　正　子
妻の風邪メモを頼りの市場籠　正　一
快感はぱりっとカレンダーめくる音　杜　的
ゴミの山富める悩みをさらけ出し　園　歩
年金の顔がズラリと昼のバス　みち子

尼崎尾浜川柳会　春城武庫坊報

福々しいお顔とおかめにはふれず　〆　女
連れ添うたおかめと渡る丸木橋　十四郎
お多福の笑顔忘れぬ冬の道　定　人
白い花みかん咲く頃嫁が来る　向　西
つましさを豊かにみかん盛って出す　弘　治
輸入自由化みかんに何の罪もない　保　蔵
舶来の波がゆさぶるみかん舟　いわお
山盛りのみかんこどもの客ばかり　紫　香
楽しさと悔いとが残る無駄遣い　す　み
さりげない書架の花にも無駄がない　寅之助
真夜中の電話に猫が飛んで来る　夢之助
屋根修理しろとポトポト雨が漏り　石　舟
思い出で心ぬくもる冬景色　美智子
福は内ばかりで終る鬼の豆　歌　子
ぐい呑へ注がれ九谷の朱がゆらぐ　六　浦
手を振って夫はしばしの旅に出る　義　嗣
度忘れが此の頃わたし多過ぎる　江　美
風花へ強かに生く鳥一羽　澄　子
武蔵野に丸いポストが残ってる　武庫坊

川柳ささやま社　遠山　可住報

いつも背に地獄天国いる怖さ　貞　子
荷唄聞くあとの涙はかくせない　とみ子
白い地図抱きしめ迷う女意地　靖　子
戦友会進軍ラッパの唄になる　ヒサ子
慰めの一言悔いを天に吐く　和　子
プライドが衿垢つけぬ白を着る　百合子
祝い膳傘寿の母に鯛が跳ね　テ　ル
真っ白い画布に余生の地図を入れ　きし江
山河を唄で越えます夫婦坂　冨　美
オイコラとめでたく祝う夫婦箸　エキオ
寝たきりの長寿を祝う言葉選る　金之助
冷戦をけろりと忘れ白い朝　ゆうや
祝盃を上げて初市掌が揃い　素　水
泣きながら父が唄った祝い酒　越　山
遺書一放唯真っ白なまま残り　文　平
白過ぎる不信お塩を舐めてみる　可　住

西宮北口川柳会　林　はつ絵報

ジャンケンであっさりけりがつきました　杜　的
春一番あっさり友を連れて行く　伊三郎
あっさりと別れ屈託ない若さ　英　子
男ならあっさりせよと叱言喰う　春　蘭
終電車力の抜けた顔ばかり　〆　女
実力の差を見せられた日のうずき　よし津

独りぐらし子の力添えあってこそ　香子
肩書が名刺の裏にも書いてある　保蔵
球根の力凍て土そっと割り　きよ子
握りめし午後は力のいる仕事　しげお
守護神の力がきっとある港　はつ絵
履歴書に縁なく町の小商人　光代
酒癖の悪さに履歴書ふれてない　白渓子
履歴書に関係のない紙オムツ　みつ子
老仏師履歴書にない履歴持つ　いわゑ
合鍵がしかと握っている弱味　(松)芳子
マスコミが先に握っている弱味　園歩
カタツムリ自分の弱味知っている　静子
弱味見せまいと孔雀を尾をひろげ　冨久恵
おんば日傘で育った弱味もっている　千世子
人間の弱味知ってる札の束　諷云児
例えばの話弱味にふれてくる　正坊
いぶし銀の男に弱味などはない　武庫坊
一合の酒を残して姉と酌む　暁風
夜のホーム阪急そばの良いにおい　江美
相談に乗れない母でお餅焼く　て る
ストーブリーグ胃は快調の虎ファン　石舟
春おぼろ妻白酒に酔うている　京童
悪あがきせずに老女になりました　年代
厨から妻のハミング朝の幸　柳影
瞳を入れる達磨飾って春を待つ　圭坊
義理チョコも貰うと足が軽くなる　紫香

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

いまひとつ足らぬものあり葱を摘み　かつ子
お月様顔をゆがめて耐えている　笑子
見直しが出来たら一円どちら向く　ヒデ子
脇役の葱が一番上に乗り　好栄
寒風の厳しさ気にせぬ葱の色　聖子
個性派の葱ですきつい自己主張　智恵子
やりくりの話を葱は知っていた　はるみ
深植えに耐え抜く葱の根の白さ　歳栄
打ちあける気葱の涙で言いそびれ　民子
お見合を手伝わされてる訪問着　鈴江
訪問着まわり道などしてみたい　恵美子
お子様に仕え参らす親で候　北斗
みなパート我が家の小路静かです　博利
つやつやと水栽培の葱の肌　世似
送迎つきで妻は勇んで出るパート　清泉
底辺を支え大国にしたパート　白汀

川柳藤井寺　高田美代子報

生きるより生かされている薬づけ　美佐
ハンディはあるがドッコイ生きている　たかし
生きのびて福祉の情け身にしみる　きよし
生きるとは死ねと言うなり禅坊主　祐二
生きるため男は清濁合わせ呑む　婦美枝
恥積んで生きねばならぬあかんたれ　美代子
生きていることの不思議がまだ解けぬ　美房
子の期待背負って生きる父の汗　修六
弱者には夢も希望もない政治　風来坊
分相応の夢しか見ない事にする　伴子
長寿国金のなる木の夢を見る　敦子
本当の夢は妻にも喋らない　末一
膝の子が何を夢見て笑ってる　三郎
夢を買うそれでも並ぶ寒い顔　寿美子
もどかしい身動き出来ぬ夢もある　義一
夢無限はたちの背広風を切る　信子
身に余る夢が叶うたおすそわけ　須美
姫鏡台夢のひろがるセレナーデ　政代
長い夜を異夢同床の老夫婦　和美
まだ夢が残っているから生きられる　つやこ
少年の夢は茫々海の色　一屯
温めていると孵化するだろう夢　和子
太陽の匂い背負って子が帰り　繁男
成人の清き袂に新春の風　雅美
みぞれ降るふるさと駅に母が待つ　昭子
年賀状はみ出しそうな孫の馬　志洋
立ち直るヒントがほしい曲り角　正枝
銀世界一筋川を消し忘れ　治子
戦友がまだ生きている俺もいる　与呂志
八十にして初めて妻の背を流す　吸江

京都塔の会　松川　杜的報

伸子張る祖母をビデオに撮っておく　杜的
A席は母に譲って立見する　福子
借金をするにも前歴洗われる　圭坊
来賓の式辞がくどいシャンデリア　正坊
式次第座れる椅子が硬すぎる　美智子
とび職の演技へ拍手の出初式　花代子
夕陽背に農婦は川で鍬洗う　〆女
平成へひばりの唄はまだ消えず　紫香
木簡を洗うて古代の謎にふれ　萬的
狂いたくなる日は雪で顔洗う　諷云児
筆洗う恋の終りを予感して　芳子
なまやかに華道を守る得度式　英子
Aクラス狙う女は険がある　京童
強がりを言ってくよくよ思ってる　美穂
年末の第九茶房で聴いて居る　達子

天駈けるペガサスの夢ふところに　水客
ディスイズaペンから英語とおつきあい　倫子
方程式どおりに世間は動かない　求芽
式辞だけ述べに顔売る議員さん　栄
活火山の恋にピリオド打った式　ただし
開通式もう反対は口にせず　飛鳥

川柳岩出　小倉アサ報

愛一途ふと振り返る長い橋　春子
雨風は神の戒めかも知れぬ　忠雄
吊橋を渡れば恋し亡母の郷　瑞穂
目前ですらすら魔術かけられる　和子
神ありと信じてこそ神がある　義美
すらすらと言葉巧みにひかれます　千代子
すらすらと喋りすぎては口あまり　喜市
陽は味方ここで吊橋渡ろうよ　アサ
当り年いつわりのない絵馬になり　永年
すらすらと孫の送辞に生きかえる　愛子
一歩二歩術後の足で踏み締める　精子
神の目はふし穴でない今日の鞭　昌子
石橋を叩けば亀になる峠　綾子
すらすらと話せる噂もて余し　与呂志

サークル檸檬　大澤三四子報

働く手リングのサイズ恥じらわず　光梅
節分に母には無理な豆の数　チエ子
節分の夫婦げんかに鬼笑う　英楽
原点に返る素直さブロは持ち　剛也
後ずさり好きな私の土踏まず　澄子
バイトの息子桧舞台をいつか踏む　三四子
琴の音に素直な心よみがえる　千代女

悔いひとつ素直に詫びの言えぬまま　智恵子
その時は素直でなかった文がある　今日子
いそぎ足雪踏んでゆく受験生　登美子
色白で素直が取り柄その昔　美緒
決着がついて大地を踏みしめる　雅子
北風の雄々しさが好き雪乱舞　泰子

打吹川柳会　奥谷弘朗報

養った鋭気どちらへ向けようか　とみお
責任が鋭い声にさせている　たつみ
空白の日記に鋭い妻の勘　白峰
鋭さが一寸欠けてるモンタージュ　紫映
極細のペン先で書く春だより　蛍
鋭角は大きい望み持っている　明治
鋭さがすこし気になるいい女　寿美子
一行詩　鋭く僕を突いてくる　杜的
鋭い矢尻がこちら向いている　節枝
父の一言　安易な胸につきささる　温子
消し壺に鋭い勘はいれました　きみ子
何くわぬ顔で鋭い矢を放つ　野草
感情が鋭くて胃薬持ちあるく　早苗
初心者の鋭角隙を突いてくる　典子
生け花の鋏するどく縁を切る　小鹿
一年生　平気で鋭いことを言う　高代
激動の昭和鋭い過去ばかり　妻子
馬鹿になって鋭い言葉うけ流す　寿満湖
善人のようで鋭い勘をもつ　弘朗

川柳塔とっとり　岩原喬水報

鏡餅切って男の初仕事　友夫
喉もとを過ぎずに餅が粘りつく　林太郎

飽食で餅が嫌いな子に育ち　喬水
焼き餅をやかなくなって夫婦枯れ　俊路
ほめ言葉持参で祝う席に出る　旋風
祝い酒嫁に決った孫が注ぎ　辰雄
還暦の新春を二倍にして祝う　多可志
もう少し飾ってほしい妻がいる　秀和
女です自分を飾る癖がある　艶子
着飾ってみても年輪隠せない　一枝
マドンナも飾りだけではつとまらぬ　圭二郎
野の花で家中飾り独り住む　侑里
悪友に飾る言葉は通じない　山人
着飾ってみても農婦の指が荒れ　洋々
賽銭を投げた分だけ祈ります　新風
神詣で祈る心に欲消えず　砂山花
合格を祈った絵馬が多過ぎる　呼風
欲深い祈りに神は横を向き　粗粒
ご健闘祈り候補が擦れ違う　帆雀
千羽目の鶴に祈りを深くする　由多香

川柳塔まつえ　恒松叮紅報

情報がひとり歩きをして困る　代仕男
情報の溢れる海に溺れそう　まさし
情報を片目だるまが読んでいる　多賀子
情報のるつぼで欠伸してしまい　ちかし
銭湯に情報網が置いてある　小鹿
情報が一番早い市場籠　妻子
情報から逃げても不安つきまとい　宣子
神様をのん気にさせぬ絵馬の数　雄々
逆転があるからのん気しています　日出子
二、三日のん気で過ごす姑の留守　房子
よろこんだ母へ嘘だと言い出せず　舞吉

政治家の嘘を世相が縦に切る　弘　円
病む人に今日も笑顔をみせる嘘　寿美子
倖せを求めて嘘もかくし味　長　三
女房に一番嘘をついてます　鶴　丸
にわか雪のん気に今日もさし向かい　静　江
嘘ひとつ胸の氷がまだ溶けぬ　文　子
もがり笛冬の賽銭箱に鳴る　瑞　枝
賽銭の行方を飛びあがって見る　友　子
万札の賽銭ピエロ投げていた　昭　二
湯煙りに包まれ遠慮のない欠伸　満　江
その先は軽いジョークに包んどく　たつみ
水仙の香り恋する娘を包み　清　志
無造作に包んだ寸志温かい　与根一
丁寧に包む小さな愛だから　静　恵
切り口を包んであげるかすみ草　章　峰
風呂敷に包んだ過去をすててくる　登志子
我が心包んで消した白い雪　幸　子
小走りに包んでくれる母がいる　きみえ
見栄というしがらみがある金包み　叮　紅

豊中もくせい川柳会　田中　正坊

ドブ越える覚悟近道つっぱしる　寿美子
夕焼けるシルクロードにつづく道　露　児
信号と規則ずくめの男道　博　史
女の子コロコロ笑う春の道　正　坊
我が町を裂いてしまったハイウエー　福　一
登校の道で仔猫拾ってる　(小)英　子
人情がいっぱい海女の通る道　萬　的
水仙の村灯台へ続く道　作二郎
哲学の道で追伸考える　杜　的
下町に住み馴れ移る気がしない　紫　香
移ってはきたが不便な新開地　登志実
末席へ移り人間らしくなる　よし子
目移りがするのか蝶の落ち着かず　(玉)英　子
化粧した亡母を記憶にない昔　とく子
一人寝の風邪に口紅引いてみる　登代子
化粧する老妻の仕草はまだ女　諷云児
脇役もきっちり化粧して斬られ　白渓子
渋滞を見ながら歩く乳母車　しげお
梅花祭上七軒が茶を立てる　圭　坊
片目では歩き難いと言うダルマ　明　光
六年ぶりに雪の訪れ孫は受験　明　吉
風が友だち空が友だちひとり旅　きく子
家中が耳となってる娘の電話　富　子

いさり火川柳会　尾崎三代治報

空を飛び梨もひと役ドル稼ぐ　智恵子
献上の梨とっとりの陽をふくみ　由多香
海渡る梨いとおしく選果する　孝　人
霊峰を逆さに写し池が澄み　豊　子
伝説の池は神秘な色で澄み　八重子
どんぐりとわたしは池で日が暮れる　伊都子
親と子が変なところで鉢合わせ　武　士
植物は鉢の広さに似て育つ　三代治

南海川柳会　飯田　悦郎報

尋ね人のビラが淋しくふるえてる　恒　明
帰省客みんな帰ってからの部屋　勝　美
淋しいが気楽さもあり一人住む　志華子
みな帰りどっと淋しくなってくる　月　子
大根めしいやいや食べた敗戦記　眉　水
切り干しにされて大根冬を越す　美津留
夏大根病人だけに買う高値　喜　風
大根の葉も食べさせる献立表　凡　子
大根のだしにと細切れ買う孤老　覚然坊
ぬくぬくと部屋にこもりて風に聞く　しんじ
助手席はすぐに寝ているカー暖房　しづ子
倖せな笑い暖房きいた部屋　真　砂
暖房器具日本橋はぬくい街　ダン吉
暖房の代りに熱い茶をすすめ　二　南
急用がスキー列車に乗り合わせ　正　好
駈け落ちも乗り合わせたスキーバス　天　笑
滑るより時間がかかるリフト待ち　東　雲
スキー靴恋の新雪踏みしめる　真　柳
スキー客待たせ民宿そばを打ち　作二郎
スキーツアーめぐり逢いたい女がいる　憲太郎
冬木立活力秘めて耐えている　悦　郎
売られゆく馬を見送る冬木立　柳宏子
失恋のドラマ出来そな冬木立　信　博
小走りに行けば風も泣いてる冬木立　花　仔
凍てついた空を突き刺す冬木立　柳　伸
うちの娘に縁談まだない冬木立　重　人

富　柳　会　池　森子報

ほとばりを温めて降りる終電車　維久子
死んでから貰う保険に追われてる　花　梢
ほとばりがさめて空気を深く吸う　岳　人
喧嘩してほとばりさめた夫婦膳　花　子
ほとばりのさめぬ二人へ春の風　荘　次
ほとばりをさましにちょっと外国へ　(伊)勇
ほとばりがさめてもどった無人駅　文　次
ほとばりがさめてからではもう遅い　(田)勇
陣痛へ夫呑気にパチンコ屋　智　久

保険満期なぜか周囲が騒がしい　昭水
ほとぼりを温めつづけた恋でした　美房
久しぶり日傘くるくるよく笑う　森子

駒つなぎ川柳会　里　小路報

期待した父に白髪がまた増える　悦郎
風見鶏風の行方を期待する　春蘭
期待してみても所詮は蛙の子　壮之助
ソンナ時ソウよ笑顔で居りゃ良いの　凡九郎
聞かんでも的中したという笑顔　頂留子
本当の笑顔を死ぬ時見せてやる　雀踊子
命中のよろこびコラッと叱られる　幸治
電探を避ける銀紙撒いている　東雲
どれか命中すると商社は手を拡げ　文秋
我が人生八十路でゴール見当たらず　覚然坊
ゴールまで亀の気持を忘れない　庸佑
転職を重ねゴール見失ない　射月芳
期待せぬ次男仕送り欠かさない　千代三
眼帯外して期待が少し見えて来る　萬的
誰にでもする笑顔だと知っている　冬葉
玄関へ笑顔忘れてきたラッシュ　金太
一発でしとめた手柄ぼたん鍋　憲太郎
命中はせぬが心に深い傷　隆二
命中はおろかこの矢が届かない　潔
悪妻がゴールを少しずつのばす　度
ゴール寸前鳶にあげをさらわれる　比沙胡
不躾なマイクが待っているゴール　恒明
仁王さんのあれが笑顔かもしれん　智子
鬼瓦重い期待にずり落ちる　国公
目が笑っていない一物ある笑顔　重人
窓口でもらう笑顔へ会釈する　笛生
命中は結果こころを点にする　翠公
狩猟解禁射とめた鴨にどんな罪　信治
片減りの靴ゴールまでまだ遠い　幸
ゴールインあとは何んにも覚えてず　柳宏子

翠洋会　中西兼治郎報

齢の数もうたべられぬ齢になり　兼治郎
姉妹でもひと味違う五色豆　絹子
ハトマメも遠くにかすむ同級会　宣司
くもの巣にかかった花粉症の蜂　凡子
ローンまだうさぎ小屋でも私の巣　真
はまり役謝り上手なお人好し　恭昌
豆粒のような地球がある宇宙　英一
一気飲み皿の枝豆無表情　正雄
巣を張って嫁を待ってる過疎の村　東雲
春風を待ってる机ランドセル　さと美
お人好し頭の上らぬ恐妻家　為子
風が鳴るみの虫がんばる外はない　春子
伝書鳩と同じ範囲の巣立ちかな　宏子
母になるただひたすらに巣をつくる　良江
豆ご飯寡黙な父の笑みもれる　照子
豆製品健康食にのし上がり　綾子
つき合うてみれば気のよいむっつりや　光子
営巣に苦労はしない過疎の村　登志実
順風満帆あしたの風は判らない　みつ子
宿題を放ったらかして風の子に　いつを
空っぽの巣箱に残るオルゴール　正坊
ラブレター隣の阿呆に頼まれる　鬼遊

むらくも川柳句会　藤井　明朗報

適当が出来ぬ男の堅い椅子　秀子
適当な言訳母さん見ぬいている　文子
寒い夜は少し多めの燗で待つ　一葉
便り来ぬ友の安否は気にかかり　竹乃
口ぐせの寒さも春が近うなり　はる代
年金で寒いふところぬくうなり　林蔵
すき間から内緒の話洩れてくる　千里
友なればこその苦言も有難く　福子
無二の友もつ幸せに春がくる　島子
適当なところでさっと座をはずし　常子
適当にけじめを付けて仲直り　幸夫
脱税の内緒はばれる運命もつ　久仁
寒行の水が肌刺す無我の境　保子
寒さなど子供風の子吹きとばし　八重子
美しい花博招待を受けて待つ　さくら
寒げいこ張りきる子等の息白し　寿
美しく肌でありたくパックの日　節江
改めて意識して食う寒卵　昭子
適当な酒の肴を市場籠　仲子
あの内緒大事に大事にして置こう　義良
とかく内緒は噂に乗ってくる　明朗

川柳はびきの　塩満　敏報

還暦のまだまだ欲がある鏡　絢子
飛脚かも駅伝に見る汗の道　蛙声
開発で先祖の土地がなげいてる　敦子
家計簿も三日坊主になる予感　悦子
七草に平和な春の湯気が立ち　一枝
婦人科で身軽になってやり直し　かつみ
満ち足りて女の欲の捨てきれず　ケイ子
見上ぐれば無欲になれと寒の月　一屯
休耕田黒々と生きている　胡村

重い重いと軽い赤ちゃん抱き上げる　志津江
売りに行く仔馬が顔をすり寄せる　志洋
湯煙りに朝顔浮かぶ二つ三つ　たけし
戎さん美人の餌で鯛を釣る　利武
内乱で舌噛みそうな国を知る　トミ子
人生の余白で軽い夢を見る　寿美
解散で魔法解けてるただの人　昇
老女なおゲームセットのない化粧　白水
判らない事があるから生きてける　凡九郎
無欲ですなんて真っ赤な嘘をつき　みつこ
解散をして二次会で本音だし　美津留
頭一つ抜き出てからの欲しきり　美代子
今さらに欲など無いけど歯がしみる　与呂志
軽いから沈まないとは限らない　金太
倖せは軽い返辞の妻といる　吐来
欲を持て欲を捨てよとさとされる　美津子
たこやきを囲むとはずむ悩みごと　伴子
手袋の中に不満を握りしめ　シメ子
回覧板回れば十色の噂聞く　繁男
定年に贈る三三七拍子　敏

鹿野みか月句会　土橋　螢報

旅馴れた陽は東から東から　諷人
万華鏡覗いて東がわに向く　夕峰
東天は白み漁り火消えてゆく　忠良
平和の鐘に東の空が明けてくる　はるお
東方に足向けて寝られぬわけがある　菩句
再会の握手の温み忘れまい　八重子
始めからおぼろ月夜を生きている　公弘
半信半疑母への道が始まった　孔美子
太陽を踏んずけている足の裏　みさ子
麦踏んだ足が竹踏みしています　幸枝
菊づくり始めていますボケ防止　芙美
踏まれても顔出す草になりたいね　敦子
朝日浴び今日一日がはじまった　早苗
ナプキンを使い始めてから長い　百合子
父酔うて天下国家が始まった　(新)正子
バアサンと始めに呼んだのは亭主　公乃
二枚舌もつれ始めた老い哀れ　大漁
始めまして今日から僕のおばあちゃん　和子
土分けていきいき始動するごとし　汲香
情報はいつも東を向いている　覚
舌戦が東の空で火ぶた切る　明美
句木見る壕も母校も久しぶり　きみゑ
よだれ掛け地蔵ますます雪抱かれ　武子
こだまする選挙演説すずめ逃げ　正恵
恋芽生え青い林檎が熟れてくる　くに子
浄土への転居届は書いてある　富恵
人はなぜ人を幸せするために　しげる
責められてお地蔵さんも口を割る　喜与志
砂丘踏み女神と恋の打合せ　智恵子
再びは戻らぬ青春の影を追う　三千代
踏石を猫ぴょんぴょん春ですね　きみ子
できるなら再び咲いてみたくなる　かつ乃
ペダル踏む足から春が駈けてくる　八重
ぼんやりの視野にはいつも亡夫がいる　房子
まあきれい一枝ください仏さまへ　さつき
紅椿再び咲かぬから燃える　隆風
川となる始めの水が手に落ちる　小鹿
美しい恋再びの芽を育て　螢

郡上八幡観光と川柳大会参加バスツアー

翠柳吟社創立15周年記念川柳大会への参加を兼ねた貸切り観光バスによるツアーを次の要項で行います。

日時　**7月21日**(土)～同**23日**(月)

集合　21日午前9時半　新大阪駅前広場

コース　**第1日**＝大阪―岐阜―郡上八幡(泊)
第2日＝川柳大会終了後―九頭竜湖―鳩ヶ湯温泉(泊)
第3日＝鳩ヶ湯―越前大野―永平寺―丸岡城趾―大阪

参加費　約4万5000円(40名参加を基準)(前夜祭・大会参加費およびバス・宿泊・食事など一切を含む)

申込　**4月6日**(金)までに川柳塔社事務所または別記の幹事へ。

予約金　参加費の一部として現金または郵便振替で6月中に2万円を納入してください。

川柳塔社

(幹事　紫香・正坊・諷云児)

淡路島吟行

都倉求芽

二、三日前からぐずついていた空模様は、予報どおり吟行当日（二月二十五日）の朝も降っていました。

JR弁天町駅前を定刻より約十五分ほど遅れてバスは発車、「アメノフラセノミコト」の連中を乗せて一路、深日港へ。ここで和歌山の方々と合流、十時五十五分フェリーに乗船。雨の紀淡海峡は黒い雲が低くたれこめ、淡路島はチラとも見えず。視界の悪い船では、食い気より楽しみなし。頂いた甘栗を「むきにくいネ」とか、「うまくむけたのは美味しいネ」とか、童心そのもの。洲本港に着く頃には雨も止み、さては和歌山の方々は「アメノコヤミノミコト」と感謝することしきり。

小路谷園（オロタニエン）という旅館で昼食、バスで史料館、千福寺を経て目的地の野外文学館へ。

車から降りて山手へ道をとり、やや上った所で右脇へひよいと入ると、そこはもう句碑のジャングル。あるはあるは有名無名の川柳・俳句・短歌・詩から、短文あり手紙あり日記あり、中には熟語だけ、いや一字だけのもあり、その書体もさまざま。古いのを後ろへ押しやってその前に新しいのが、また、横型の碑の上に小さいのが載っていたり、まさにひしめき合って回路式の両側に所狭しと五百近くもあるだろうか。藪をバックにふんい気も満点。

歩きながら拾った中に、ご存知、森中恵美子、田辺聖子、中村汀女、野口雨情、大内兵衛、フランキー堺、等々々。バラエティー一〇〇パーセント。そのうちにやっと路郎先生の句碑を見つけた。

酒とろりとろり大空のこころかも　路郎

そして、その背中合わせに

うき草は浮きくさなりに花が咲き　生々庵

もあった。その時、この文学館の主、仁寿堂病院長の島太郎さんが上ってこられ、お話をうかがうことができた。

「この辺りの山や土地は、先祖からのものですが、昭和三十五年に親父が亡くなって、その頃からこの道楽を始めました。自分は小説は書くが、川柳は分からない。しかし、文学を志す者なら何でもいい。石も自分で買ってくる。書は専門の石屋に彫ってもらうが、画は自分で彫る。五千円ほどで建てており、建立当日には作者と食事を共にして大いに文学を語る。病院よりも、この方がもうかります」。

最後の方は、もちろん冗談だと思うが、ざっとこういったお話だった。そしてここの他にも三か所、同じような場所があって全部で何と二千基。しかし、まだまだ余裕があるそうだから我こそはと思われる方は挑戦してみられては…。

時間的に水仙郷の方は割愛となったが、収穫の大きかったこのバスの旅。もう夜になった帰路のフェリーでは、一同、ツアー雑感に取り組んでいた。お世話してくださった皆様、ありがとうございました。

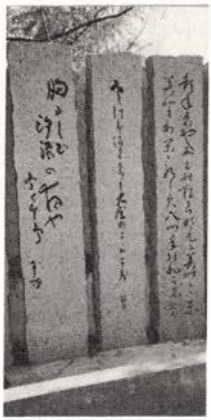
内芝登志代

深日港を出る時には小雨でしたが、洲本港に着いた時には雨も上がり、うす陽のもれる暖かい日となりました。小路谷園で美味しい淡路の味をご馳走になり、淡路文化史料館へ。玉青画伯の「牛飼い草」の素晴しい作品は、

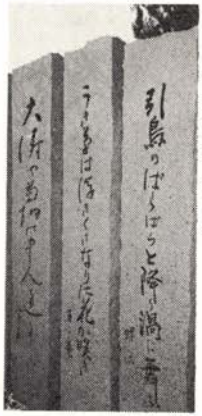
絵心の乏しい私には勿体ない想いで拝見しました。淡路人形や豪華なだんじりなどを見物し、バスは玉青山千福寺へと向いました。

玉青先生揮毫の「渦潮」の室で、住職夫人お心づくしの美味しい飴湯に心温まる想いでした。このお寺は、高野山真言宗に属し、元は玉光山千福寺でしたが、昭和五十三年から玉青先生の筆で全室に襖絵が描かれて以来、「玉青山千福寺」と改められたとのことです。ご本尊愛染明王をお祀りしている本堂の結界の中まで特別に入れていただきましたが、弘法大師伝十三図絵は見事な筆で有名とのことです。各室を拝見すると松・竹・梅やアルプスなど、一室ごとの水墨画の見事さに一同、感嘆するばかり、カメラに納める方々のお顔も真剣そのものでした。

もう少しゆっくり拝観させていただきたいと心を残し、次の文学の森へと向かいました。



路郎句碑（中央）



生々庵句碑（中央）

当日雑感　西田　柳宏子　選

浄瑠璃も聞こえてきそうな木偶人形　江　美
二ん月の土産うちわの淡路旅　民　子
千福寺襖絵めぐる足の冷え　トミ子
枯野にも春待つ花の芽吹きそめ　〆　女
とろとろとねむりを誘うバスツアー　福　一
春めいて淡路人形の眉動く　て　る
牛草に無神論など言うまいぞ　欣史子
バラバラに寄り添う様に石碑佇つ　紫　香
放牛図に心打たれて立ちどまる　雀踊子
閲兵のごと威儀正す句碑二百　薫　風
らく書き先生が石に残した心意気　萬　的
玉青の世界に浸る千福寺　寿　美
草むらの中に気取らず路郎の碑　富　子
水仙の咲く頃海は風いでくる　洋　敏
師の句碑に会う嬉しさの手を洗う　一二三
雲湧いて淡路墨絵の島となる　寿美子

無秩序な広告に飽くバスの旅　登志実
ひしめいて句碑それぞれに持つ主張　光　代
牛飼い草素朴な四季へ悟る道　登志代
雨風にもまれて島の墓は荒れ　紀美女
悪婆の木偶に心を見すかされ　芳　子
春を呼ぶ雨もまた良し淡路島　諷云児
静中動動中静の画が薫る　求　芽
一期一会温いムードのバスの中　左久良
奥深い絵筆に禅と言う悟り　雀踊子
バスツアー中の誰かが雨女　美代子
小屋は空玉ねぎの苗濃ゆくなる　はつ絵
襖絵の筆に酔うてる千福寺　稚　代
襖絵に男を見たり浪の貌　太茂津
玉青の絵にしびれてる顔の良さ　公　子
沢山の句碑に溶け込み遅刻する　栄
感動の連続でした十二絵図　克　子
襖絵に未練残して戻るバス　たつお
(佳)玉青の怒濤に肝を呑みこまれ　信　子
(佳)路郎句碑路郎の顔が見えてくる　杜　的
(佳)玉葱の風車が消えた泉州路　シマ子
(佳)孫弟子として句碑を見る淡路島　光　子
(佳)玉青の絵に酔い句碑に酔うた旅　結　実
(八)文学の森の一句が釘づける　結　実
(地)浄瑠璃の島で狸も芝居好き　頂留子
(天)句碑歌碑のどの字も読めず落葉踏む　英　子

（清記　諷云児）

本社　三月句会

三月八日（木）　午後六時
メンズファッションセンター

本社句会の改善を図る試みが早くも実を結んで、三月句会の出席者は一〇二名と、ついに百名の壁を突破し、活気あふれる句会風景となった。選者は、お雛さまの三月とあって栞主幹一人を除いて席・兼題ともずらり五人のマドンナが並び、いっそうふんい気を盛り上げた。

おはなしは河内天笑氏。幼児期にヘルニアにかかったことから、〝ハーモニカ少年〟だった話、戦後、焼跡の材木を拾い集めてバラックを建てたこと、中学生時代、三校対抗の音楽大会で「小さな喫茶店」を独唱して優勝したことなど、お得意の〝天笑漫談〟を披露した。

初出席は、米田鉱平（枚方市）丹波三千子（寝屋川市）の両氏、月間賞は前月に続いて西出楓楽さんが獲得した。（正）

（進行—岳人）（受付—千秀・朱夏）
（清記—楓楽）（記録—射月芳・月子）

出席者—笛生・千秀・紫香・朱夏・杜的・小林英子・雀踊子・萬的・武庫坊・年代・太茂津・結実・凡九郎・白渓子・諷云児・幸・三男・登志代・福本英子・悟郎・敏・満津子・典子・勝美・白峰・達子・しげお・天笑・月子・雅文・柳宏子・眉水・路子・作二郎・二南・佳秋・すすむ・狸村・光代・東雲・頂留子・保州・美房・柳影・理瑛・元江・鉱平・勝晴・悦郎・喜風・いわゑ・みつ子・重人・利武・金太・可住・栞・愛論・弥生・房子・柳太郎・英輔・正坊・規不風・文秋・憲太郎・透太・冬葉・柿木英一・シマ子・絹子・たず子・三千子・楓楽・美津留・昭子・庸佑・安藤寿美子・ダン吉・奏月・智子・元紀・英壬子・美代子・吐来・章・度・洋敏・小路・射月芳・一二三・薫風・片上英一・仙吉・トメ子・吸江・章久・寿子・遊美・寿美・岳人・柳伸

席題「一　回」　佐藤奏月選

一回でよいから浮気してみたい　保州
一回の浮気を妻に見つけられ　利武
一回はぜひ見んならん花博を　章久
鳴物のエース一回から打たれ　佳秋
一回も挫折したことない弱さ　保州
一回目でないからあがらない挙式　楓楽
一回で勝つから有頂天になり　昭子
一回分の薬こんなに多い風邪　白渓子
一回も飛行機乗ったことがない　笛生
一回きりの約束で逢う喫茶店　福本英子
リハーサルのつもり一回目の見合　楓楽
一回だけの代筆から逃げられず　トメ子
一回だけの駐車違反が引っかかり　萬的
一回も海外旅行に行かぬまま　勝美
一回のデイトは親の顔をたて　結実
一回でOKをして悔いている　いわゑ
一回で覚えと叱るおっ師匠はん　頂留子
一回の口づけ今も好きでいる　笛生
一回は妻の涙で許される　章
一回で覚えられない辞書をひく　智子
一回会うた丈だが心に残る人　たず子
一回は挨拶だけで引き下る　紫香
一回の出会いが運を変え始め　柳太郎
一回を許す勇気が要りそうだ　美代子
阿修羅像の前で一回だけ待とう　作二郎
一回で仕止めた人が今の妻　利武
一回は素直に渡る丸木橋　武庫坊
一回切りの人生なのに死に急ぐ　遊美
一回も逢うてないのに便りくれ　透太
椅子取りゲームあと一回に賭けてみる　幸
一回は妻にゆずろう春だから　柳影
一回の風に崩れてゆく女　悦郎
佳
一回は遊びの球を放ってくる　しげお
一回も胸明かさずに君は去り　光代
もう一回飛びたい足が疼きだす　元江
一回も妻を叩いたことが無い　三男
父の拳を一回受けたことがある　シマ子

人　作二郎
一回だけの縁で運河の町に棲む

地　智子
一回逢うた記憶が坂の石にある

天　規不風
うどんげの花が一回咲いた縁

軸　奏月
一回だけという約束で逢っている

席題「そろそろ」　高田 美代子 選

そろそろと波の間に間の流し雛　章
チョコレートの返しそろそろ待っている　元紀
もうそろそろおん大が出る幕で　眉水
そろそろと歩けと孫が言ってくれ　三男
古希の坂そろそろ妻と手をつなぐ　透太
先斗町の女将そろそろ二枚舌　英壬子
よくしゃべる男にそろそろ矢が向う　弥生
そろそろと渡るとこわい丸木橋　楓楽
酒癖が悪くそろそろ目が据わる　雅文
お見舞にそろそろいかな間に合わぬ　可住
そろそろと豆腐煮つまる春の宵　福本英子
もうそろそろ日にち薬と言う個室　寿美
そろそろと無心がとどくポストです　柳影
妻までがそろそろ遺書を書けと言う　保州
そろそろ辞表出せと言いたいよな皮肉　文秋
そろそろの母の杖にも春が来る　柿木英一
碁敵がそろそろ恋し陽が伸びる　佳秋
とっときの証拠そろそろ出す刑事　美房
そろそろと距離を伸ばした試歩の杖　庸佑
そろそろといらぬ節介やきにくる　ダン吉
気の弱くなる頃を待つ調べ室　雅文
母の歩にあわすリズムに融けてゆく　柳宏子
桜前線そろそろぬくい雨続く　笛生
そろそろと追えばそろそろ鳩が逃げ　萬的
梅が咲くそろそろ過去を忘れねば　奏月
泥の舟そろそろ助けくる時分　典子
そろそろと仕事おぼえてやめて行く　トメ子
馴れてきてそろそろ本音の出る時分　満津子
人間臭いそろそろ森へ帰らねば　太茂津
花博へそろそろもぐら穴を掘る　千秀
玉手箱そろそろ開けてみようかな　杜的
耳の中のうぶ毛とそろそろ話する　鉱平

佳
幸せが来そうそろそろ樹をゆする　楓楽
試歩一歩怖わごわ踏んだ深呼吸　柳宏子
神はそろそろ方舟を用意する　元紀
そろそろとやってきたのは太郎冠者　正坊
そろそろあばこうか飯の種にしよう　悦郎

人
森のはずれで蝶はそろそろ脱皮する　作二郎

地
そろそろと殺意を海に投げようか　寿子

天
冬眠もそろそろ飽きて餌を探す　月子

軸
二十五時そろそろ魂眠らせる　美代子

兼題「残る」　宮西 弥生 選

残すもの無し借りもなし身の軽さ　満津子
まだ熱の残った声で誘われる　月子
コーヒーをすこし残して待ってみる　月子
残すもの無いけど遺言書いておく　杜的
雛あられが残るポケット裏返す　作二郎
残り香が少うし画廊の裾冷える　萬的
まだ少し残る若さで罪を積む　楓楽
子どもらに残す地球を守らねば　奏月
未来図を残して繭にとじ籠る　悦郎
何かしら悔いが残る仏間の灯　雀踊子
木守柿一つ残して雪を待ち　しげお
残り時間もう喧嘩など出来ません　典子
春雨に一軒残るタコ焼き屋　太茂津
残り物で済まして夫の留守の夜　萬的
悔い少し残し真夜中風の音　柳影
沈丁花こころ残りをかき立てる　年代
中国に残るしかない孤児の顔　笛生
残された足跡がある故郷の駅　荒介
カラフルな薬が残る小抽斗　福本英子
おんなを生きて脱け殻だけは残すまい　幸
最後まで残ると種が見えてくる　洋敏
銀行は何処にしようか残る金　愛論
寺と墓残して村に進む過疎　千秀
残り火に少し油を注ごうか　片上英一
ゲレンデの名残りを惜しむ雪うさぎ　憲太郎
母の掌の温みが残る紙人形　諷云児
哀しいね茶碗に飯が残ってる　小鹿

寒の戻りの塔が仔鹿の目に残る　作二郎
座を蹴って残した言葉重く舞う　光代
ほとぼりが醒めても残る風の音　岳人
負け犬が間際に残す捨台詞　射月芳
残りもので母と二人の昼がすみ　智子
一つだけみかん残して長話　しげお

佳

人間の悟りへ白髪だけ残り　雅文
地球儀に残る傷跡かるくない　年代
不器用な父が残してくれた地図　美房
握手して火薬の匂いがまだ残る　栞
子に残す地図は白紙のままがよい　諷云児

人

板塀に残る還らない時間　荒介

地

幾人を斬ればあしたを生き残る　結実

天

守り札割れたお蔭で生き残る　狸村

軸

もう少し踊っていたい悔い残る　弥生

兼題「機嫌」　西出楓楽選

機嫌よく遊んでいますワープロで　新正子
ドンキホーテの馬ご機嫌なほらを吹く　瑞枝
匂い袋に今日の機嫌が入れてある　幸
石投げて社長の機嫌たしかめる　度
たまには機嫌とってほしくて拗ねてみる　結美
ご機嫌を読む子にさせた夫婦仲　吸江
ご機嫌なグラス笑うて酌ぎこぼす　元江
ばら寿司に今日の機嫌が盛ってある　武庫坊
不愛想な顔で親父の上機嫌　柳宏子
ごきげんがまだ直らない鬼瓦　しげお

章

父の茶の無言は機嫌良い証　金太
機嫌よく政治を任せられますか　諷云児
不機嫌な鬼に飴玉しゃぶらせる　すすむ
庖丁の音もごきげん春うらら　柳太郎
茶柱が立ちご機嫌な朝に変え　栞
男子厨房に入っている機嫌　千秀
不貞寝する妻に干乾しにされている　いわゑ
機嫌よく孫に遊んでもらってる　年代
妻の機嫌イヤリングでは納まらぬ　小林英子　典子
機嫌よい酒は六腑にしみわたり　吸江
口笛を吹いて機嫌をさとられる　柳伸
言い勝ってだんだん機嫌悪くなる　敏
月末の機嫌を知っている財布　奏月
ご機嫌の男女がゆれる戎橋　重人
嫁ぐ娘へ父不機嫌な酒になる　寿美
不機嫌な訳北浜が知っている　たず子
不機嫌な妻を気にする脛の傷　美代子
機嫌よい日の盃がよく喋る　朱夏
ご機嫌は斜め雨だれ聞いてます　透太
機嫌よく遊んでもらう金がある　典子
不機嫌な日もあるだろう九官鳥　いわゑ

佳

ポットの湯新茶の機嫌知っている　作二郎
機嫌よく酔うと頑固も通じ合う　昭子
みそ汁の湯気の向うに居る機嫌　みつ子
機嫌とりに油断はしない距離をおく　人
ご機嫌な財布はすぐに軽くなる　美代子
モナリザの機嫌は今もわからない　地

不機嫌が溜る茶碗が欠けている　朱夏

天

機嫌よい時に庖丁研ぎたのむ　福本英子

軸

ライバルの機嫌を軽く見ぬように　楓楽

兼題「そのうち」　小出智子選

そのうちにデート許してもらえそう　白渓子
そのうちに一緒に住むと出たまんま　典子
平行線そのうち味方にして見せる　千万子
そのうちという曖昧な舌の咎　路子
そのうちに男の嘘がうまくなる　年代
そのうちに皆わかりだす社のピンチ　文秋
反抗期そのうち馴れるかと思い　年代
そのうちにいい仲になる予感する　敏
そのうちに孫はあぐらの中で寝る　愛論
そのうちが三月ですかと拗ねられる　どんたく
そのうちに時が癒してくれる傷　朱夏
そのうちにつまずくだろう有頂天　楓楽
呪文のようにそのうちを繰り返し　一二三
その内という気配りのむずかしさ　吸江
そのうちに帰りまっせと猫が言う　ダン吉
針千本そのうち彼は飲まされる　いわゑ
そのうちに母となる娘の雛あられ　章
地獄極楽いずれそのうち行くところ　諷云児

そのうちに忘れてしまうリクルート　武庫坊
そのうちに息子が折れてくれるだろう　月子
そのうちと言う約束を反古にせず　満津子
九十歳そのうちどうにかなるだろう　東雲
その内にその内に旬逃げて行き　柳宏子
そのうちにあなたの彩に染まります　幸
そのうちに父に気がつく子供の目　緑良
そのうちにあきらめられる初恋は　房子
捨て石となって出番を待ち続け　柳太郎
そのうちに売れる芸だとうどん食う　美房
そのうちにわかると自信ほのめかし　二南
そのうちに一人で生きることになる　正坊
そのうちを信じて水を掛けてやる　荒介
その内に脱皮する子と信じ切り　柳宏子
佳
そのうちに解ってくれる感情線　元江
そのうちにと思う女もゴキブリも　作二郎
そのうちのひとりとなって手を叩く　寿美
そのうちに誰も注意をしなくなる　新正子
そのうちに薬が効いてくる筈だ　松本文子
人
そのうちに笑いが消えてゆく漫画　幸
地
そのうちに忘れてくれるのも他人　保州
天
夢を見たとそのうち思えるようになる　たず子
軸
冬眠からそのうち覚めることだろう　智子

兼題「頁」　西尾栞選

花ことば春の頁で咲き給え　年代
革表紙ページに亡父のドイツ文字　みつ子
育児日記の頁に溢れる夢と愛　寿美
人生に私の頁作らねば　遊美
頁ごとに笑いの埋めてあるドラマ　鉱平
恩師へ捧ぐと最初の頁をあけてある　萬的
愚痴溜めた頁で重くなる日記　千秀
真っ白な頁はあなたへの想い　典子
それ丈の事書いてある頁です　凡九郎
白い頁をしっかと抱いている余生　吐来
屈託ない笑顔は春のページから　瑞枝
父の忌が雪の頁に書いてある　作二郎
空白の頁に憎い男いる　透太
頁数多い源氏に音をあげる　美津留
花しおり抱いた頁のものがたり　元江
指紋残して菜根譚の頁繰る　しげお
終章の頁を埋める乱れ髪　憲太郎
一頁あけて特種待つデスク　諷云児
亡母の日記の頁にある踏絵　雀踊子
暴落後株の頁は避けて読む　一二三
六法の頁をシャイロックが覗く　元紀
日記帳ここから恋がある頁　白渓子
直球で暮らした頃の一ページ　重人
睡眠薬代りに開く一頁　朱夏
へそくりをはさんだ頁忘れない　恵空
春の頁を開くのは蕗の薹　シマ子
歴史書のページに風穴あきました　金太
平成の頁は鳩でうずめよう　度
真相は最後のページに書いてある　敏
壁くずれ歴史は頁めくってる　ダン吉
補聴器を外しルーペで読む頁　太茂津
絵日記の頁頁にある本音　柳宏子
影武者がどの頁にも隠れてる　美房
佳
どの頁繰っても退屈な聖書　幸
次の頁に母の笑顔がきっとある　武庫坊
どの頁読んでも源氏物語　岳人
忘却の頁昭和は還らない　螢
離婚しよう六法全書の頁繰る　寿美子
人
どの頁開けても母の句読点　美代子
地
思い出の頁に妻は出てこない　ダン吉
天

青春のページ乱丁あってよし　楓楽
軸

リクルート消費税哀れ歴史の一頁　栞

川柳塔社常任理事会（3月1日）

▽4月本社句会から開場・締切を30分繰り上げ、兼題5・席題1とすることに決定。
▽川柳塔社業務運営規定を原案どおり決定。
▽路郎句碑除幕式を4月1日開催に決定。
▽阿部進（十和田市）村田善保（弘前市）金村青湖（出雲市）松村迷観子（香川県）の4氏の同人推薦を了承。

柳界展望

集録＝敏・武庫坊

★ふあうすと年間賞発表川柳大会は**4月29日**午前11時から兵庫県福祉センター＝JR灘・阪急王子公園＝で開かれる。会費二千円（記念品・昼食）、各題2句詠正午締切、欠席投句拝辞、宿題・選者次のとおり。

「囲　む」　藤井　高子選
「　掌　」　西川けんじ選
「契　る」かなもりかず枝選
「　今　」　大森　一甲選
「響　く」　土田　欣之選
「　平　」　和田　町子選
「破　る」　河面　湧泉選
「きらめく」去来川巨城選

★全国社会福祉協議会は**5月5日**からの児童福祉週間を記念して第1回川柳コンクールを開く。こどもから見た社会・家庭を題材とした〈こども部門〉と子育てや大人から見た現代のこども気質、生活を題材とした〈一般部門〉があり、応募はハガキ1枚に3句以内で**4月10日**までに東京都千代田区一ツ橋1－1－1毎日新聞社学生新聞本部川柳係へ住所・氏名・職業・年齢（こども部門は学校名・学年）を明記して送ればよい

★宮崎シマ子さんの路郎賞受賞お祝いの会は**4月8日**午前10時半、近鉄山本駅に集合、桃林堂陌草園で清水公照師の法話を聞き、午後1時から労働会館で句会を開く。兼題は、「さくら」「仲間」「風」「守る」

★大阪府立婦人会館は**4月17日**から毎週火曜日の午前10時－正午、5回にわたって川柳入門講座を開く。講師は高杉鬼遊（本社常任理事）氏、費用1500円、定員50名。申込は同会館へ

★川柳ねやがわは**5月20日**正午から秦公民館で15周年記念句会を開く。会費は1500円、兼題は「ベテラン」「積む」「順調」「半端」「応える」各題2句。なお、同会の平成元年度年間L賞は、小川速水氏が受賞した。

★守口市文芸展は2月9日から11日まで守口市民会館で開催。川柳部門の入選者は次のとおりで、橘高薫風氏が審査にあたった。

〈市長賞〉
初詣で湧くように人現われる　森川まさお

〈市議会議長賞〉
吊橋を渡るともとの声になる　結城　君子

〈市教育長賞〉
読めぬ字を読めぬまま見て書道展　山田　尚二

奨励賞には野呂右近・川口武幸・高橋晃国・羽原静歩武田信樹の五氏。なお俳画部門と俳句部門の審査は、直原玉青画伯が担当した。

★川柳塔わかやま吟社は平成元年度の4賞を決定。各賞第1位次のとおり。

〈あおい賞〉　小出智子選
ポケットの穴から洩れてゆく余生　上杉　信秋

〈たちばな賞〉福本英子選
会者定離愛が足りない訳じゃない　笹俣あや子

〈葵水賞〉　西田柳宏子選
適当にお湯が溢れている くらし　福井　桂香

〈課題吟賞〉　牛尾緑良選
玉乗りが上手に出来てからピエロ　山川　克子

▽**お便り**△

■児島与呂志氏（和歌山・参事）「菊田いさむさんの計に驚いています。いい人でした。貴方との差は余りあり逝き給う　合掌。」

新同人紹介

阿部　進
―甲吉・五楽庵推薦

村田　善保（ぜんぽ）
―甲吉・五楽庵推薦

金村　青湖（せいこ）
―紫香・薫風・代仕男・叮紅推薦

松村　迷観子（めいかんし）
―鬼遊・薫風推薦

4月各地句会案内

	日／時および題	会場と投句先
堺川柳会	1日(日)午後1時から 襟・映画・選ぶ・縁	堺総合福祉会館　南海高野線堺東駅市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2−9−2　河内天笑
川柳塔 まつえ	7日(土)午後1時半から 入社・ベレー帽・咲く	松江市雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
川柳塔 わかやま	8日(日)午後1時から 念　願・猫・狙　う	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14　野村太茂津
八尾市民 川柳会	8日(日)午前10時半集合 さくら・仲間・風・寄る	近鉄山本駅から花見吟行 〒581 八尾市弓削町南2−141　飯田悦郎 会費 1,000円　投句料 300円
西宮北口 川柳会	9日(月)午後1時から 葉・定食・自由吟	西宮市中央公民館　阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9−4　西口いわゑ 句会費 300円　投句料 62円切手4枚
尼崎 いくしま	13日(金)午後1時から 蘇る・地図・自由吟	サンシビック尼崎　阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号　田淵定人 句会費 300円　投句料 62円切手3枚
川柳 ねやがわ	15日(日)午後1時から 休日・切り札・楽しい・自由吟	寝屋川市立総合センター　寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町6−9　高田博泉 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
もくせい 川柳会	16日(月)午後1時から 靴・阪急・逃げる・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5−801　田中正坊
富柳会	19日(木)午後1時から 無意識・息子・夢中	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4−1　池 森子
高槻川柳 サークル 卯の花	19日(木)　正午から 資格・酔う・異動・自由吟	高槻市民会館306号室　阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市富田町1−7−7−905　福盛京童 句会費 500円　投句料 62円切手3枚　**各題2句**
南大阪 川柳会	19日(木)午後6時から 歩・物・夜・論	寺田町高松会館　JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1−5−2　金井文秋 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
南海 川柳会	20日(金)午後6時から 案内・独走・最後・不動	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15−18　寺井東雲
岸和田 川柳会	26日(木)午後6時半から 咲く・ドラマ・番号	岸和田市上町町会館　南海線岸和田駅東南徒歩10分 〒596 岸和田市上町7−36　植山武助
川柳 東大阪	28日(土)午後6時から 温い・ポーズ・笑う・世界	東大阪市立社会教育センター　近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5−6−23　桑原喜風 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
※駒つなぎ川柳会は3月で解散しましたが、23日(月)午後6時からお別れパーティーを開きます。		

★特に記載がない場合　句会費 500円、投句料 310円（62円切手5枚）、各題3句以内

原稿送り先（締切・毎月20日　予め決定している場合は何か月分でも結構です）

〒597 貝塚市地蔵堂53番地の5-1-401号　宮園射月芳

編集後記

☆今年から課題吟一路集の一年間の句の中から最優秀句に一路賞を贈ることになった。その最初に、牛尾緑良さんの句が選ばれた。また、各地柳壇賞は、吉岡美房さんに決定した。

☆去る二月二十五日、私たち四十数名が淡路島に出かけた。食事後、淡路文化史料館の直原玉青記念美術館を訪ね、常々川柳塔の表紙絵でご厄介になっている直原玉青先生の偉大さを心から感じた。続いて玉青山千福寺を訪ね、寺の奥さまに丁重にもてなして頂いた。

☆その後、宇原にある仁寿堂病院裏山の文学碑の森を見学していると、らくがき先生こと島太郎先生が今まで風邪で寝ていたとか言って、チャンチャンコ姿で来られ、いろいろと説明して下さった。八十幾歳とは見えぬその元気さには圧倒された。

☆過日、二十一回の日展を大阪市立美術館で見たが、その前に見た淡路島の玉青先生の渦潮の迫力に魅せられた私の目には、物足りない感じがしてならなかった。美しくは描かれているが、絵の中に詩のこころを感じられなかったのは私だけだろうか。

☆川柳の世界でも、鮮烈な言葉に自己陶酔してしまって、内容の乏しい句をよく見かけるが、本当の意味において人のこころに訴えるような句がほしいものだ。淡路島で出逢った生々庵先生の句「うき草は浮きくさなりに花が咲き」をもう一度、鑑賞してみることにしては如何なものだろうか。

（萬）

▼第二次海部内閣の顔ぶれが決まった。どの人たちも立派？である。しかし楽屋裏を覗くと、結構とばかり喜んでもいられない。雛段の人形じゃあるまいし数だけ並べて済むものでない。川柳吟社の役割分担ではない。一国の政治をつかさどる責任は万死に代えられないほど重いのである。それなのに各派閥に序列があって、特別に支障のない限り自動的に決まるらしい。派閥としてそれで事足りるだろうが、こんな内閣に誰が期待をするだろうか。なかには専門外の担当もあってまことに疑わしい。だから国会における代表質問に対する答弁は原稿の棒読みである。政治をしているのではなく、作文の朗読合戦である。かつての国鉄のように何時の間にか莫大な累積赤字を残して、知らん顔の大臣経験者がふえるだけである。平均六十三歳はまさに政治家として働き盛りである。何か仕事をして頂かなくてはならない。肩書の一つが目的であっては、国家に対して申しわけない。

▼編集後記に政治のことはあまり感心しないが、これを離れて存在はない。車が多いのか道路が少ないのか道路は車の洪水である。そのうちに車の上を道路が走り出すだろう。これは警察の責任ではない。政治の貧困である。生きてゆく限りこの世のことから目をそらさずに自分なりに考えてゆこうと思う。

（き）

★雲流る　中学卒業五十年

―およそ学校というものは卒業した者にとっては蟬の抜け殻と同じで、ほとんど価値のない代物だと思っているので、学歴や出身校を鼻にかける人は、あまり好きになれない。そして私自身、戦争中という時代のせいもあって、学校生活にあまり良い思い出を持っていないので、同窓会やクラス会にはご無沙汰がちで、ほとんどかかわりを持たずにすごしてきた。

★ところが、昨秋、魔除けの虎で有名な神農（しんのう）さんこと少彦名神社の例祭日に、大阪市中央区（旧東区）にある小学校のクラス会が会合を開くという案内状が舞い込み、母校が今年かぎりで廃校になるということもあって、何十年ぶりかで出席した。そうすると今年に入ってから、中学校の同期生会から三月に例会を開くという通知があった。案内の文面によると、今年は卒業してから満五十年にあたるという。いささかの感慨もあって、卒業以来、初めて参加した。

★最終学校のクラス会だけは、ここ十年来、「老朋友の会」と名づけて毎年、各地で開催し、今年は〝花の万博〟にあわせて四月に大阪で行うことになっているが、重なれば重なるものでこんどは、私がかつて勤務した新聞社の社会部YB・OB会からひさしぶりで交歓会を開きたいという招請状が届いた。これで長く人間をやってきた私の古巣の集いがすべて出そろったことになる。

（正）

羽原静歩川柳句集「雪月花」発刊記念　本社4月句会

日時　4月6日（金）午後5時半
会場　メンズファッションセンター3階
中央区内本町1－1　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（2番出口）交差点西南角

おはなし　吐田公一
あいさつ　羽原香苗
兼題「縁」　羽原静歩選
「宝石」　神夏磯典子選
「雪」　大矢十郎選
「月」　橘高薫風選
「花」　西尾栞選

席題　1題　当日発表　各題2句以内厳守
会費　500円
投句　投句料310円（62円切手5枚）同封のこと

本社5月句会　2日（水）

兼題　「地獄」「歩く」「粉」「垢」「飲む」

作品募集

6月号発表（4月15日締切）

川柳塔（10句）　西尾栞選
水煙抄（10句）　黒川紫香選
銀河系（3句）　河内天笑選
茴香の花（3句）　八木千代選

課題吟（3句）
「泥」　矢内寿恵子選
「消す」　三宅保州選
「電波」　江口度選

初歩教室「呼出し」（3句）　辻白渓子担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

7月号課題吟　「仏」「送る」「童謡」

○同人費・誌代などのご送金は、川柳塔社会計室（高杉鬼遊方）へお願いします。
〒581 八尾市中田2－302
振替口座　大阪 8－33368
誌代　半年分 3,800円（送料共）
1年分 7,500円（送料共）

NHK川柳作品募集

課題「花」　森中恵美子選
ハガキに3句　4月10日締切
投句先　大阪市中央区馬場町3－43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係
発表　4月29日（日）ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「順番」　森中恵美子選
ハガキに3句　4月15日締切
投句先
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2－20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送　川柳係

定価　六百円（送料51円）
平成二年三月二十五日印刷
平成二年四月一日発行
編集兼発行人　西尾厳
印刷所　藤原童心社
〒545
大阪市阿倍野区三明町二－一〇－一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六三六－六九一四番
振替口座大阪8－三三三六八番

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成二年三月二十五日　印刷
平成二年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七五五号　川柳塔　四月号
定価　六百円（送料　五十一円）

NEW FORMAL COLLECTION

泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた。
男のロマンと
フォーマルと。

OSK JEFF ORIGINAL DESIGN

株式会社大一エスケー
〒540　大阪市東区南新町1－13
☎ 06(941) 8 0 1 5

豚饅は、ふくれて大きくなることや、丸々とふくよかな形から子孫繁栄、福徳円満のシンボルとされています
現在、中国では正月や誕生日などの行事に中華饅頭（包子）をつくって祝う習慣も定着しているようです

家庭豚まん円

戎橋筋本店、有名百貨店・
地下街でお求めください。

551 HORAI　蓬莱

雑誌　05703－4